1．にぶい黄褐色10YR5/3砂質土

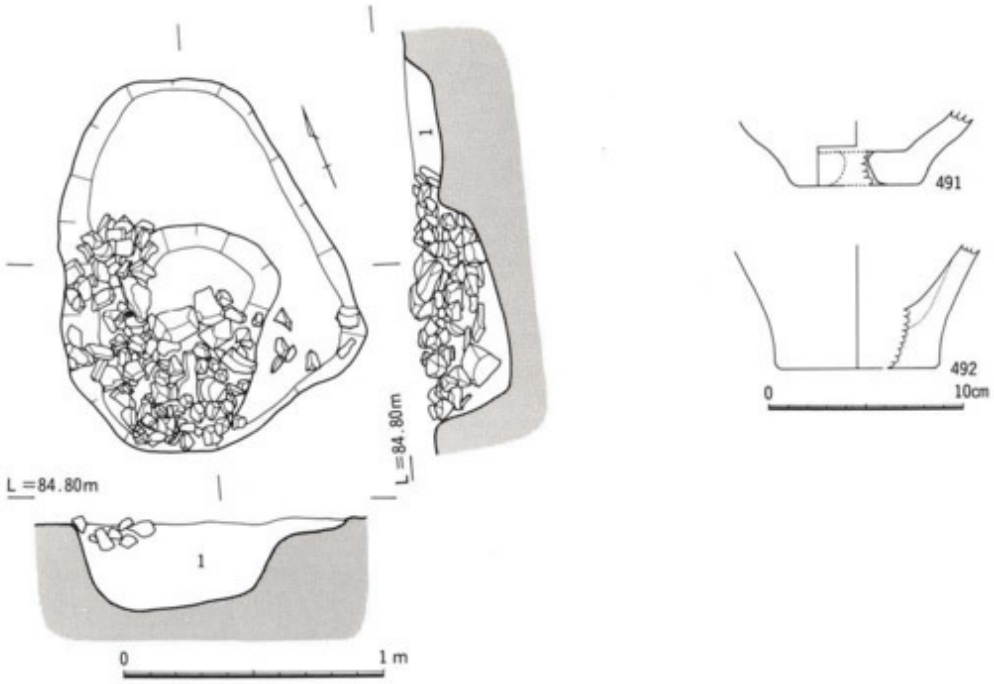
第100図　SK1061遺構実測図

頸部から緩やかに外反する口縁部を持つ広口壺形土器である。頸部から体部上半にかけて櫛描の直線文・波状文・円弧文を施す。489は体部倒卵形、口縁は緩やかに屈曲して直立気味に短く立ち上がる。

490は砂岩の円盤状の自然石を利用した砥石である。表裏面、一側面が凹面をなすほどに使用されている。

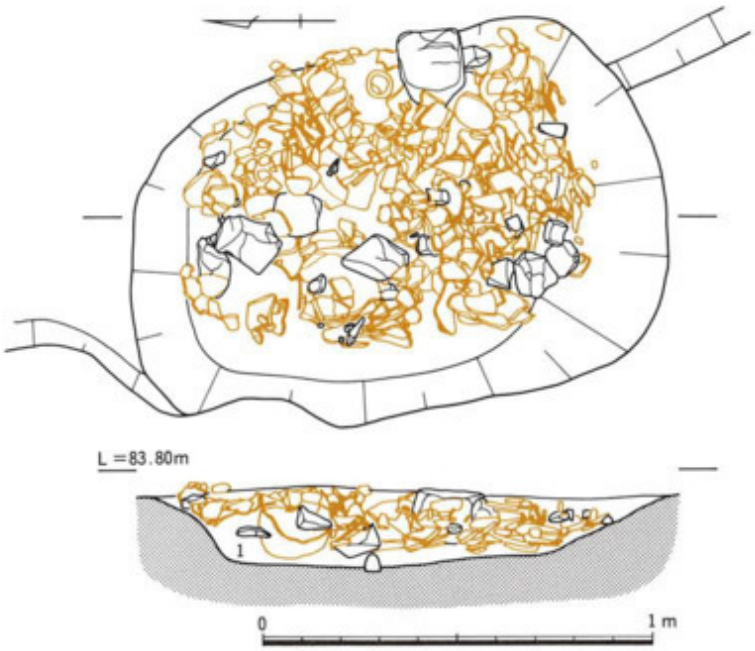
集石土坑（SK1061）（第100図）

第7調査区（Z・AA－23・24）のSB1008北半部で検出された。長軸2.08m、短軸は1.92mの隅丸方形状の土坑である。北半は一段深くなり、最深部で25cmを測る。土坑中央で長軸1.6m、短軸1.1mの範囲の楕円形状に砂岩角円礫が集中して出土しており、その中に少量の土器片が混じっていた。住居廃棄後に構築されたものと考えられる。



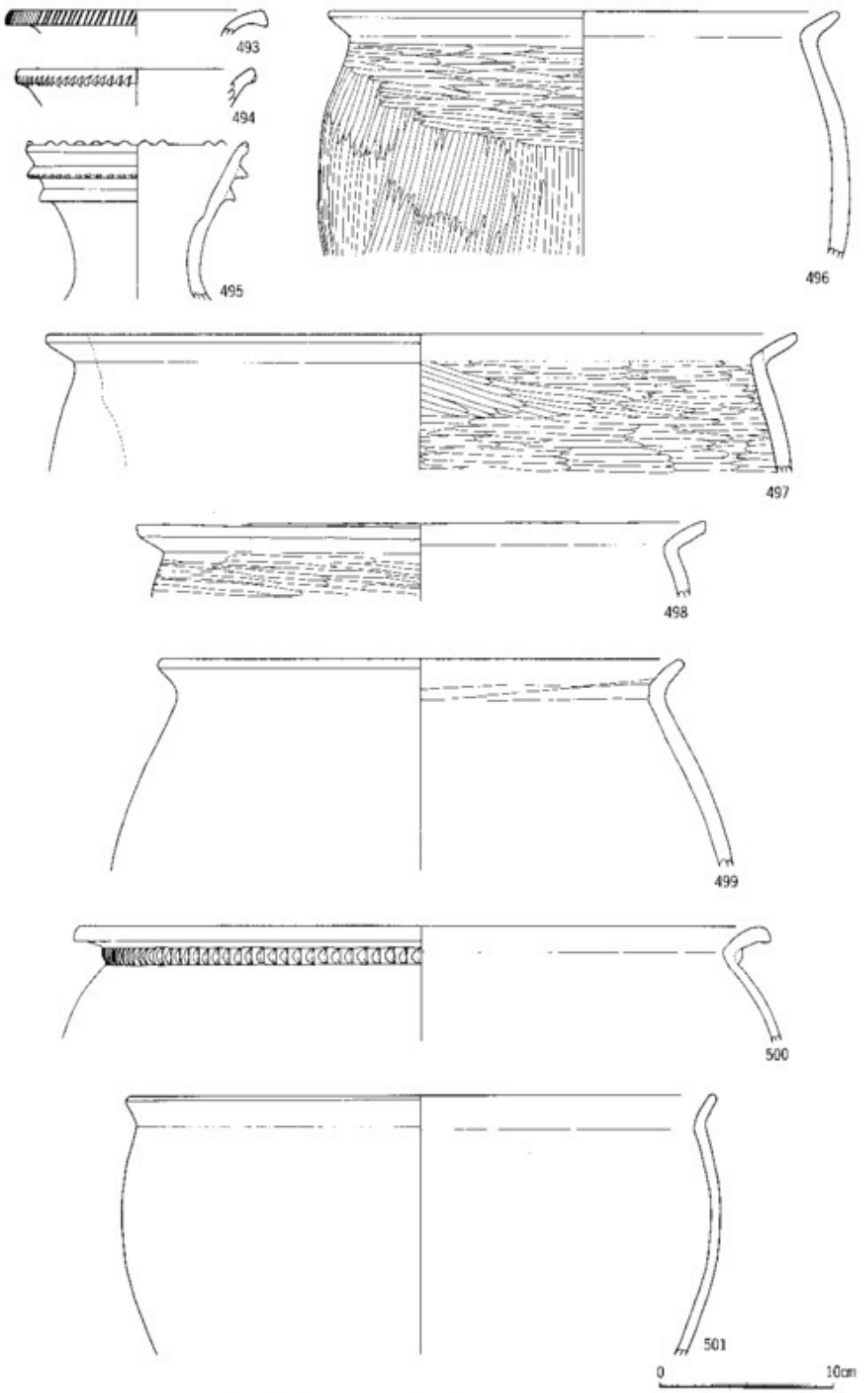
1．にぶい黄褐色10YR5/4砂質土

第101図　SK1168遺構・出土遺物実測図

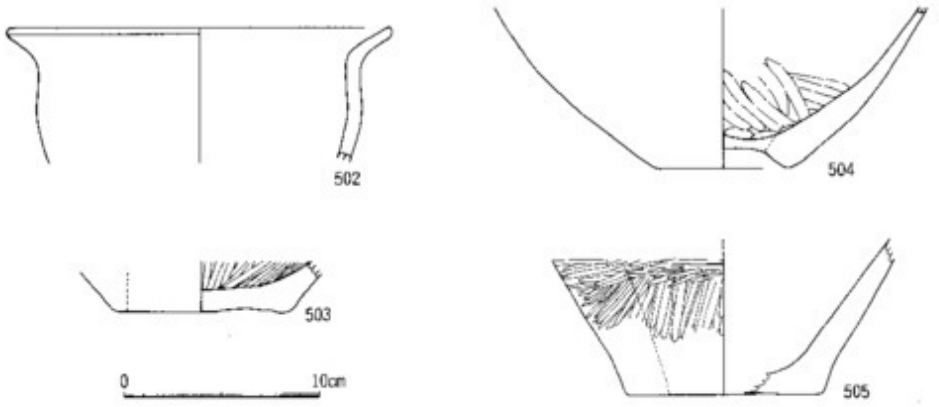


1．暗褐色10YR3/3粘性砂質土

第102図　SK1178遺構実測図



第103図　SK1178出土遺物実測図　(1)



第104図　SK1178出土遺物実測図　(2)

出土遺物

弥生土器片が少量出土しているが、当初、SB1008の炉を土坑内に含めて検出、出土遺物もまとめて取り上げているため点数は明かではない。ちなみに炉を含めた出土点数は476点である。

集石土坑（SK1168）（第101図）

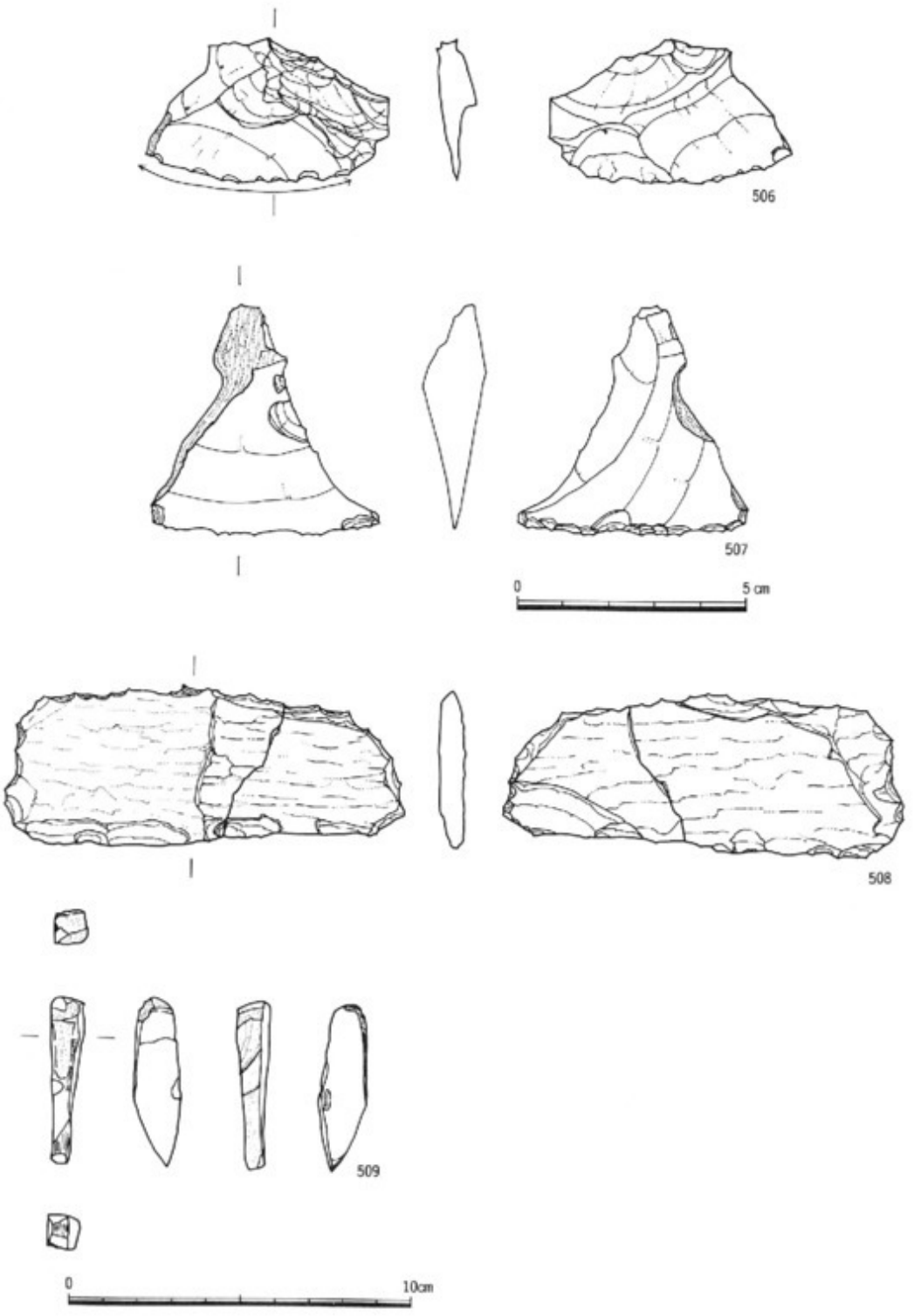
第11調査区（AE－23）、SB1010の北西部に接して検出された。長軸1.4m、短軸1.1m、深さ33cmを測り、平面形は隅丸台形状、西北よりで楕円形に一段深くなる部分があり、その部分に砂岩礫が集中して出土した。他の遺物は少なく、弥生土器片とわずかなサヌカイト片が出土しているだけである。

出土遺物（第101図）

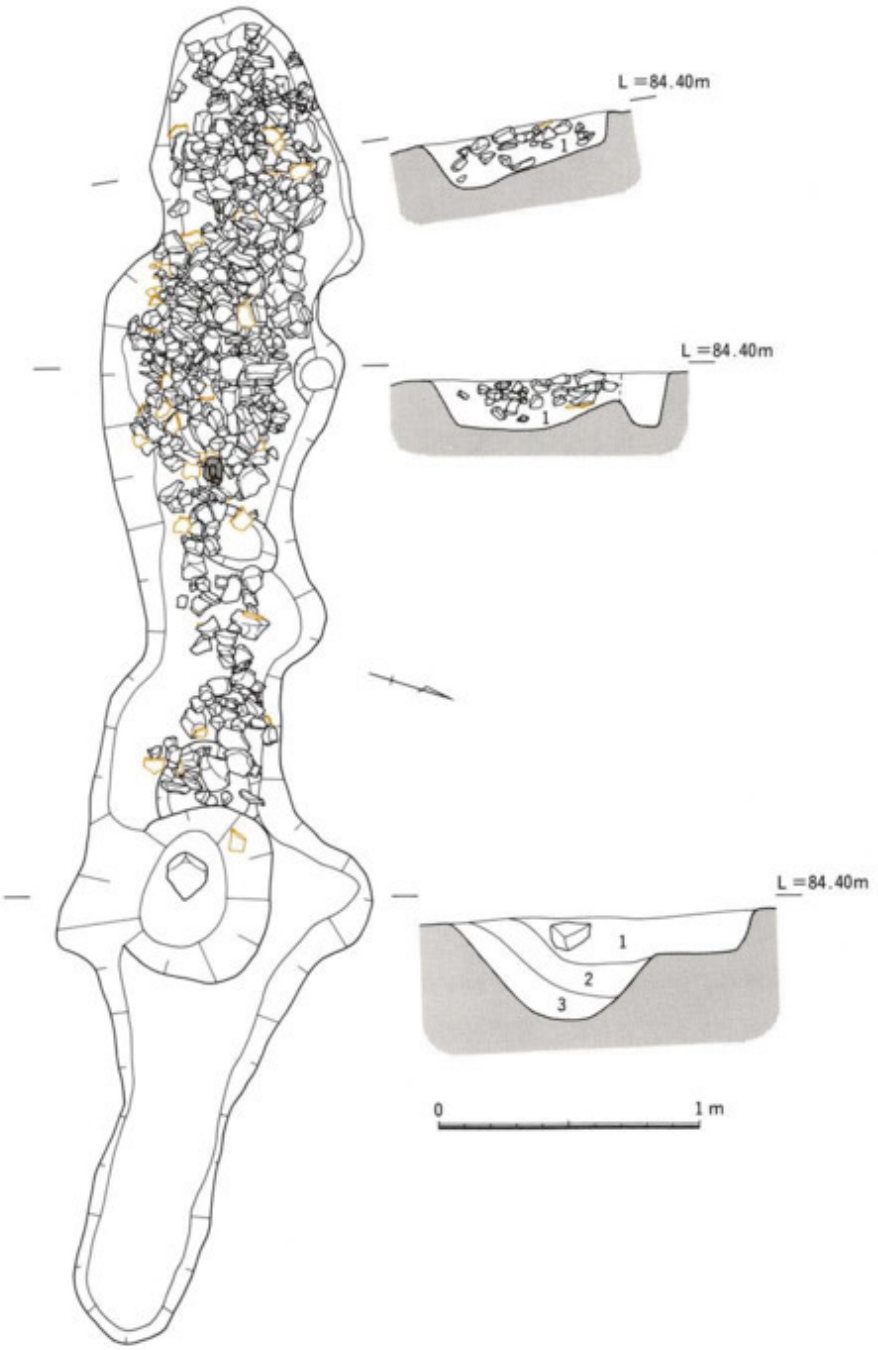
弥生土器片が17点と、3点のサヌカイト片が出土している。491の底部は焼成前の穿孔が認められる。

集石土坑（SK1178）（第102図）

第9調査区（AD－28）でSB1006の周壁に重なって検出された。長軸1.40m、短軸0.93mの隅丸長方形を呈し、断面皿形で深さは20cmを測る。壺形・甕形の土器片を破砕し、上部は砂岩角円礫と土器細片で被覆していた。出土土器は細片が多く、全体が復元できるほどの分量はない。また、土器には熱を受けているものか、変質しているものが含まれている。他に、打製石庖丁などの石器を伴う。

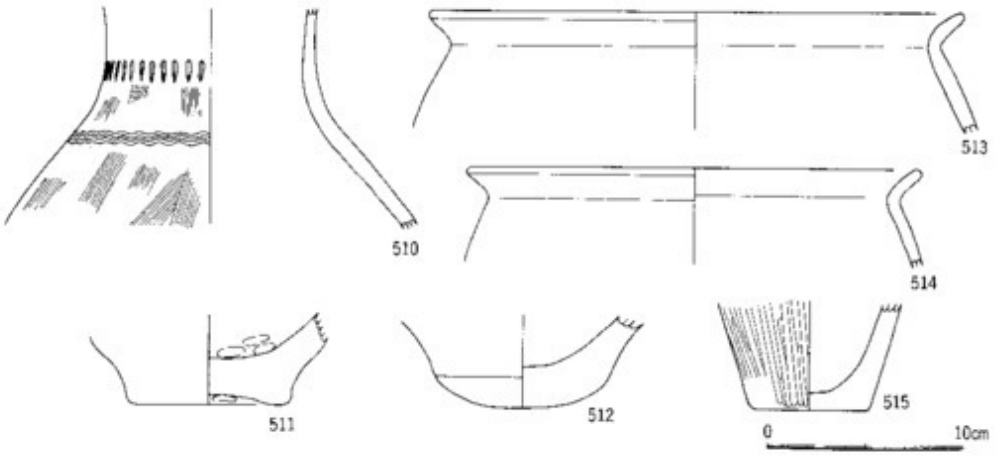


第105図　SK1178出土遺物実測図　(3)



1．にぶい黄褐色10YR6/3砂質土
2．にぶい黄褐色10YR5/3砂質土
3．明黄褐色10YR6/6砂質土
（網目の遺物は石器をあらわす）

第106図　SD1001遺構実測図



第107図　SD1001出土遺物実測図

出土遺物（第103～105図）

弥生土器片1,775点をはじめ、スクレイパー２点、磨製石斧１点、打製石庖丁１点が出土している。

493・494は広口壺形土器で口縁端部にヘラ状工具による刻みが施される。495は漏斗状の口頸部を持つ壺形土器であるが、断面三角形の刻目突帯を２条巡らし口縁端部には２つ単位の粒状突起が８カ所に付く。この土器は変質・変形が激しく、表面は剝落している。496～500は「く」の字状に屈曲して外反する口縁部をもつ甕形土器である。500はヘラ状工具による圧痕文突帯を巡らす。他のものも口縁部直下がヨコヘラミガキで調整されている点に特徴がある。501・502は半球形の体部から屈曲してわずかに外反する口縁部を持つ鉢形土器である。503・504は内面にミガキが認められ、鉢形土器の底部と考えられる。

506・507はサヌカイト製のスクレイパーで、506は一辺に使用痕、507は片面調整による刃部を形成している。508は結晶片岩製の打製石庖丁。509は小型方柱状片刃石斧である。泥岩製で両側辺は欠損している。

集石土壙（SD1001）（第106図）

第２調査区（Y・Z－16・17）で検出された、溝状の遺構である。ほぼ東西に延び、規模は長さ5.05m、幅0.42m程度、深さは30cm程度で、断面形は、逆台形ないしはU字状を呈している。４カ所ピット状のくぼみがある。この遺構の特に西半において、弥生土器片と砂岩角円礫が集中して出土した。弥生土器片の分量は比較的少なく、砂岩角円礫は検出面から盛り上がって検出された。礫中には黒色チャート円礫が含まれている。砂岩円礫の中に赤褐色に変色しているものが含まれていることなどから火の使用があったことが推定できるが、炭化物等は目立たず、明確ではない。

出土遺物（第107図）

弥生土器片は587点を数える。叩石２点、結晶片岩２点、黒色チャート礫４点が出土している。510は広口壺形土器の頸体部で、頸部と体部の境は明瞭ではない。頸～体部上半に刺突列点文と櫛描波状文が施されている。513・514は甕形土器で、「く」の字状に屈曲して外反する口縁部をもつ。端部は丸く曖昧に仕上げている。511はやや上げ底、512は丸底、515は平底を呈する。

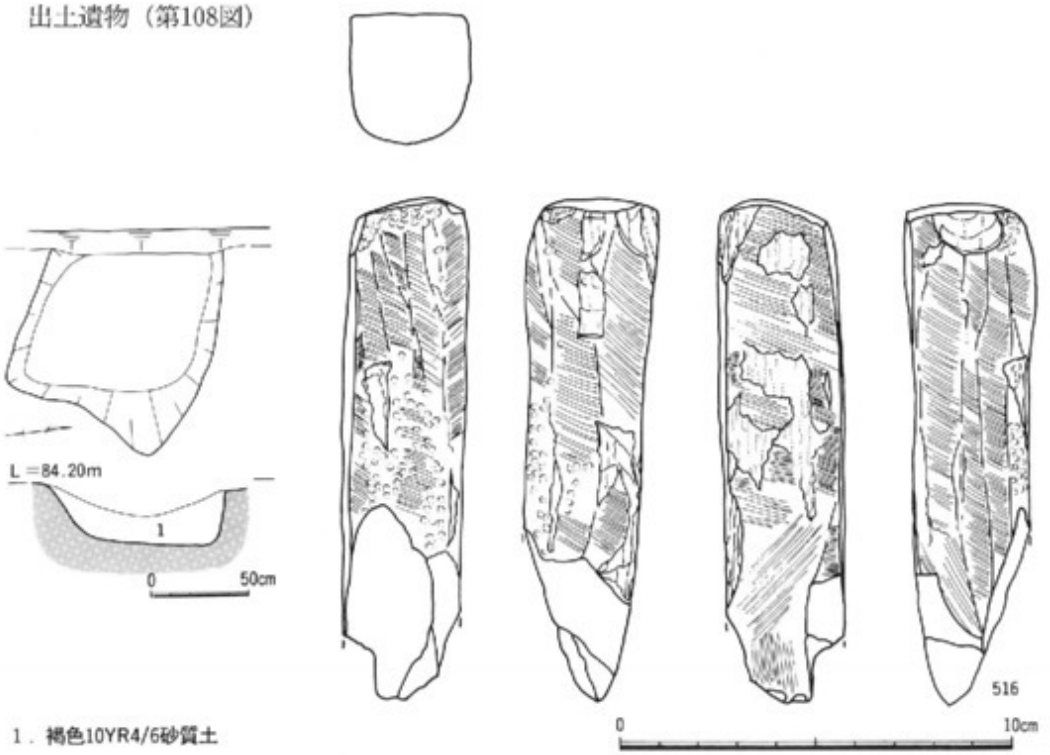
④　土坑・土壙墓

土壙墓（SK1017）（第108図）

第２調査区（W－15）で検出された、長方形の土壙墓である。調査区外に延びている部分があるが、検出部分で、長軸0.9m、短軸1.03m、深さは32cmを測る。刃部を欠損した柱状片刃石斧が１点出土しており、副葬遺物と考えられる。周辺は、集石土壙が点在するが、集石を伴わない土壙墓と推定できるのは、本遺構だけである。

なお、中世の建物（SA1001）の柱穴が重なっている。

出土遺物（第108図）

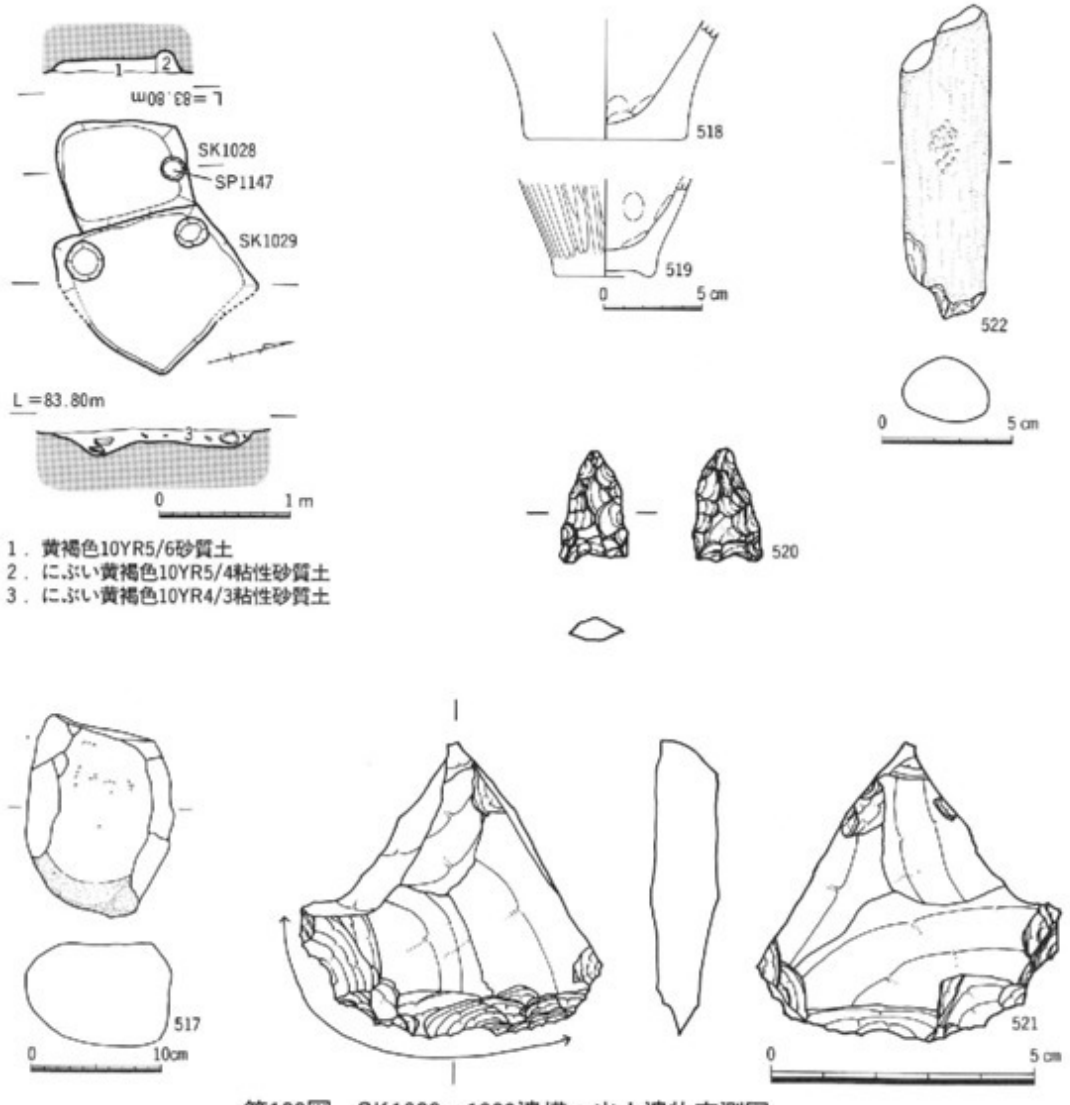


第108図　SK1017遺構・出土遺物実測図

覆土からは、柱状片刃石斧が1点出土している（516）。表面の抉り入りは退化して消えている。原材の形状にあわせたものか、方角柱ではなく、表面側がいくつもの稜を持ち、丸みをおびた形となっている。

土坑（SK1028）（第109図）

第2調査区（W－18）で検出された土坑である。長方形の本土坑をSK1029が切って構築されていると判断した。両土坑の上に、中世の建物（SA1002）が建てられていたと考えられ、柱穴（SP1147）の重なりなどから、遺物が混入している。検出規模は、長軸1.0m、短軸0.74mの長方形状で、深さは14cmを測る。



第109図　SK1028・1029遺構・出土遺物実測図

出土遺物（第109図）

弥生土器片95点と砥石１点が出土している。弥生土器片は体部の破片がほとんどである。517は砂岩の砥石である。自然の円礫を利用し、１面に砥面をもつ。

土坑（SK1029）（第109図）

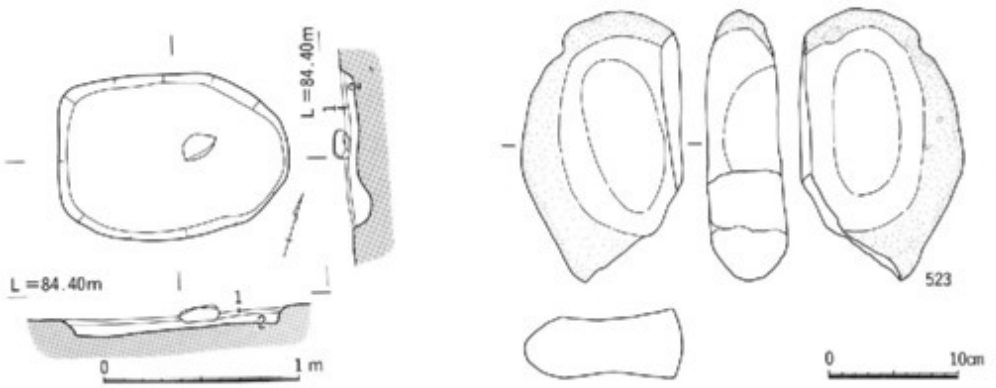
W－18グリッドで、第２調査区と第７調査区にまたがって検出された。不整方形の土坑である。中世の遺物と、大量の弥生土器が混在する。中世の建物（SA1002）が重なっていることが、その原因と考えられ、中世の遺物はSA1002に帰属すると捉えた。検出規模は、長軸1.24m、短軸の中央部分で1.06m、深さは21cmを測る。

出土遺物（第109図）

覆土からの出土遺物は、弥生土器片363点、石鏃１点、スクレイパー１点、磨製石斧１点、叩石１点がある。弥生土器片はその出土量に比して、図化可能な個体は少なく、甕形土器の底部だけである。518は平底、519はわずかに上げ底を呈している。520は凹基無茎の石鏃、521は下辺に粗い両面調整を施したスクレイパーである。522は棒状の叩石である。下端部に強い打撃痕、中央部に粒状の敲打痕が集中する。

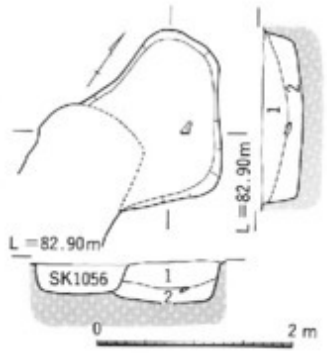
土坑（SK1034）（第110図）

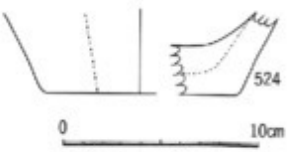
第３調査区（R－18）で検出された。やや角ばった楕円形を呈し、長軸1.18m、短軸0.86mで、上面は削平を受け、現存深は最深部でも12cmである。中央に砂岩の砥石が出土している。覆土は２層に分層でき、下層には炭化物が含まれている。

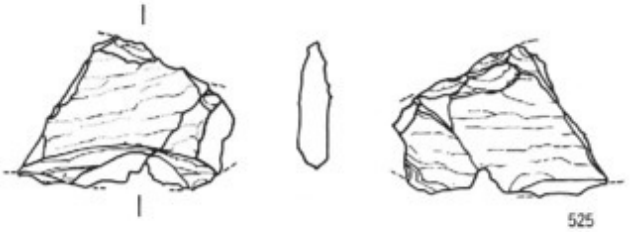


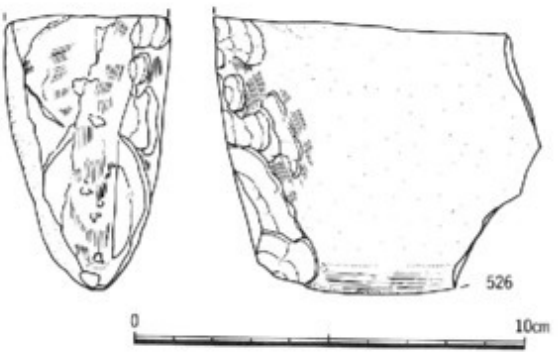
1．にぶい黄褐色10YR5/4砂質土
2．にぶい黄褐色10YR4/3砂質土（炭化物含む）

第110図　SK1034遺構・出土遺物実測図









出土遺物（第110図）

砥石が１点出土している。砂岩の自然の円礫を利用したものであるが、表裏面ともに砥面は凹面を呈し、右辺は凸面であるが、いずれも入念に使用されている。熱を受けているものか赤褐色に変色している部分がみられる。

第111図　SK1051遺構・出土遺物実測図

土坑（SK1051）（第111図）

第８調査区（Z・AA－25・26）で検出された。長軸1.72m、短軸1.06mの隅丸方形状の土坑で、削平の影響を受けている地点であるが、深さは40cmを測る。覆土は２層に分層される。出土遺物は欠損が著しく、廃棄土坑の可能性が考えられる。

中世の土壙墓SK1056が重なっている。

出土遺物（第111図）

弥生土器片19点、打製石庖丁片１点、不明石器１点が出土している。524は壺形土器の底部と考えられる。平底を呈し、大形品と思われる。525は欠損が激しいが、縁辺に調整痕が残っていることから、打製石庖丁と考えられる。526は、自然石の側辺を敲打し、敲打箇所を研磨

している。磨製石斧の未製品の一部と考えられる。

土坑（SK1057）（第112図）

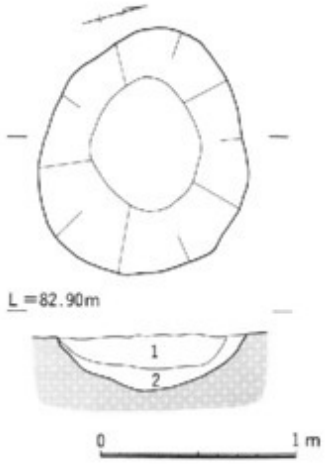
第8調査区（Z－27）で検出された楕円形の土坑である。長軸1.28m、短軸1.07mを測り、深さは28cmである。

出土遺物（第112図）

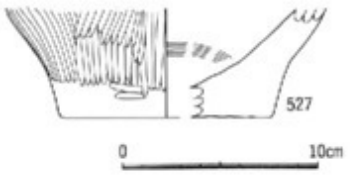
覆土からは、弥生土器片が30点出土している。527は壺の底部とみられ、体部外面タテヘラミガキが顕著である。

土坑（SK1062）（第113図）

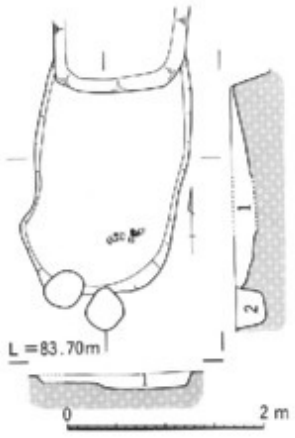
第7調査区（Z－23）で検出された。竪穴住居跡（SB1008）に先行して構築されていた隅丸長方形の土坑である。検出規模は、短軸が1.50m、長軸は試掘坑に切られているが、検出



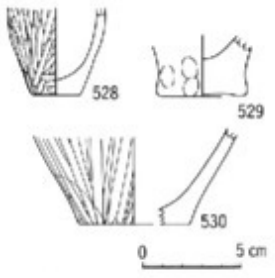
1．褐色10YR4/4砂質土
2．にぶい黄褐色10YR5/4砂質土



第112図　SK1057遺構・出土遺物実測図



1．にぶい黄褐色10YR5/4砂質土
2．褐色10YR4/6砂質土



第113図　SK1062遺構・出土遺物実測図

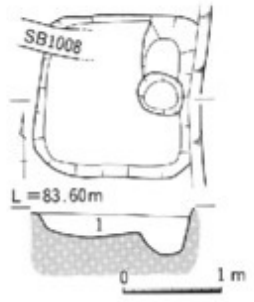
部分で2.08mを測る。深さは検出面から25cmである。多くのピットが、住居構築時あるいはその後に重なっている。ミニチュア土器等がまとまって出土した箇所がある。

出土遺物（第113図）

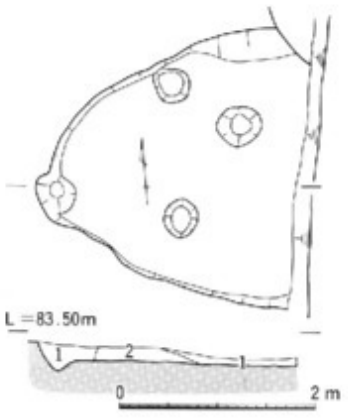
弥生土器片145点、サヌカイト片１点が覆土から出土している。528はミニチュアの壺形土器とみられる。外面は単位の短いタテヘラミガキで丁寧に仕上げられている。甕形土器の底部529は、ほぼ平底で、分厚く小さい。530は平底で直線的に立ち上がる。

土坑（SK1063）（第114図）

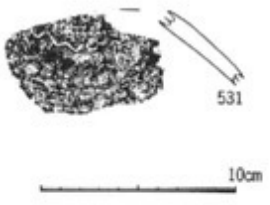
第７調査区（Y・Z－23・24）で検出された。隅丸方形の土坑で、一辺が1.55m、深さは24cmを測る。周壁溝が一部重なっていることから、SB1008に先行して構築されていたものと考えられるが、周壁溝を検出できたのが遺構掘削後であり、続きは判明していない。壁側中

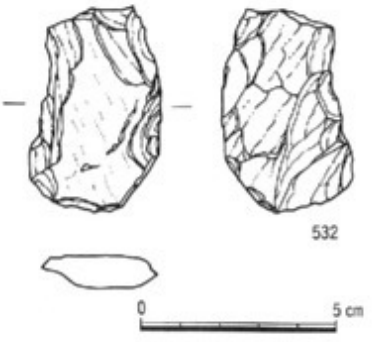


1．褐色10YR4/4砂質土



1．褐色10YR4/4砂質土
2．にぶい黄褐色10YR5/4砂質土





第114図　SK1063遺構・出土遺物実測図

第115図　SK1068遺構・出土遺物実測図

央にピット状のくぼみがあるが、土層では別遺構との認定はできなかった。

出土遺物（第114図）

弥生土器片が201点出土しているが、ほとんど細片である。531は壺形土器の体部上半で、櫛描の直線文と波状文を交互に施す。

土坑（SK1068）（第115図）

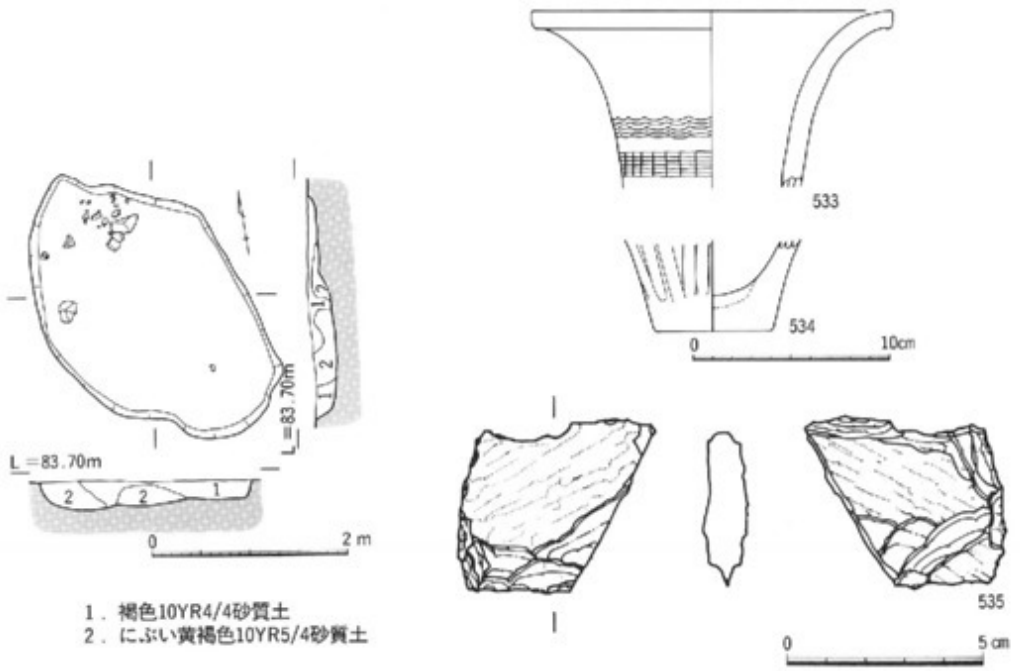
第7調査区（Y・Z－23・24）で検出された楕円形土坑である。検出部分の長軸は2.68m、短軸は2.80m、深さは28cmを測る。埋没後に4基のピットが重なっている。覆土は2層に分層できる。

出土遺物（第115図）

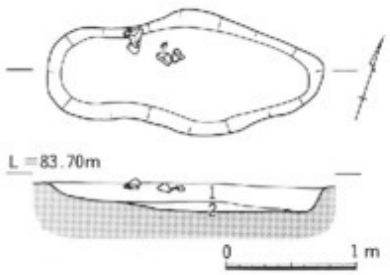
弥生土器片が72点、打製石庖丁片1点、石斧未製品が1点出土している。532は石斧の未製品とみられる。縁辺を敲打し、形を整えている段階とみられる。

土坑（SK1069）（第116図）

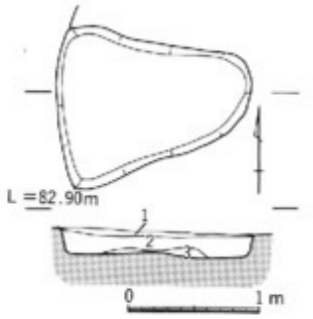
第7調査区（Y－22・23）で検出された不整楕円形の土坑である。長軸3.20m、短軸2.00mで、深さは21cmと浅い。北端に遺物の集中する部分がみられる。覆土は2層に分層でき、



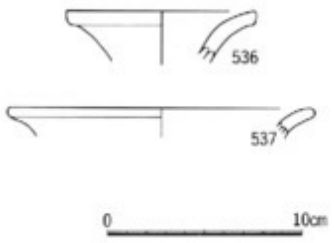
第116図　SK1069遺構・出土遺物実測図



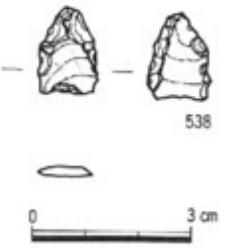
1．褐色10YR4/4砂質土
2．にぶい黄褐色10YR5/4砂質土



1．褐色10YR4/4砂質土（炭化物を含む）
2．褐色10YR4/4砂質土
3．にぶい黄褐色10YR5/4砂質土



第117図　SK1075遺構・出土遺物実測図



第118図　SK1082遺構・出土遺物実測図

やや複雑な堆積となっている。

出土遺物（第116図）

覆土からは弥生土器片173点、打製石庖丁１点が出土している。壺形土器（533）は、広口壺形土器である。ラッパ状に開く口頸部をもち、頸部に櫛描の波状文と簾状文を巡らせている。534の底部は、甕形土器のものとみられ、平底を呈する。535は打製石庖丁の破片である。端部に抉りはみられない。

土坑（SK1075）（第117図）

第７調査区（X・Y－21）で検出された。SB1003の北側に隣接し、主軸はほぼ東西である。長軸2.15m、短軸1.00mの長楕円形を呈しており、深さは21cmを測る。

出土遺物（第117図）

覆土の上面で、弥生土器片26点が出土している。536は、ラッパ状に大きく開く口頸部を持つ小型の広口壺形土器である。

537は、甕形土器の外反する口縁部である。

土坑（SK1082）（第118図）

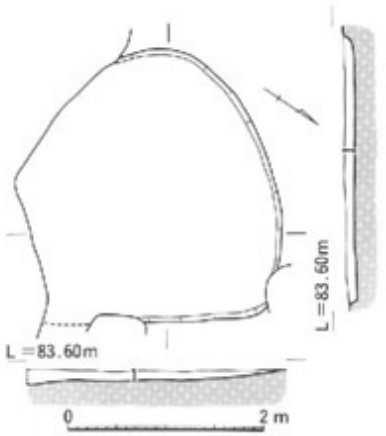
第7調査区（U－22）で検出された土坑である。SB1004の拡張後の周壁溝を切って構築されている。土坑上面で炭化物の広がりが顕著であった。検出規模は長軸1.54m、短軸0.91mの不整方形を呈している。深さは19cmである。

出土遺物（第118図）

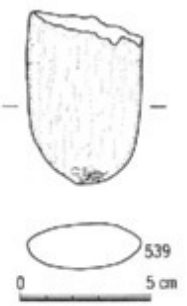
弥生土器片が50点、サヌカイト片が72点、結晶片岩片が2点、石鏃が1点である（538）。サヌカイト片が多いのは、石器製作を行っていたSB1004に重ねて構築された結果と推察できる。

土坑（SK1109）（第119図）

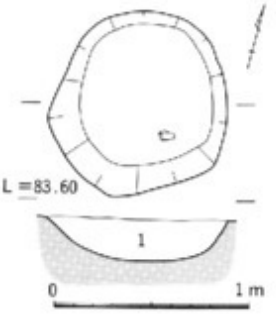
第6調査区（R－7・8）で検出された不整円形の大形土坑である。一部調査区外に延び



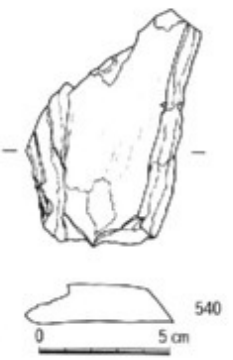
1．にぶい黄褐色10YR5/4砂質土



第119図　SK1109遺構・出土遺物実測図



1．にぶい黄褐色10YR5/4砂質土



第120図　SK1111遺構・出土遺物実測図

ているが、検出規模は長軸、短軸ともに2.7mを測る。深さは16cm、底面は平坦である。

出土遺物（第119図）

弥生土器片が31点、叩石が１点、出土している。539の叩石は破損しているが、扁平な棒状の結晶片岩で、先端部に粒状の敲打痕が観察できる。

土坑（SK1111）（第120図）

第６調査区（R・S－８）で検出された。長軸0.98m、短軸0.93mのほぼ円形の土坑である。断面形はU字状で、深さは23cmを測る。SK1057と同様の形状をしている。

出土遺物（第120図）

弥生土器片が５点、緑色片岩製の小型の砥石が１点出土している。540は、自然面を砥面とする砥石であるが、縁辺を強い敲打により、粗調整している。打製石庖丁ないしは磨製石斧に転用途上のものとみることもできる。

土坑（SK1127）（第121図）

第９調査区（AD－27）でSB1006の西側に隣接して検出された。長軸2.84m、短軸1.20mの不整な三角形状を呈する。底面は複雑な凹凸があり、深さは最深部で27cmを測る。

出土遺物（第121図）

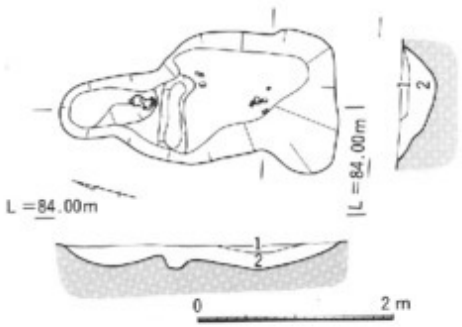
覆土から出土したのは、弥生土器片が204点、サヌカイト片が13点、結晶片岩片２点、叩石２点である。弥生土器は細片で図化できるものはない。541は土器片利用の紡錘車である。表面から穿孔中で、貫通していない。542～544は石鏃である。542は浅い凹基、あとは平基の無茎鏃である。545～547は楔形石器。548は打製石庖丁片であり、端部には抉りが施されている。

土坑（SK1129）（第122図）

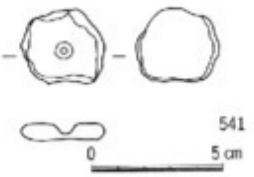
第９調査区（AC・AD－28）で、SB1006の南側に隣接して検出された。長軸1.16m、短軸1.10mの不整な楕円形を呈し、深さは最深部で36cmを測る。最深部の上面に遺物が集中して出土した。

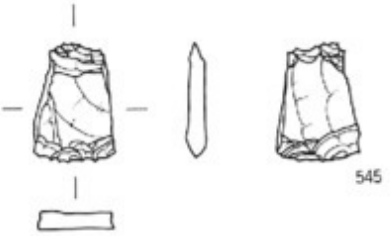
出土遺物（第122図）

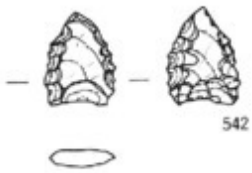
砂岩礫とともに弥生土器片23点、サヌカイト片５点、叩石１点が出土した。549は叩石である。ハンレイ岩の円礫を利用し、側縁を中心に粒状、筋状の敲打痕が観察できる。

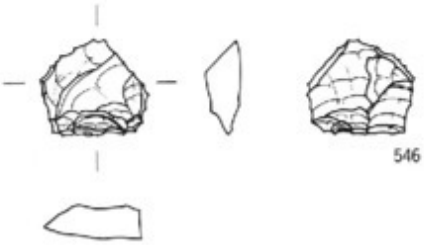


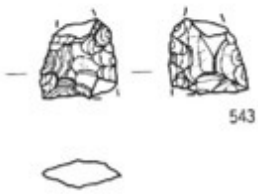
1．にぶい黄褐色10YR5/4砂質土
2．褐色10YR4/4砂質土

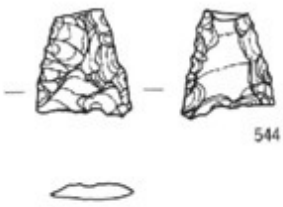


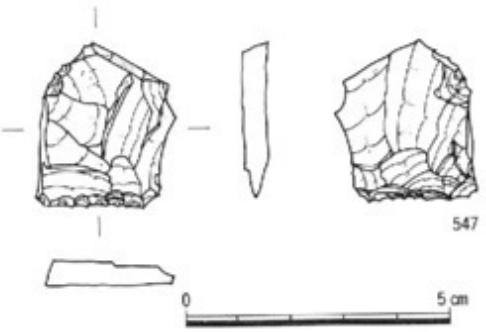


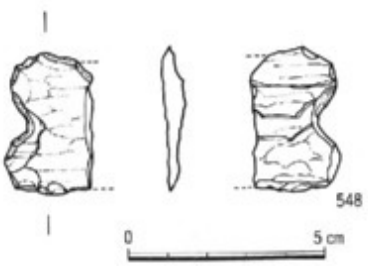




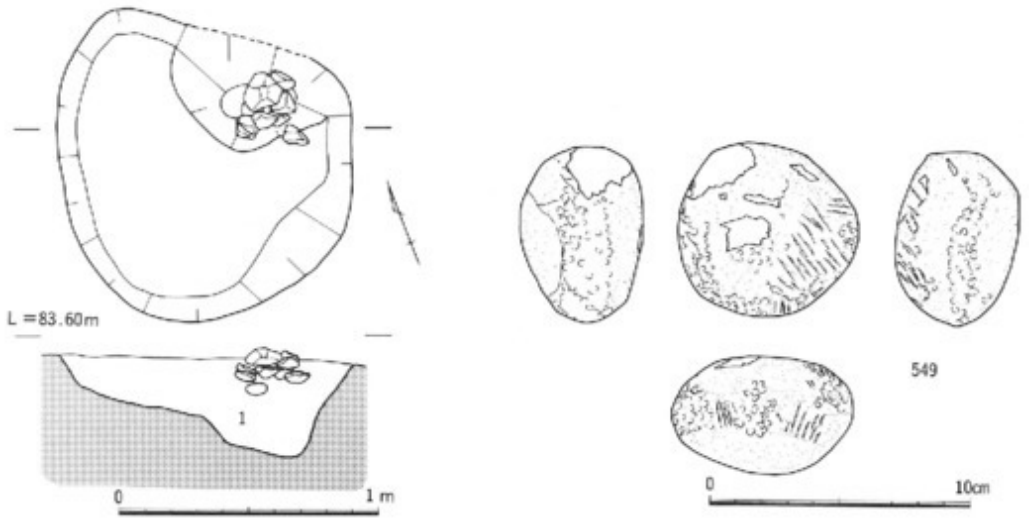








第121図　SK1127遺構・出土遺物実測図



1．にぶい黄褐色10YR5/4砂質土

第122図　SK1129遺構・出土遺物実測図

土坑（SK1132）（第123図）

第9調査区（AE－29）で検出された。長軸1.01m、短軸0.94mの不整な隅丸方形状で、平坦な底面までの深さは、13cmと浅い。出土遺物から、後期の遺構と判断できる。

出土遺物（第123図）

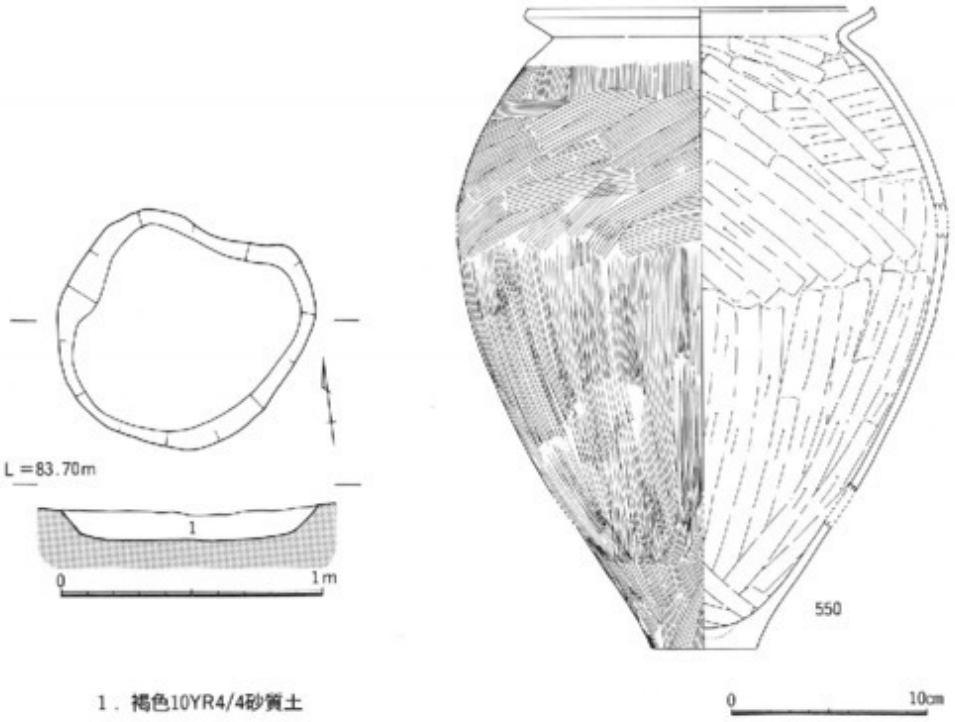
弥生土器片が37点出土している。550の甕形土器を図上で復元した。倒卵形の体部から「く」の字状に屈曲して外反する口縁部をもち、端部はわずかにつまみ上げる。体部外面は主にタテハケ、内面は全面に丁寧なヘラケズリを施す。形態・技法から、後期前葉の所産と考えられる。

土坑（SK1133）（第124図）

第9調査区（AE－29・30）で検出された。長軸1.29m、短軸0.86m、平面形は不整な楕円形を呈し、深さ11cmで、断面形皿形である。中央部の覆土上面で、弥生土器片が集中して検出された。遺物は、弥生土器片130点、サヌカイト片1点であるが、図化に耐え得る個体はない。

土坑（SK1157）（第125図）

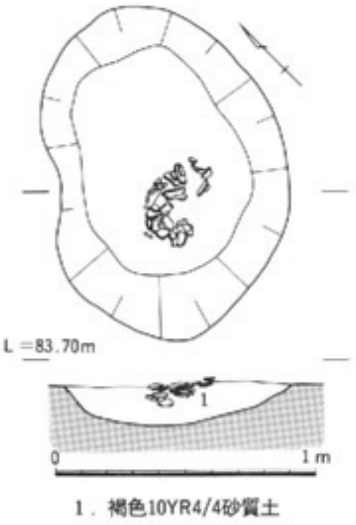
第11調査区（AD－17・18）で検出された。長軸2.18m、短軸1.34mの小判形を呈する土坑である。深さは22cmを測る。



第123図　SK1132遺構・出土遺物実測図

出土遺物（第125図）

弥生土器片が27点出土している。551の壺形土器は、朝顔状に大きく開く口頸部を持つ。552の底部は、わずかに上げ底を呈する。甕形土器と考えられる。



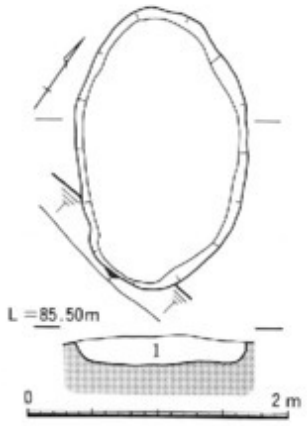
第124図　SK1133遺構実測図

土坑（SK1159）（第126図）

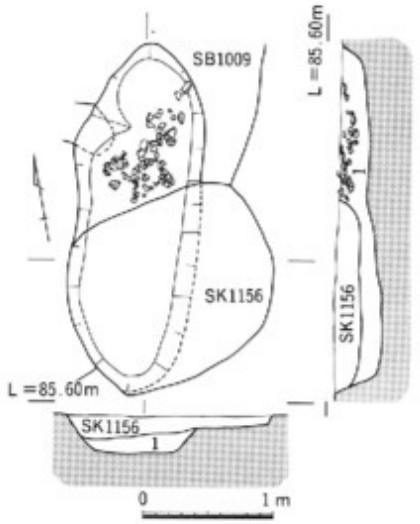
第11調査区（AE－20）で検出された。出土遺物の状況からすると、SB1009廃絶後に東端に重なって構築されており、さらに、土坑南半は中世の土坑SK1156が重なる。検出規模は、長軸2.28m、短軸1.44mの長楕円形を呈しており、深さは28cmを測る。覆土上面で土器の集中する部分がみられ、本来は土坑上面全体に広がっていたものと推定できる。土器は細片であり、砂岩礫の被覆は顕著にみられない。

出土遺物（第126図）

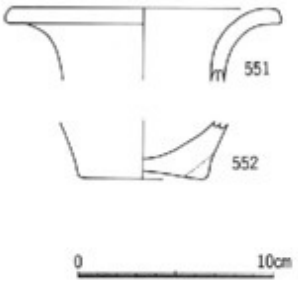
弥生土器片が185点、結晶片岩片が4点出土しているが、図化できる個体はほとんどない。553は壺形土器の底部である。平底を呈し、体部は内彎気味に立ち上がる。



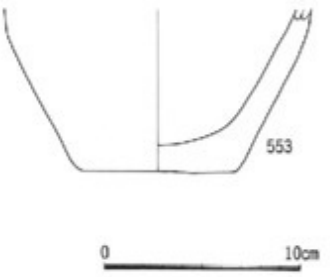
1．褐色10YR4/4砂質土



1．褐色10YR4/4砂質土



第125図　SK1157遺構・出土遺物実測図



第126図　SK1159遺構・出土遺物実測図

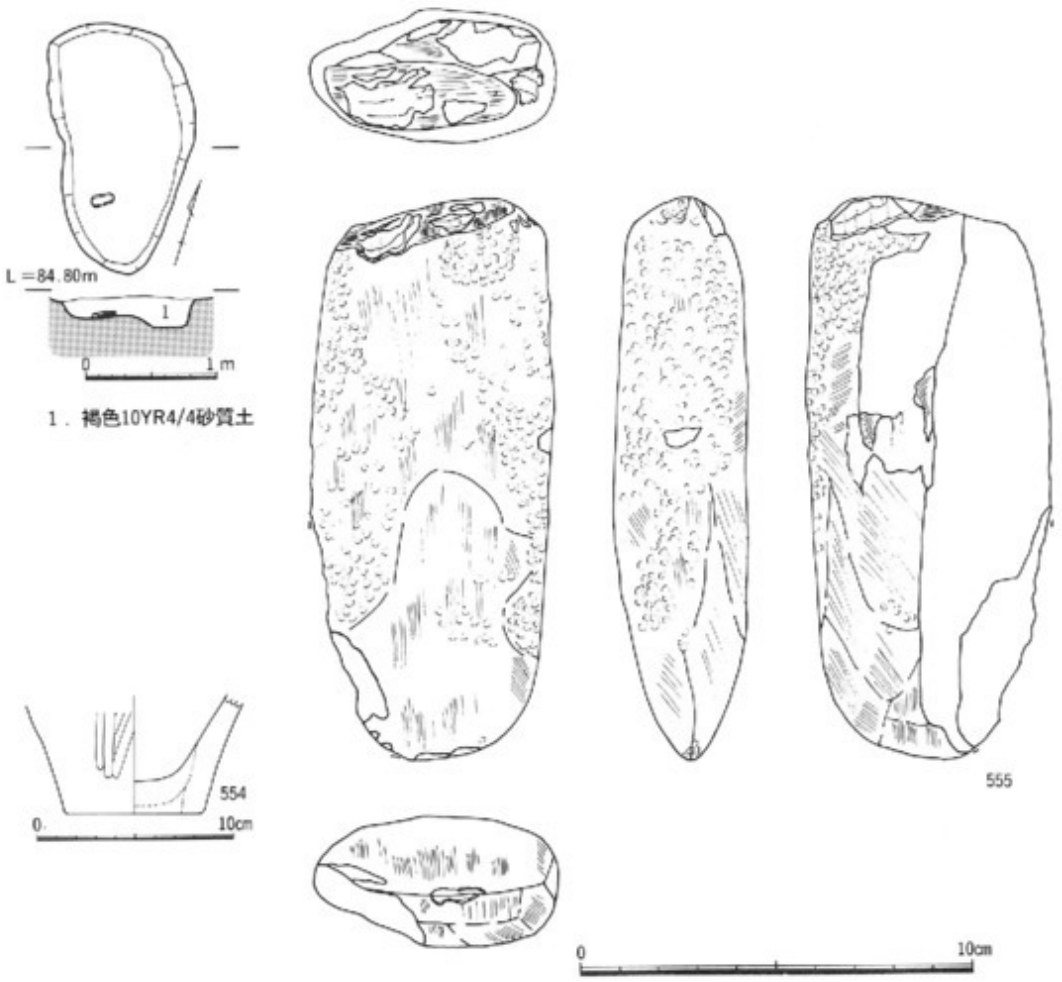
土坑（SK1164）（第127図）

第11調査区（AD－22）で検出された不整な楕円形の土坑である。検出規模は長軸1.94m、短軸1.02m、底面は平坦ではなく、最深部で深さ36cmを測る。中央やや南側の底面で、太型蛤刃石斧が検出された。

出土遺物（第127図）

弥生土器片10点と、磨製石斧１点が出土している。554は甕形土器の底部である。体部外面はタテヘラミガキの痕跡が確認できる。555の太型蛤刃石斧は緑色片岩製で、全面に敲打痕がのこり、刃部を中心に研磨している。

土坑（SK1171）（第128図）



第127図　SK1164遺構・出土遺物実測図

第11調査区東南端（AC・AD−24）で検出され、半分が調査区外へ延びている。検出されている部分で、長軸3.44m、短軸1.46mである。平面形は楕円形と思われる。深さは13〜27cm、断面皿状を呈する。中央部やや北側で土器片が集中して出土した。

出土遺物（第129・130図）

土器の集中している地点のものを含めて、覆土から弥生土器片が396点、磨製石斧未製品1点、サヌカイト片2点が出土している。土器は分量の割に底部の破片が目立つ。

壺形土器が多く、広口壺形土器は口縁部の開く形状に差異が認められる。ラッパ状に開き、頸部に簾状文が施される556、体部から緩やかに外反する557、558は直立する頸部から折れ曲がるように外反する口縁部を持つ。559も頸部に櫛描の粗い直線文が施されている。560〜562の底部には平底と上げ底がみられる。

563・564は甕形土器の底部とみられる。565も含め、いずれも平底である。

566（第130図）は、磨製石斧の未製品である。刃部にあたる部分を欠損しているが、太型蛤刃石斧の未製品であろう。形のよい緑色片岩の自然礫のほぼ全面を敲打、研磨前の段階と考えられる。

土坑（SK1174）（第131図）

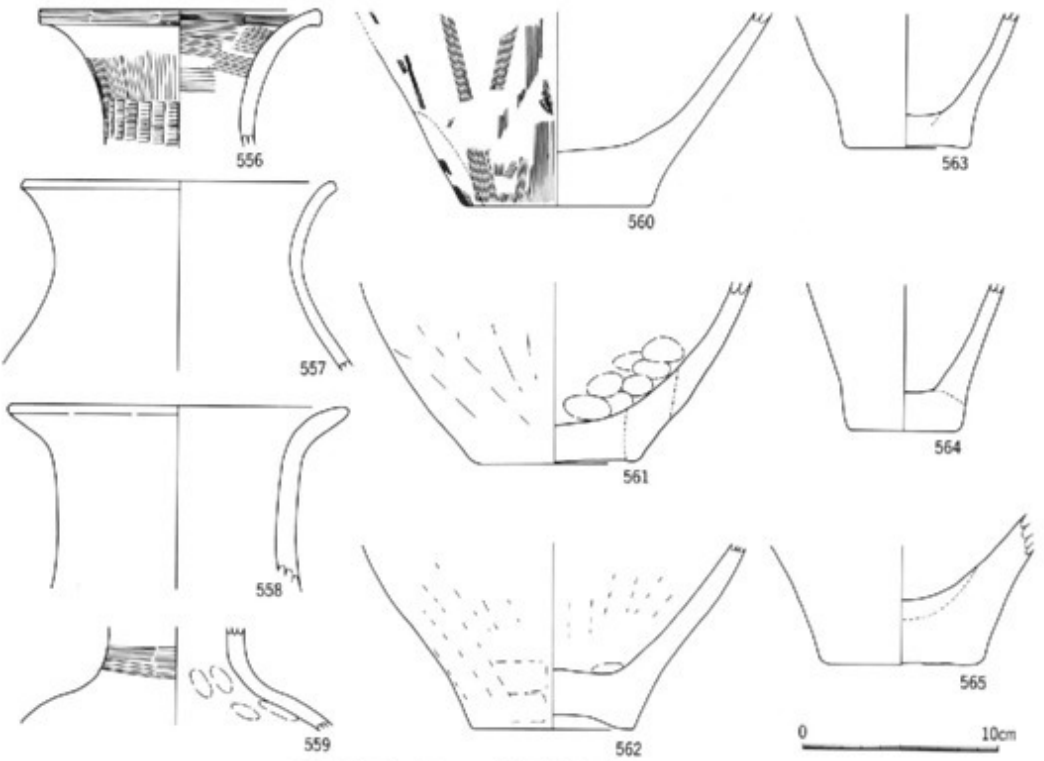
第9調査区（AC－27）の弥生時代の遺構の集中する地点で検出された。長軸1.08m、短軸0.68mのやや不整な楕円形、断面は階段状になる部分があり、最深部で41cmを測る。階段の部分で壺形土器の底部が上向きで出土した。

出土遺物（第131図）

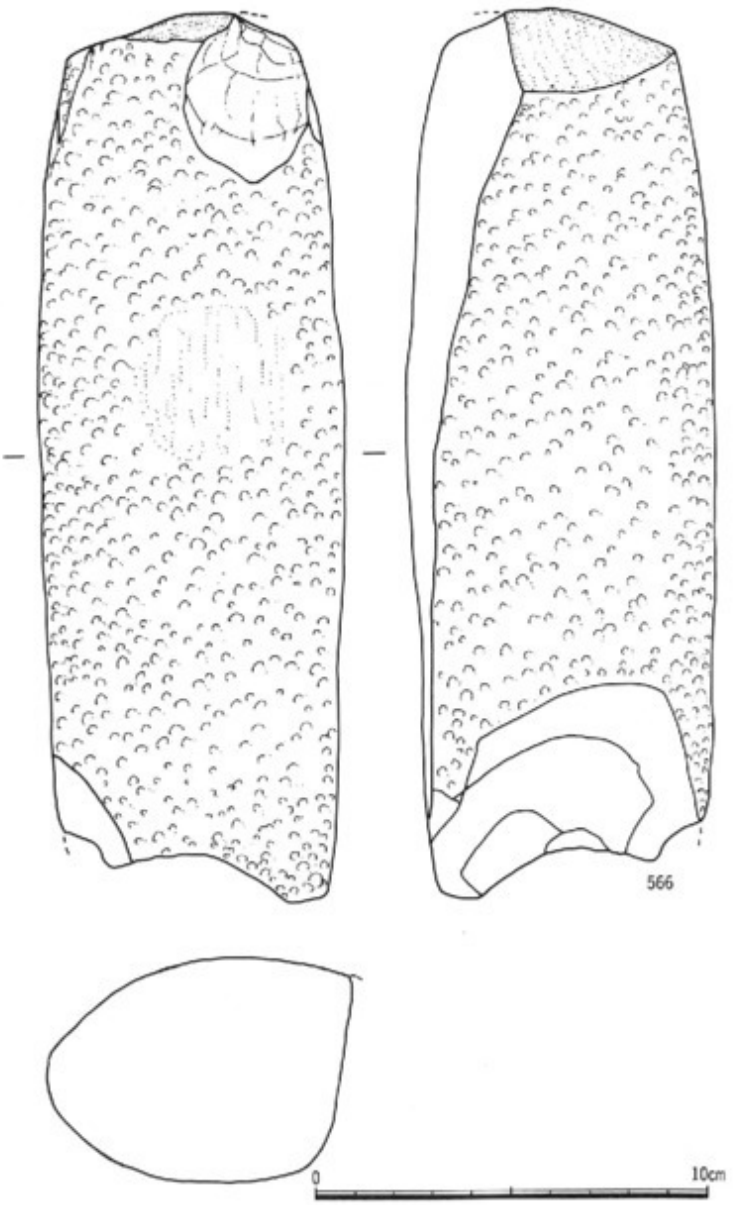
出土した567は、底面薄く、内彎気味にたち上がる体

1．褐色10YR4/4砂質土

第128図　SK1171遺構実測図



第129図　SK1171出土遺物実測図（1）

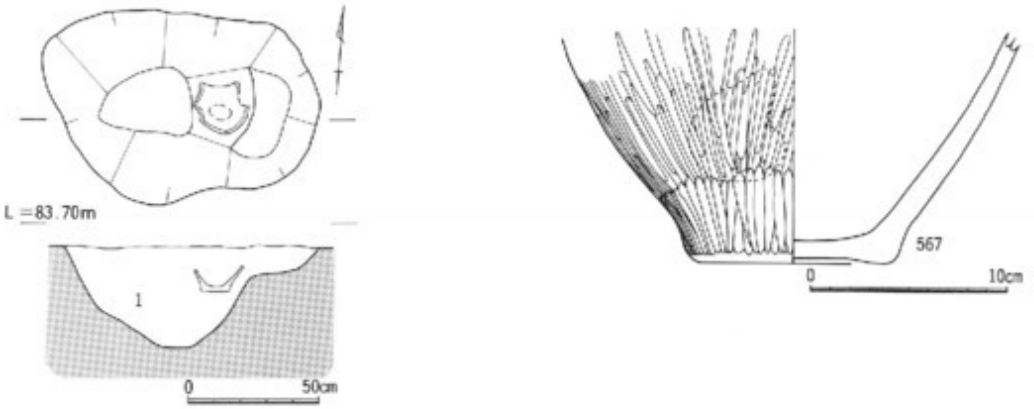


第130図　SK1171出土遺物実測図　(2)

部にはタテヘラミガキが入念に施されている。ほかに弥生土器片が46点出土している。

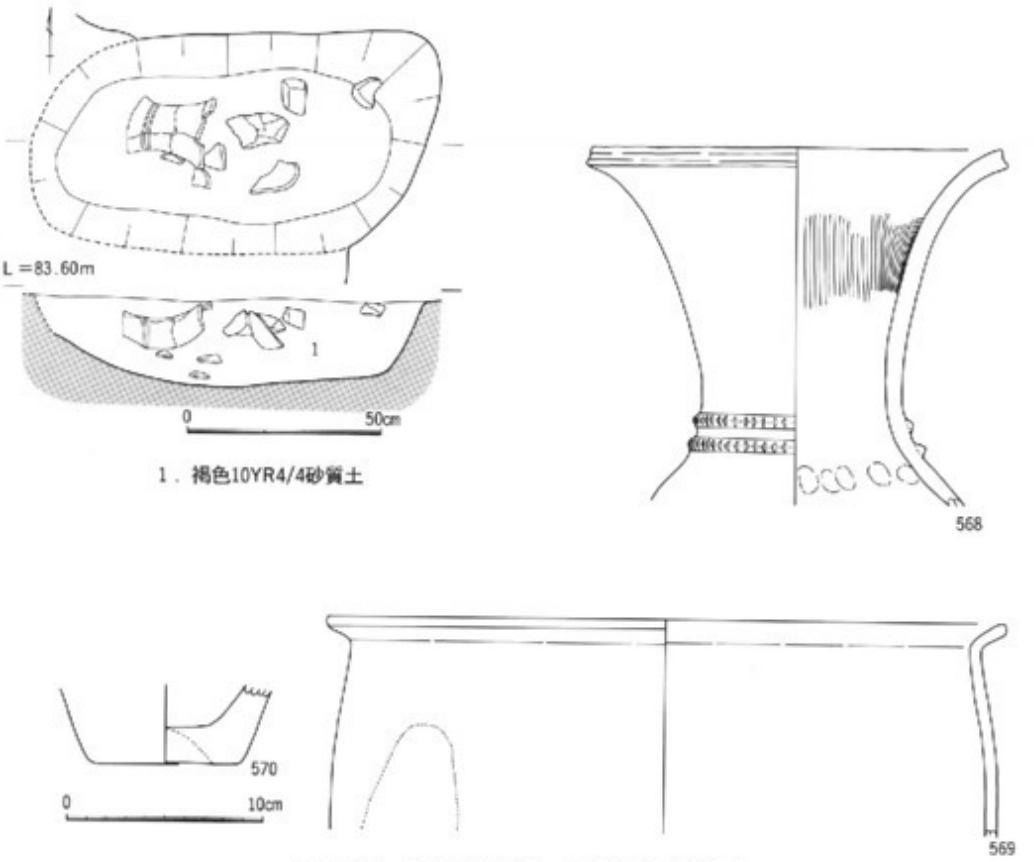
土坑（SK1175）（第132図）

第9調査区（AC・AD－28）で検出された。やはり、SB1006南西側の遺構の集中する地点である。長軸0.96m、短軸0.54mの隅丸方形状を呈する、深さ24cmの土坑である。覆土中に弥生土器の大きな破片と砂岩礫が含まれている。



1．にぶい黄褐色10YR5/4砂質土

第131図　SK1174遺構・出土遺物実測図



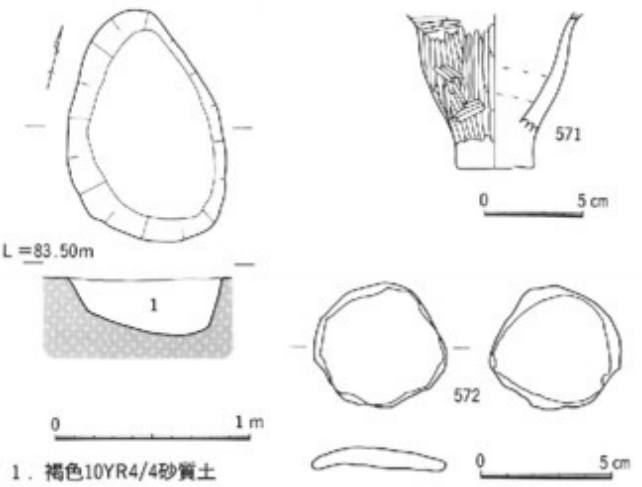
1．褐色10YR4/4砂質土

第132図　SK1175遺構・出土遺物実測図

出土遺物（第132図）

覆土中からは弥生土器片44点、サヌカイト片１点が出土した。弥生土器は、壺形土器の口縁部と、甕形土器が出土している。568はラッパ状に開く長い口頸部をもち、頸部下端に断面

三角形の刻目突帯を2条巡らせる。569の甕形土器は、内彎気味に直立する体部から屈曲して外反する短い口縁部をもつ。570の底部は、前2者のものとは考え難いが、やや厚い底部から直線的に立ち上がる体部につながっている。



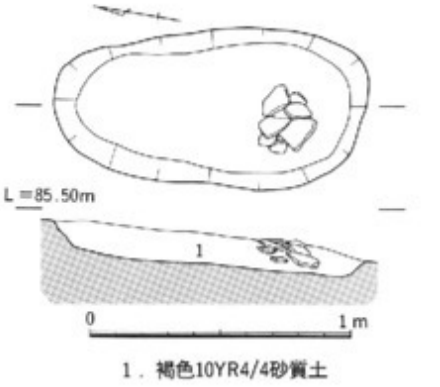
第133図　SK1176遺構・出土遺物実測図

土坑（SK1176）（第133図）

第9調査区（AC－28）で、SK1129に南接して検出された土坑である。平面形は卵形を呈し、長軸1.24m、短軸0.83m、深さは31cmを測る。

出土遺物（第133図）

弥生土器片が7点出土しているだけである。571は小形の鉢である。内彎気味に立ち上がり、緩やかに外反する口縁部をもつ。572は土製円板である。土器片を利用し丸く成形しているが、穿孔はみとめられない。



第134図　SK1188遺構・出土遺物実測図

土坑（SK1188）（第134図）

第11調査区（AF－20）で検出された。この土坑は平面形が長楕円形を呈し、長軸1.22m、短軸62cm、検出面からの深さは12cmと浅い。土坑南側中央で、弥生土器がかたまって検出された。

出土遺物（第134図）

弥生土器片が24点、結晶片岩片1点が出土している。そのなかで、甕形土器の口縁部を図

化した（573）。同じ個体とみられる体部の破片も出土しているが、接合しない。口縁部は彎曲して外反し、端部は丸くおさめる。

⑤ 柱穴・小穴

小穴（SP1343）（第135図）

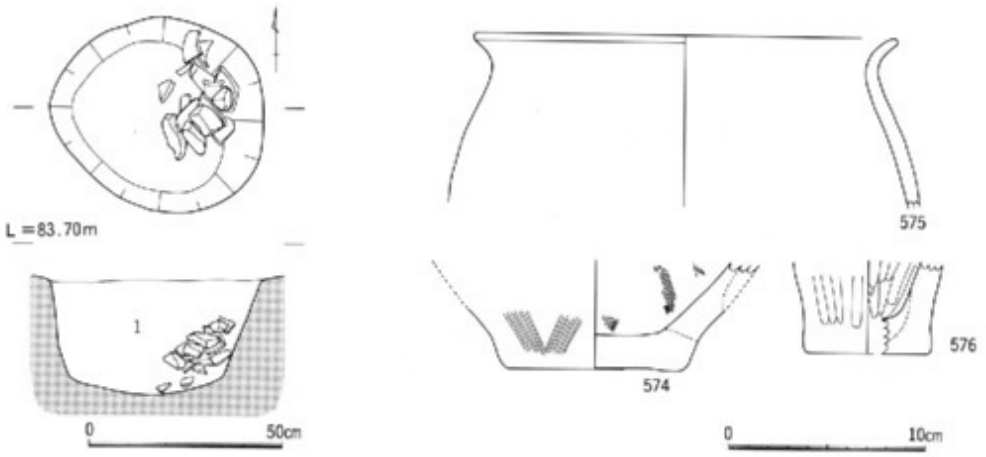
第７調査区（Ｙ－23）で検出された。長軸54cm、短軸49cmのほぼ円形で、深さは27cmを測る。小穴東半に、積み重なるように弥生土器が検出された。土器は二次焼成を受けているのか、軽石状に変質しているものが含まれている。しかしこの小穴内で火を受けたものかどうかは覆土の状況からは判断できない。

出土遺物（第135図）

弥生土器片が78点出土している。574は壺形土器の底部である。図化はできなかったが、体部上半には、２列の竹管文が観察できる。575は甕形土器である。緩やかに彎曲して外反する口縁部を持つ。576は甕形土器の平底を呈する底部である。

小穴（SP1371）（第136図）

第７調査区（Ｙ－23）で検出された。長軸80cm、短軸68cmの楕円形で、断面形は逆台形、深さは25cmを測る。



1．褐色10YR4/4砂質土

第135図　SP1343遺構・出土遺物実測図

出土遺物（第136図）

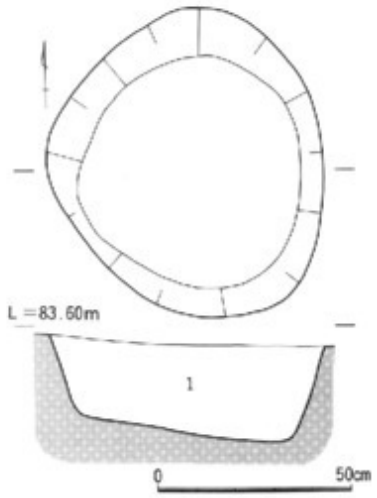
弥生土器片39点、サヌカイト片１点が出土している。577は筒状に延び、両端は緩やかに外反する。長頸壺の口頸部と考えられるが、内面のハケから脚台部、または筒形の器台[(2)]の可能性もある。

小穴（SP1609）（第137図）

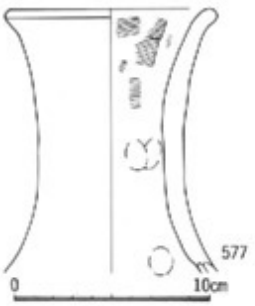
第９調査区（AE－29）で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸87cm、短軸68cmを測り、断面皿状を呈し、深さは17cmである。覆土上面、中央で帯状に弥生土器片が集中して出土した。

出土遺物（第137図）

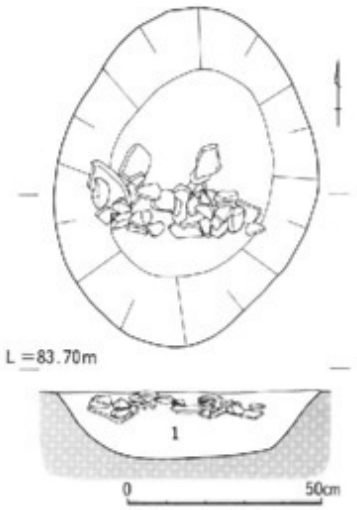
弥生土器片164点が出土している。ほとんどが体部の破片である。578は壺形土器の底部である。



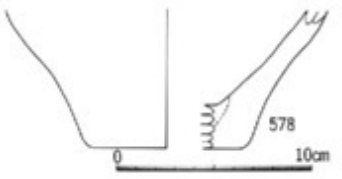
1．褐色10YR4/4砂質土



第136図　SP1371遺構・出土遺物実測図



1．褐色10YR4/4砂質土



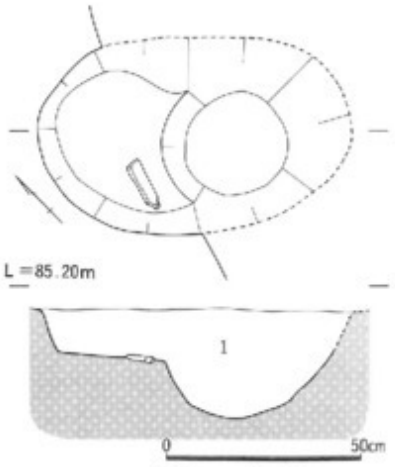
第137図　SP1609遺構・出土遺物実測図

柱穴（SP1748）（第138図）

第11調査区（AE－21）で検出された。半分の上面を中世の溝（SD1011）により削平されている。長軸76cm、短軸44cmの楕円形で、断面形は階段状となっており、最深部は28cmを測る。柱状片刃石斧の未製品がテラス底で出土している。

出土遺物（第138図）

弥生土器片が2点と、柱状片刃石斧未製品が出土している（579）。緑色片岩の形のよい自然石を利用し、敲打による調整後、表面と刃部の一部を研磨している。



1．褐色10YR4/4砂質土

柱穴（SP1762）（第139図）

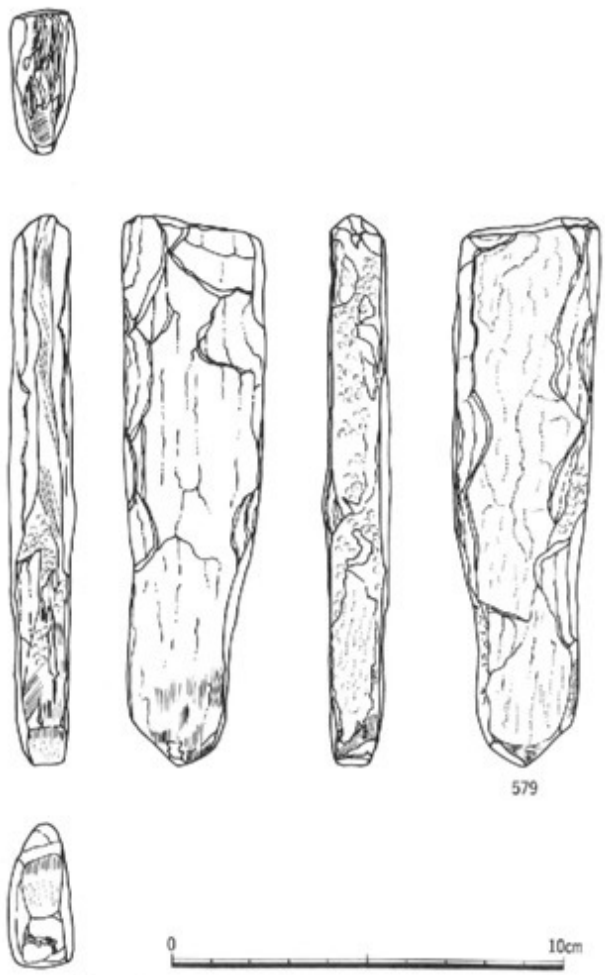
第11調査区（AF－20）で検出した。長軸33cm、短軸29cmのほぼ円形で、断面はU字形、深さは39cmを測る。太型蛤刃石斧が滑り込むような状態で出土した。

出土遺物（第139図）

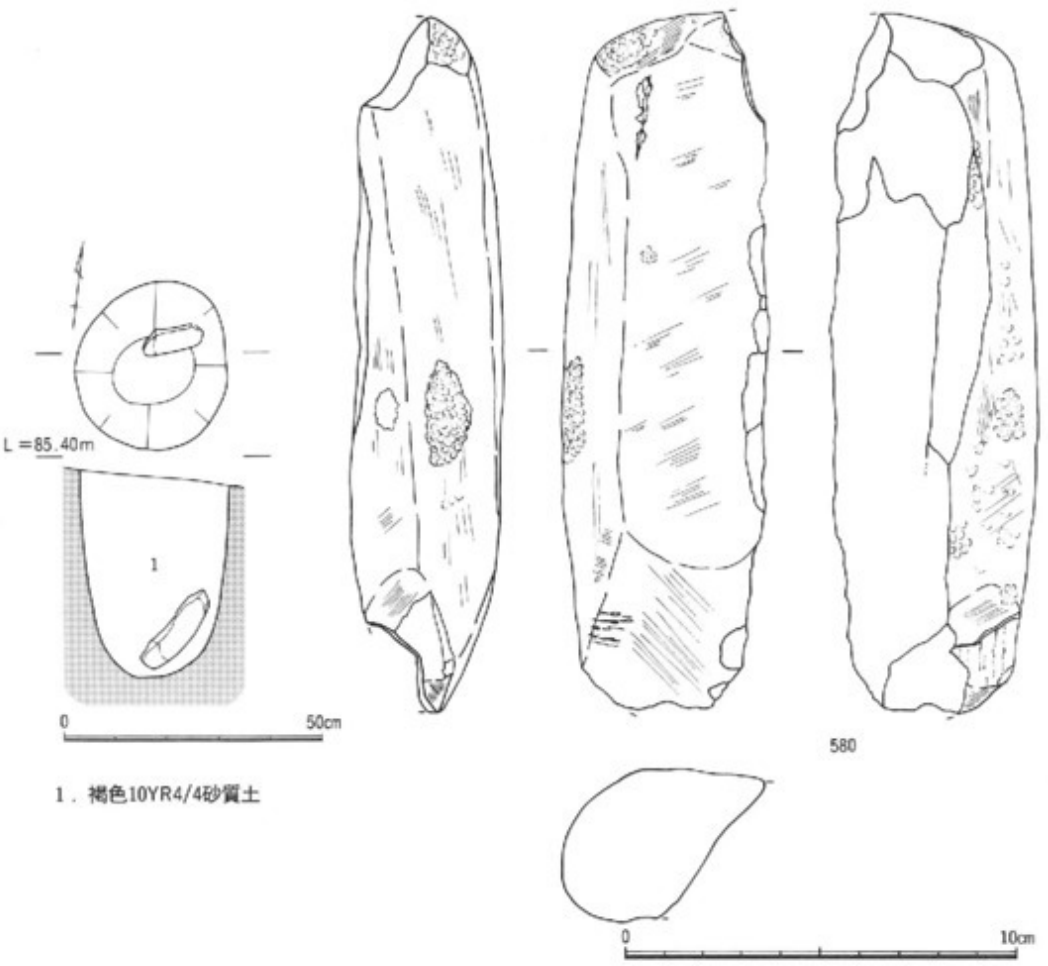
580の他に出土遺物はない。石斧は長軸方向に半分に割れ、欠損している。側辺に研磨後についた粒状の敲打痕の集中がみられる。

柱穴（SP1880）（第140図）

第11調査区（AD－22・23）で検出された。長軸58cm、短軸52cmのほぼ円形、断面は逆台形で、深さ26cmを測る。



第138図　SP1748遺構・出土遺物実測図



第139図　SP1762遺構・出土遺物実測図

覆土中央で、甕形土器1個体の上半部が集中して出土した。やや浅いが、柱根の部分に抜き取り後、投棄した可能性がある。

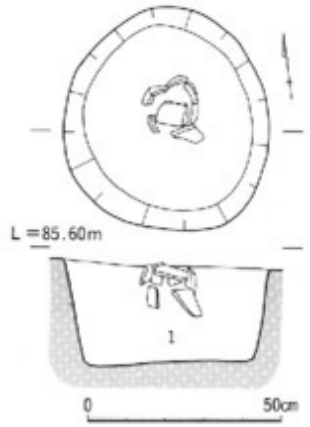
出土遺物（第140図）

581は内彎して立ち上がる体部から、屈曲して外反する口縁部をもつ。

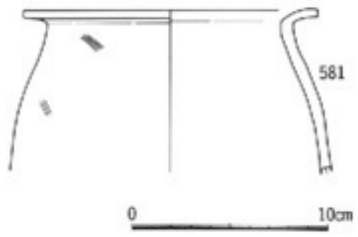
その他の柱穴出土遺物（第141図）

582は、第3調査区（S－21）で検出されたSP1273出土の凸基無茎の石鏃である。柱穴自体は、中世の構築の可能性があり、混入と考えられる。

583の石鏃は、第7調査区（Y・Z－22）のSP1389で出土した。先端を欠損しているが、平基で平面形は細長い船形を呈している。



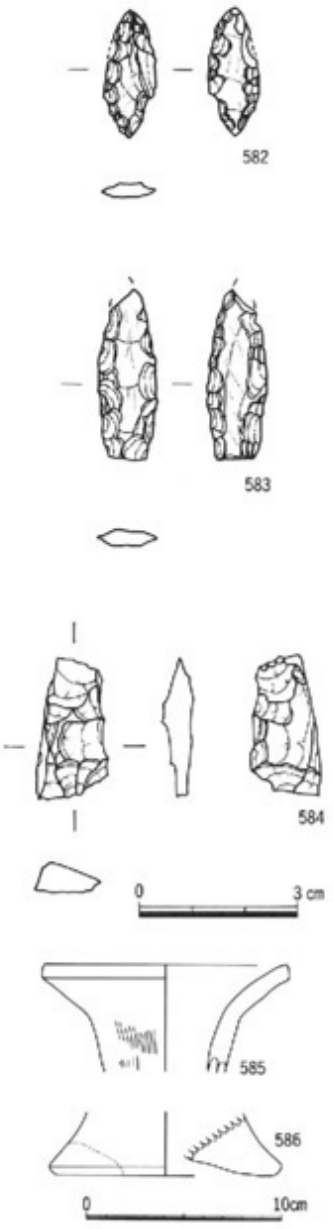
1．にぶい黄褐色10YR5/4砂質土



第140図　SP1880遺構・出土遺物実測図

584は、第７調査区（Ｚ－23）のSP1361から出土した楔形石器である。左辺は裁断面、上下辺は両極打法によるものである。深さ22cmの浅い柱穴であるが、弥生土器片19点、サヌカイト片１点がともに検出された。弥生土器には、手づくね土器が含まれている。

585は、第７調査区（Ｕ－18）で検出されたSP1552から検出された壺形土器である。広口壺形土器で、開き気味の頸部から屈曲して外反する口縁部をもつ。



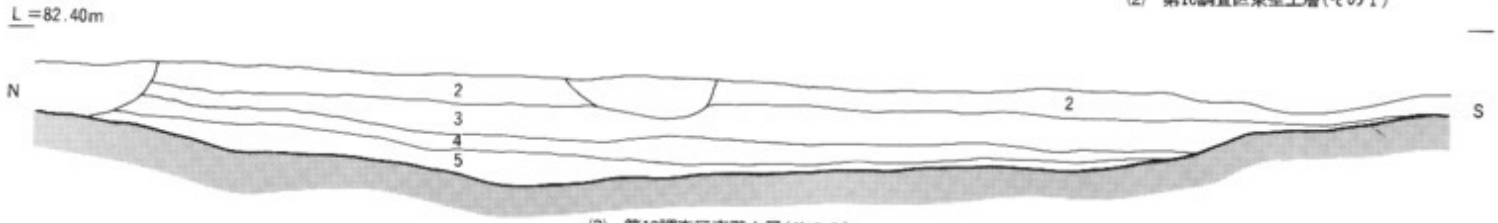
第141図　柱穴・小穴出土遺物実測図

586は、第７調査区（Ｘ－22）のSP1548から出土した。鉢形土器の底部とみられ、底部端を大きく外方に拡張させている。

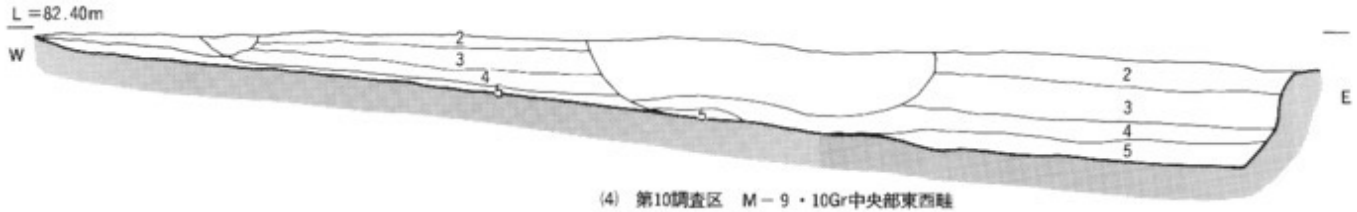
⑥　自然流路・不明遺構

(1) R・S－12Gr付近畦南壁土層

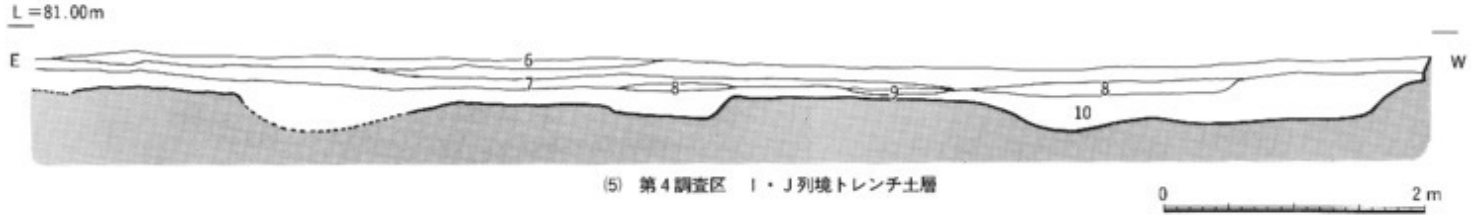
(2) 第10調査区東壁土層（その１）



(3) 第10調査区東壁土層（その２）



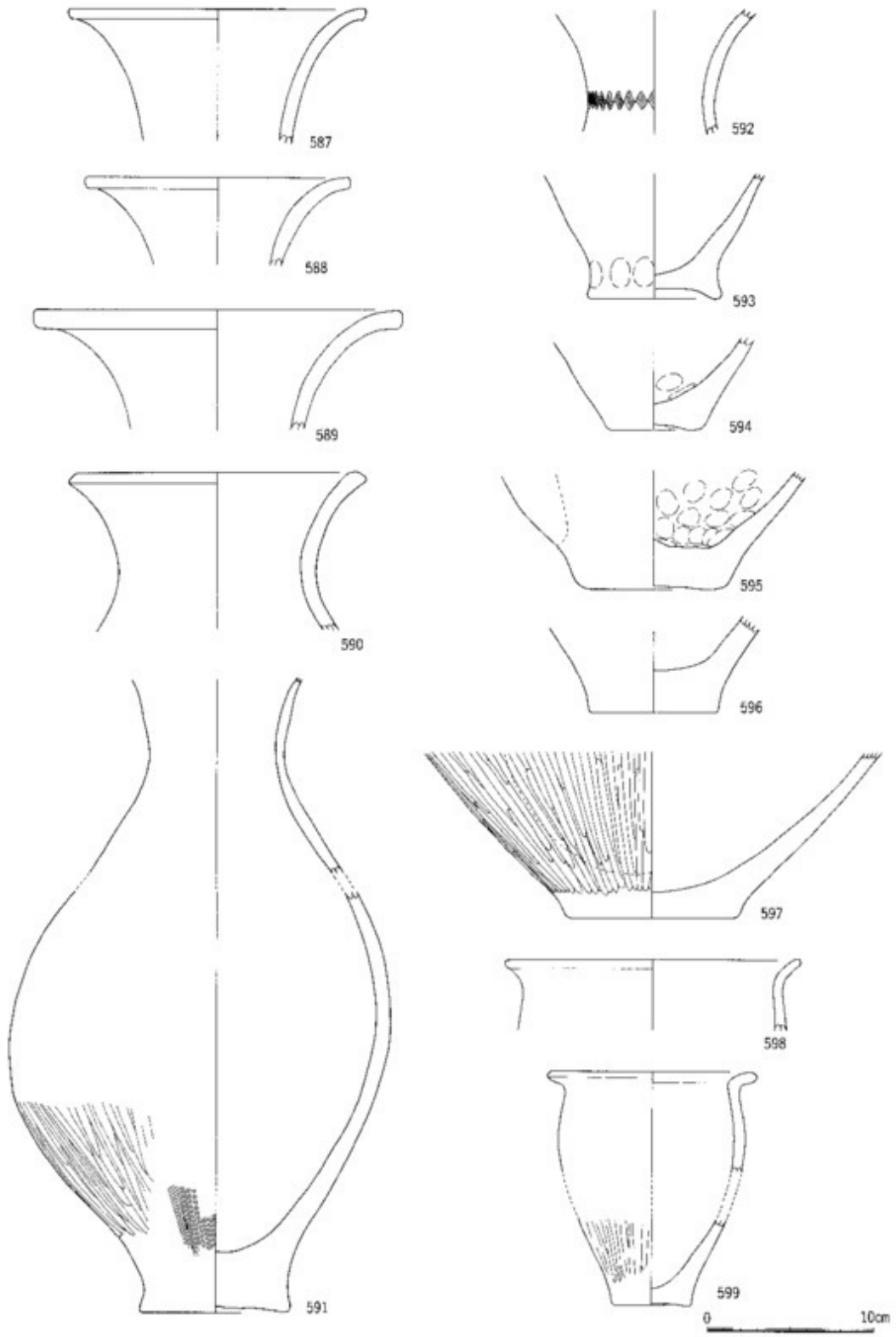
(4) 第10調査区　M－９・10Gr中央部東西畦



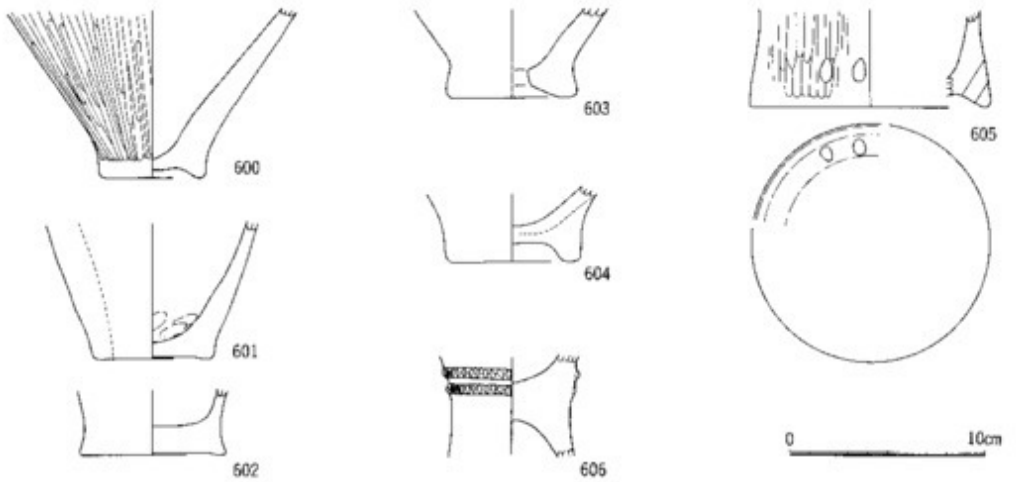
(5) 第４調査区　Ⅰ・Ｊ列境トレンチ土層

1．にぶい黄褐色10YR5/4粘性砂質土（礫を小量含む）
2．褐色10YR4/4砂質土（礫含む）
3．にぶい黄褐色10YR5/4砂質土（礫含む）
4．暗褐色10YR3/4砂質土（礫含む）
5．褐色10YR4/6砂質土（礫含む）
6．にぶい橙色7.5YR6/3粘性砂質土
7．にぶい黄色2.5YR6/4粘性砂質土
8．にぶい褐色7.5YR5/3粘性砂質土
9．にぶい黄橙色10YR6/3粘性砂質土
10．灰褐色7.5YR4/2粘性砂質土

第142図　SR2001土層断面図



第143図　SR2001出土遺物実測図　(1)



第144図　SR2001出土遺物実測図　(2)

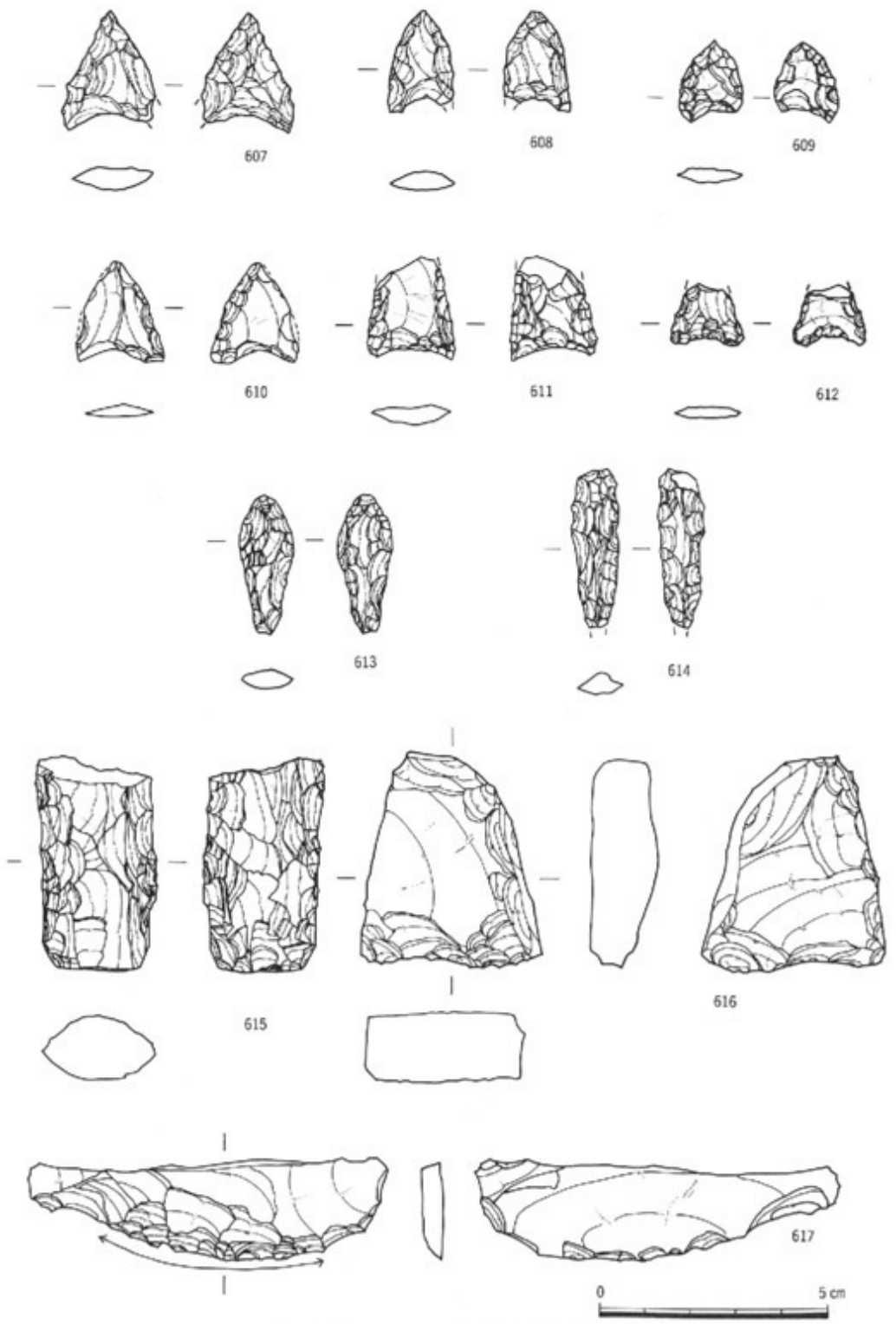
自然流路（SR2001）（第142図）

第10調査区・第６調査区に端を発し、第４調査区を南下、調査区外に延びる自然流路である。第６調査区から第４調査区南端までの延長距離は約50m、幅は第４調査区で約11mである。これに続く調査区外の延長部分約90mは現在湿田となっているが、それより下流は、段丘を深く切り込む谷川となっている。第４調査区北西隅は耕地整理前まで貯水池として利用されていた（第９図）。

断面形は極浅い弓状を呈しており、地山が粘質土であることも手伝ってか、開析作用はほとんど進んでいない。流路内の堆積土は、第６調査区のＲ・Ｓ－12グリッド付近では、礫を含むにぶい黄褐色砂質土の単一層で（第142図－(1)）、調査区壁付近ではその上層に、灰黄褐色の粘質土が被っている（第５図－６Ｂ）。この調査区内ではほとんど遺物は含まれていない。第10調査区の堆積をみると（第142図－(2)～(4)）、ほぼ水平堆積で、褐色・にぶい黄褐色・暗褐色等の砂質土である。調査区内の最も下流にあたる第４調査区、Ｉ列とＪ列の境では（第142図－(5)）、にぶい黄褐色・にぶい橙色・にぶい黄色等のやや粘性の強い砂質土が堆積している。第１・６層中に弥生時代の遺物が多く含まれているが、土器は風化が激しい。第８層にあたる堆積層から有舌尖頭器、形態から縄文時代とみられる石鏃は第７層にあたる堆積層から出土した。流路上層からは、瓦器や青磁など中世の遺物も出土している。

出土遺物（第143～149図）

弥生土器片822点、須恵器１点、土師質土器４点、粘土塊１点、有舌尖頭器２点、石鏃11点、



第145図　SR2001出土遺物実測図　(3)

石錐１点、石槍１点、スクレイパー３点、打製石庖丁２点、打製石鎌２点、磨製石斧２点、叩石７点、サヌカイト片14点、結晶片岩片13点、石英１点、と種々の遺物が出土している。

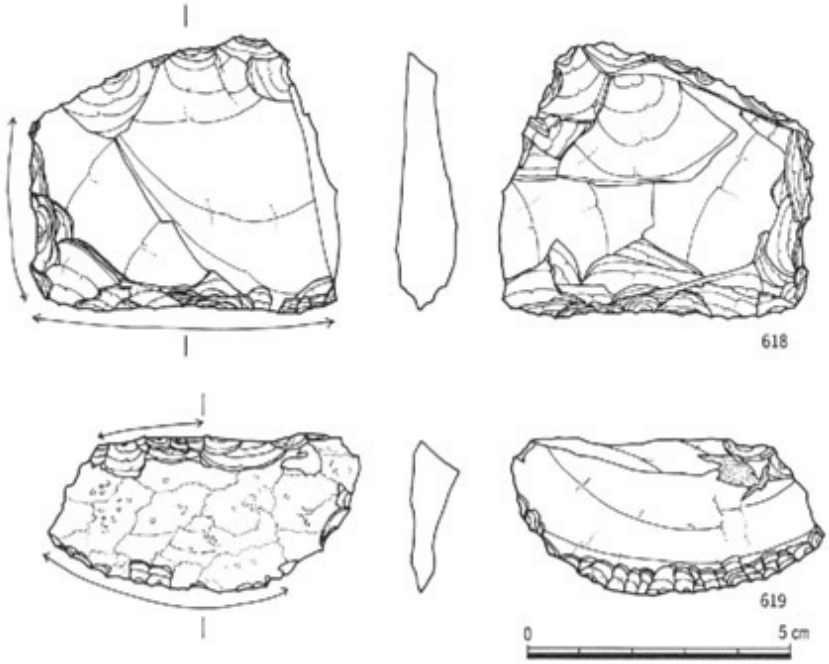
弥生土器は、かなり表面が剝落しているものが多い。壺形土器はラッパ状に開く口頸部をもつ広口壺（587～592）が中心である。591は頸部と体部の境が緩やかに湾曲する形態で、体部の最大径は中位、分厚い底部を持っている。592の頸部には、繊細な櫛描波状文が施される。593～597はいずれも壺形土器の底部とみられる。やや上げ底のものと平底がある。

甕形土器は、598・599のように、屈曲して短く外反する口縁部をもち、端部は丸くおさめるものがみられる。いずれも口径が最大径となっている。600～603は底部であるが、上げ底、平底それぞれみられる。そのうち、603は焼成前に穿孔されている。602は、形態・胎土ともにやや異質で、同時に出土している土器群より、時期が下るものと考えられる。

604・605はともに鉢形土器の上げ底の底部である。605は、直立気味の体部でジョッキ形[3]を呈するものと思われる。底部端には斜めに２孔穿孔がみられる。606は高杯形土器の脚柱部である。脚柱上端に２条の突帯を巡らし、刻目を施す特徴的な形状である。

607～613は石鏃である。613が凸基有茎で、それ以外はすべて凹基無茎である。他に、旧石器時代と考えられる剝片（第７図－４）や、縄文時代のものと考えられる９～12の石鏃、５・６の有舌尖頭器、７・８の尖頭器状の石器が出土している（第８図）。

615は、石槍の基部、616は楔形石器である。617～619はスクレイパーである。618は両面調整により２辺に刃部が形成され、617・619は片面調整による。

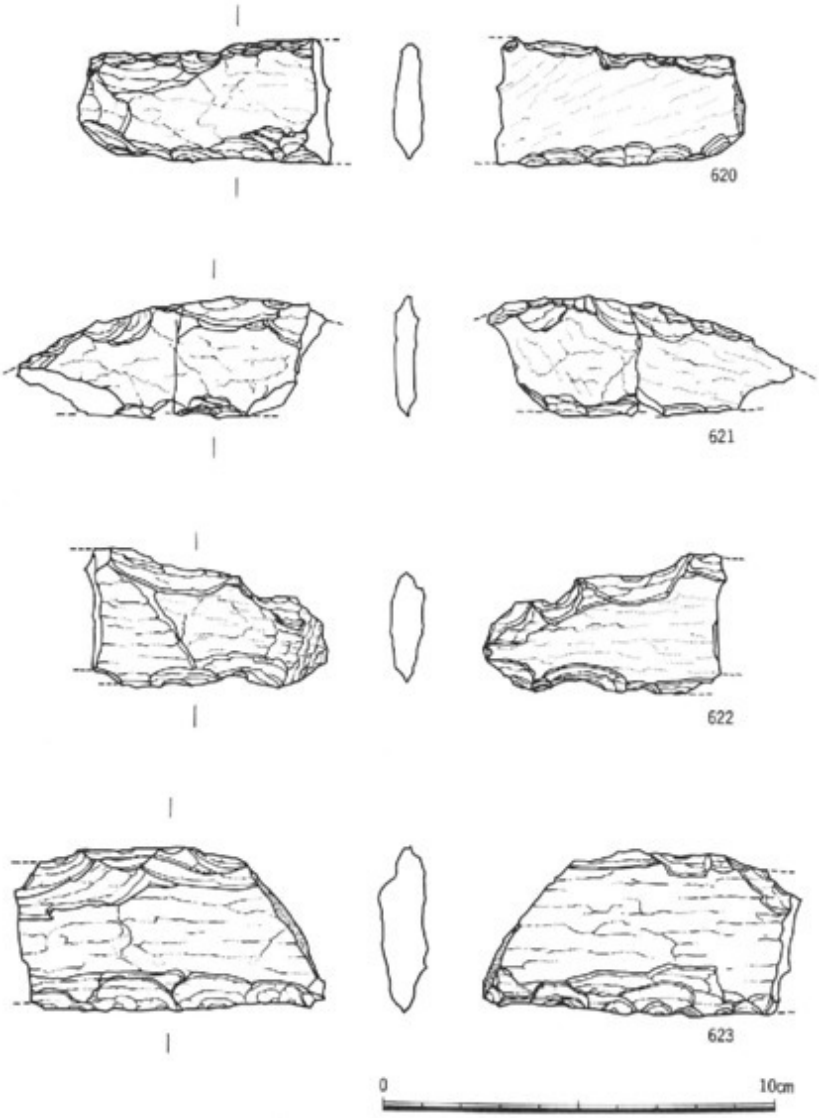


第146図　SR2001出土遺物実測図　(4)

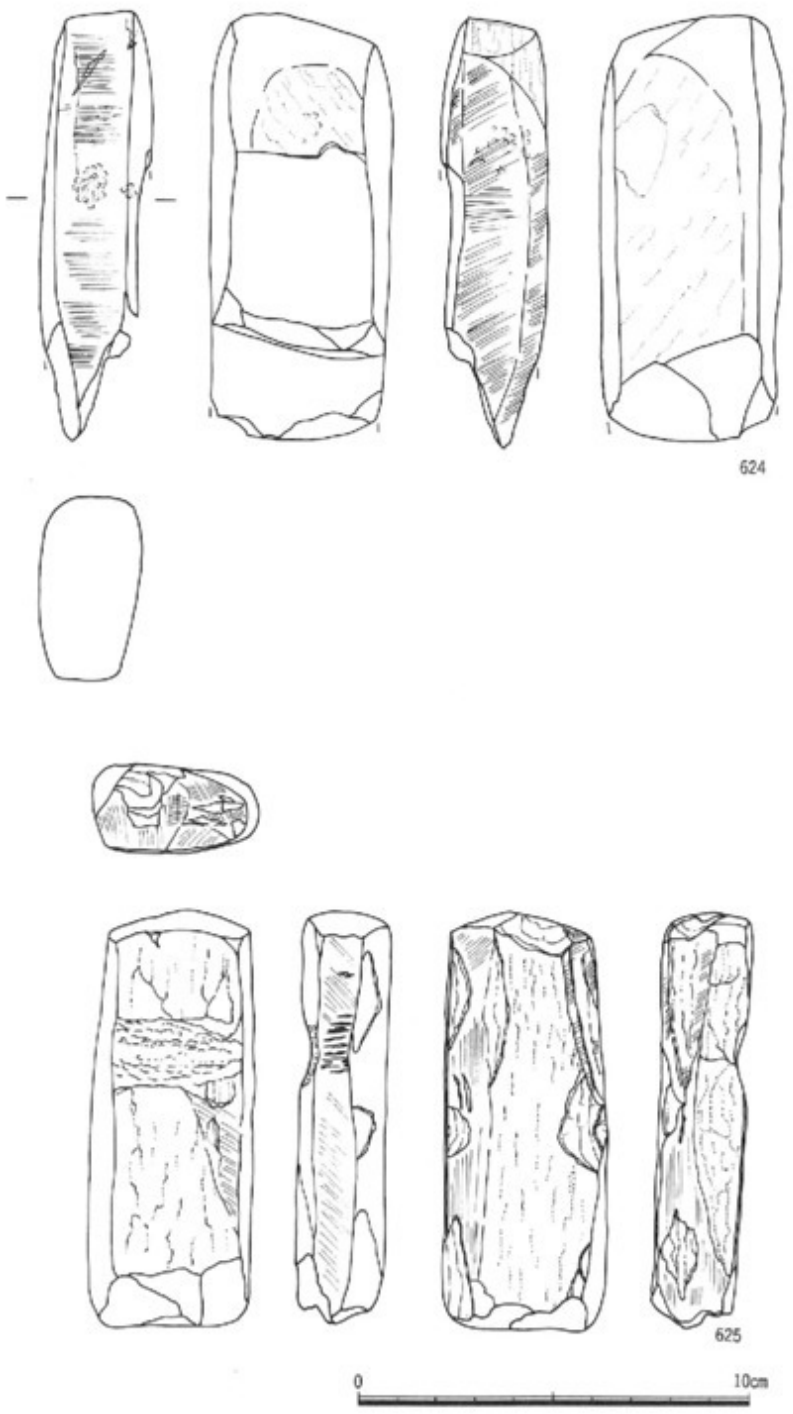
620～623は打製石庖丁と打製石鏃である。621が石鏃の先端部に近い部分と考えられ、622は基部に近く上下辺に抉りを持つ。620・623は打製石庖丁で端部の抉りはない。

624・625はいずれも刃部を欠損する柱状片刃石斧である。624は基部の抉り入りがみられず、625では、敲打による抉り入りが長辺側にあり、刃面は幅の広いものである。

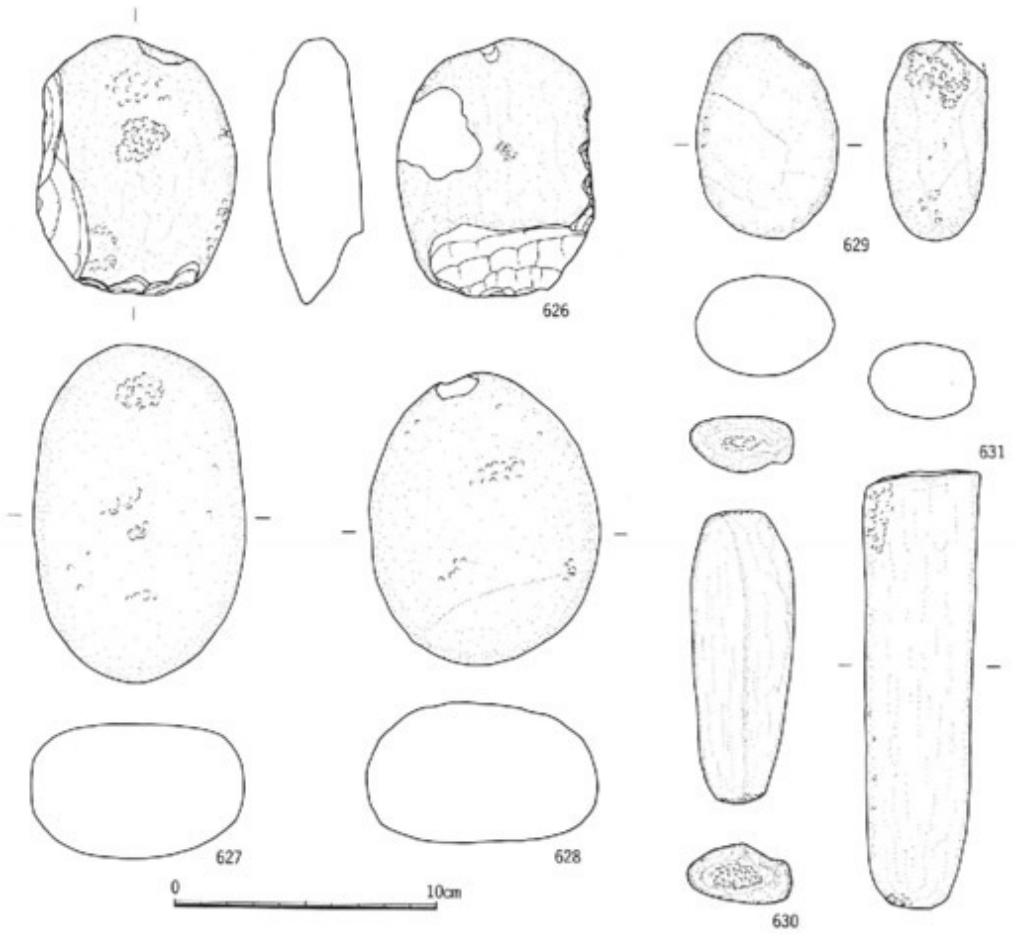
626～631は、叩石である。626は偏平な円礫の中央に粒状の敲打痕と、縁辺の一部に強い敲打痕が認められる。627～629は円礫の中央部や縁辺に粒状の敲打痕が、630は、棒状の円礫の両端に敲打痕が認められる。631は、同様に棒状の叩石として捉えたが、石棒である可能性も考えられる。



第147図　SR2001出土遺物実測図　(5)



第148図　SR2001出土遺物実測図　(6)



第149図　SR2001出土遺物実測図　(7)

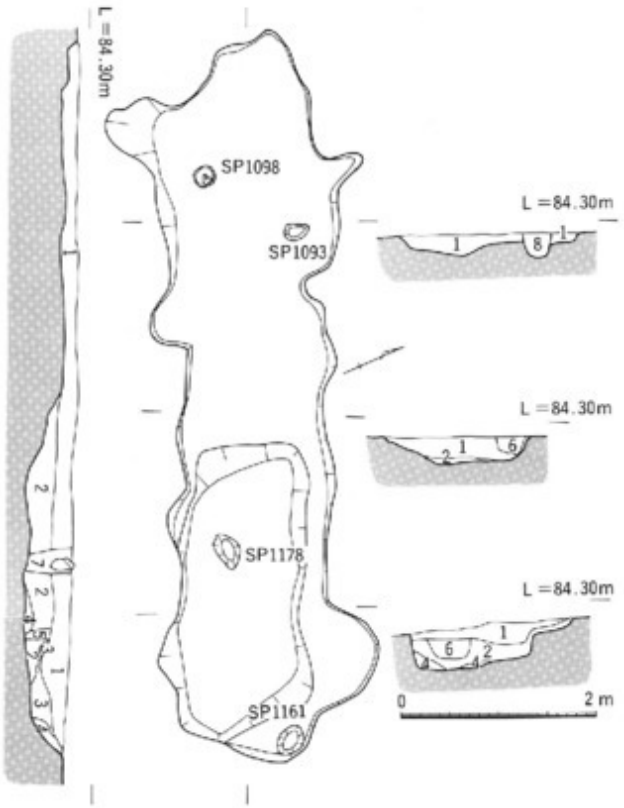
不明遺構（SX1005）（第150図）

第２調査区（X・Y－17・18）で検出された。不整形な溝状の遺構である。東西に長く、長軸7.5m、短軸は1.56m。断面形は概ね皿状を呈するが、東端で長軸3.04m、短軸1.24mの隅丸方形に一段落ちている。最深部で49cmを測る。竪穴住居SB1001のプランがこの遺構の影響を受けているとみられるので、住居に先立って構築、あるいは、並存したと考えられる。

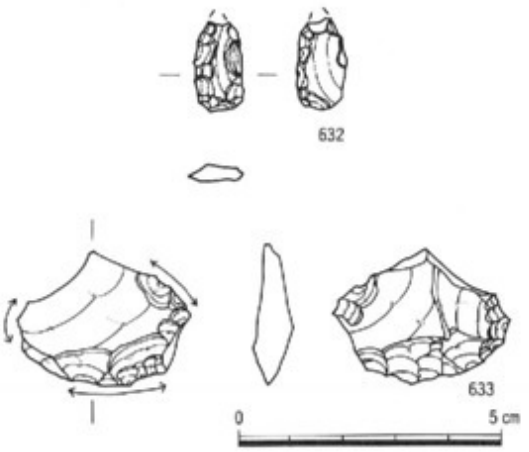
出土遺物（第150図）

覆土からの出土遺物は、弥生土器片326点、土師質土器２点、瓦質土器１点、石鏃２点、スクレイパー１点、サヌカイト片25点である。遺構面積が広いこともあって、中世の柱穴等にともない遺物が混入している（第200図－778）。

632は先端を欠損しているが、円基無茎の石鏃である。633は剝片縁辺を利用したスクレイパーである。



1．褐色10YR4/4粘性砂質土
2．にぶい黄褐色10YR5/4粘性砂質土
3．褐色10YR4/6粘性砂質土
4．黄褐色10YR5/6粘性砂質土
5．にぶい褐色7.5YR5/4粘性砂質土
6．にぶい黄橙色10YR6/4粘性砂質土
7．暗褐色10YR5/3粘性砂質土(SP1178)
8．にぶい黄褐色10YR4/3粘性砂質土(SP1093)



第150図　SX1005遺構・出土遺物実測図

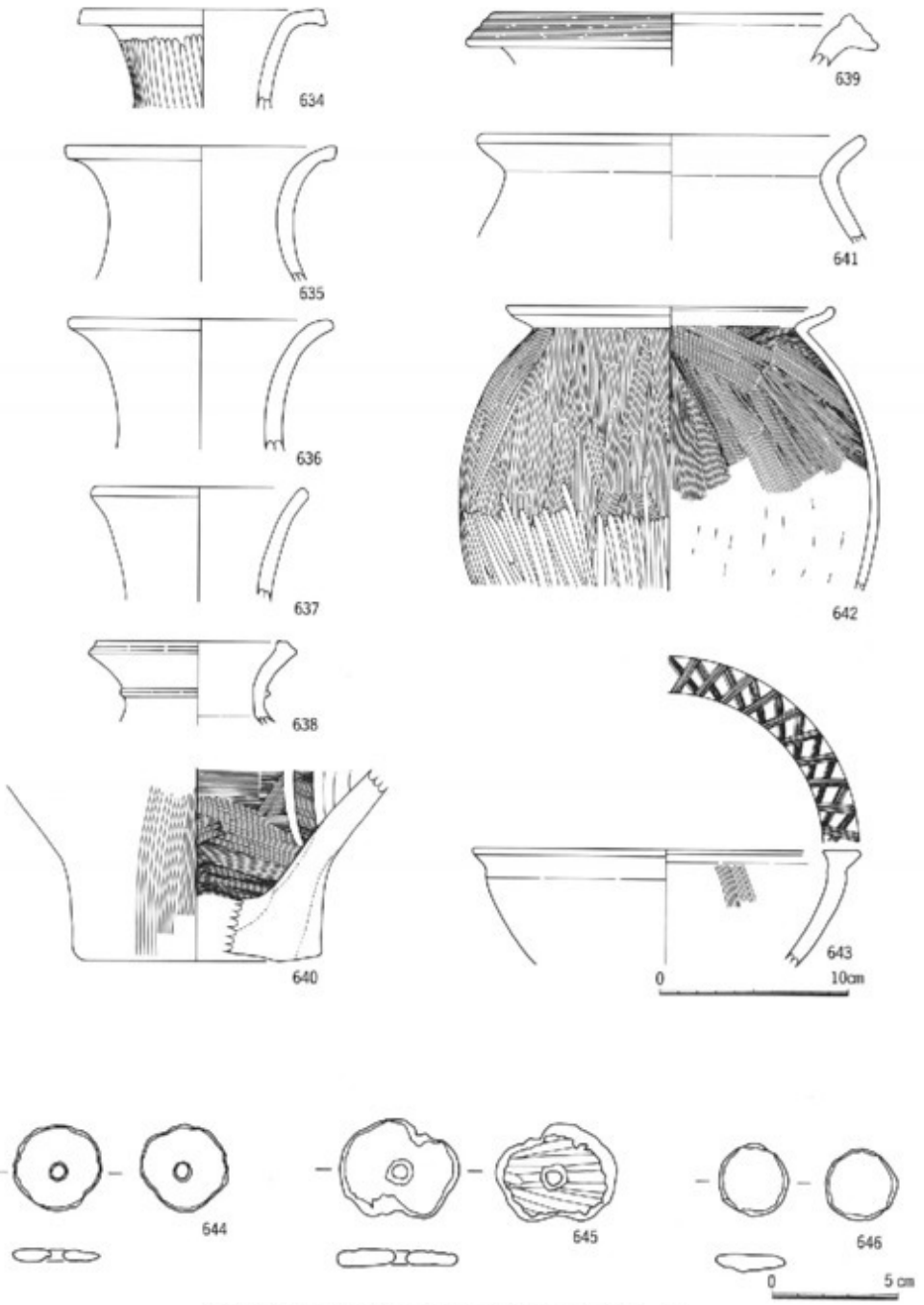
⑦　遺構に伴わない遺物

遺構以外から出土した弥生時代の遺物（弥生土器・石器）総数は、8,614点。調査地内での出土地区の分布をみると、遺構の集中する第２・７調査区を中心に、その周辺部で多く出土している。５・６・10区では出土点数は極端に少ない。

弥生土器（第151図）

634～640は壺形土器である。無文の広口壺形土器では、口縁部の外反の度合いが、屈曲気味に大きく開くもの（634）、彎曲して大きく開く（635）、緩やかに彎曲する（636）、直線的に外反する（637）、とそれぞれ異なっている。これらは、各遺構出土の土器の中にも含まれている、それぞれのタイプである。638・639は、本遺跡内では、他に例がなく、前者は、彎曲して口縁端部が肥厚し、上端面は平坦に、側端面は、凹面に仕上げられている。さらに頸部に１条の突帯を持つ。639は口縁端部を下外方に拡張し、端面に３条の凹線を施す。拡張の大きさ等から、中期後半、凹線文の盛行期のものと考えられる。

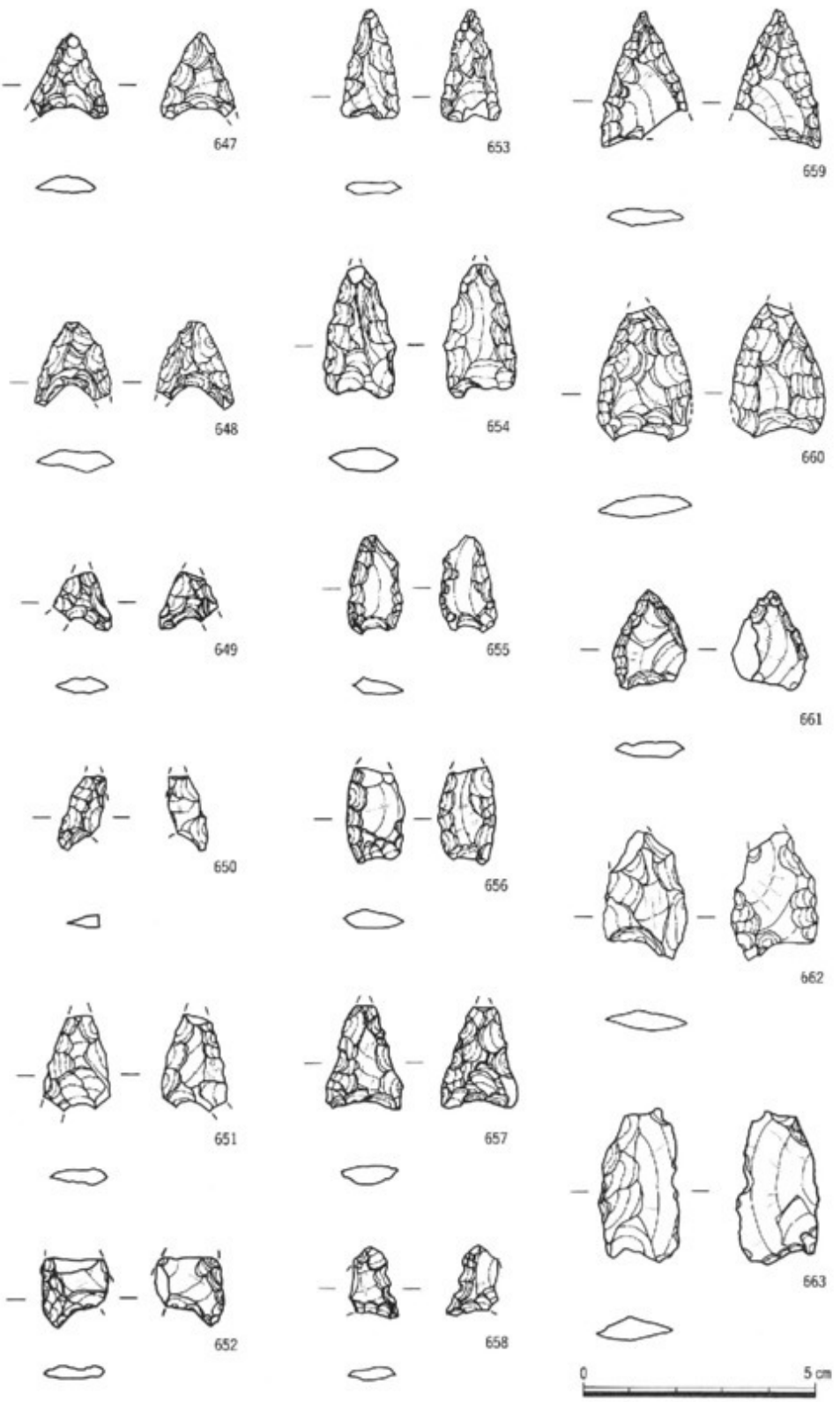
641は端部を丸くおさめる甕



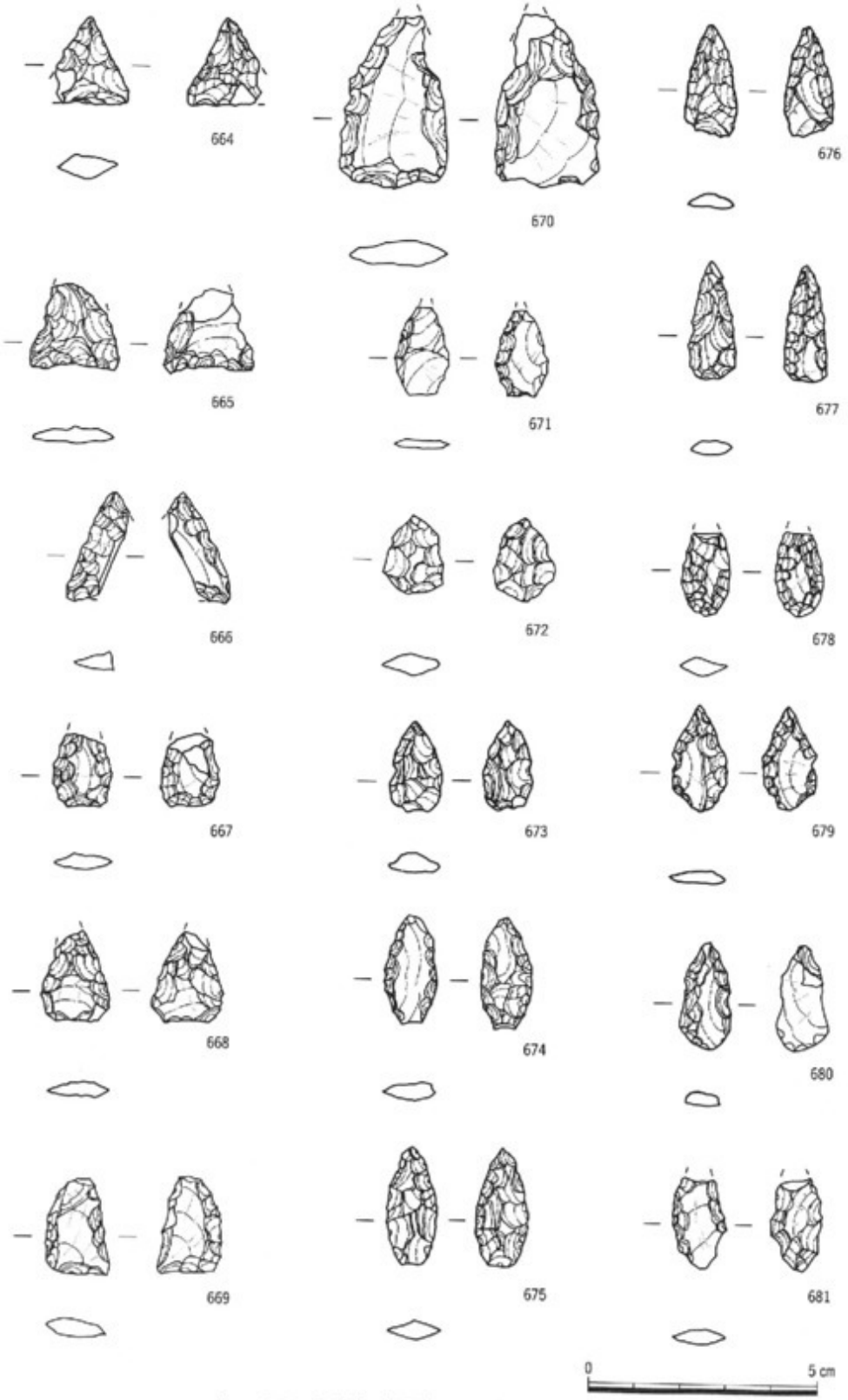
第151図　遺物包含層等出土遺物実測図　(1)

形土器、642は、球形の体部、鋭く屈曲して外反する口縁部、端部はやや上方に拡張しながら丸くおさめる。器壁が薄く、焼成は良好である。角閃石粒を含んでおり、讃岐地域からの搬入品とみられる。

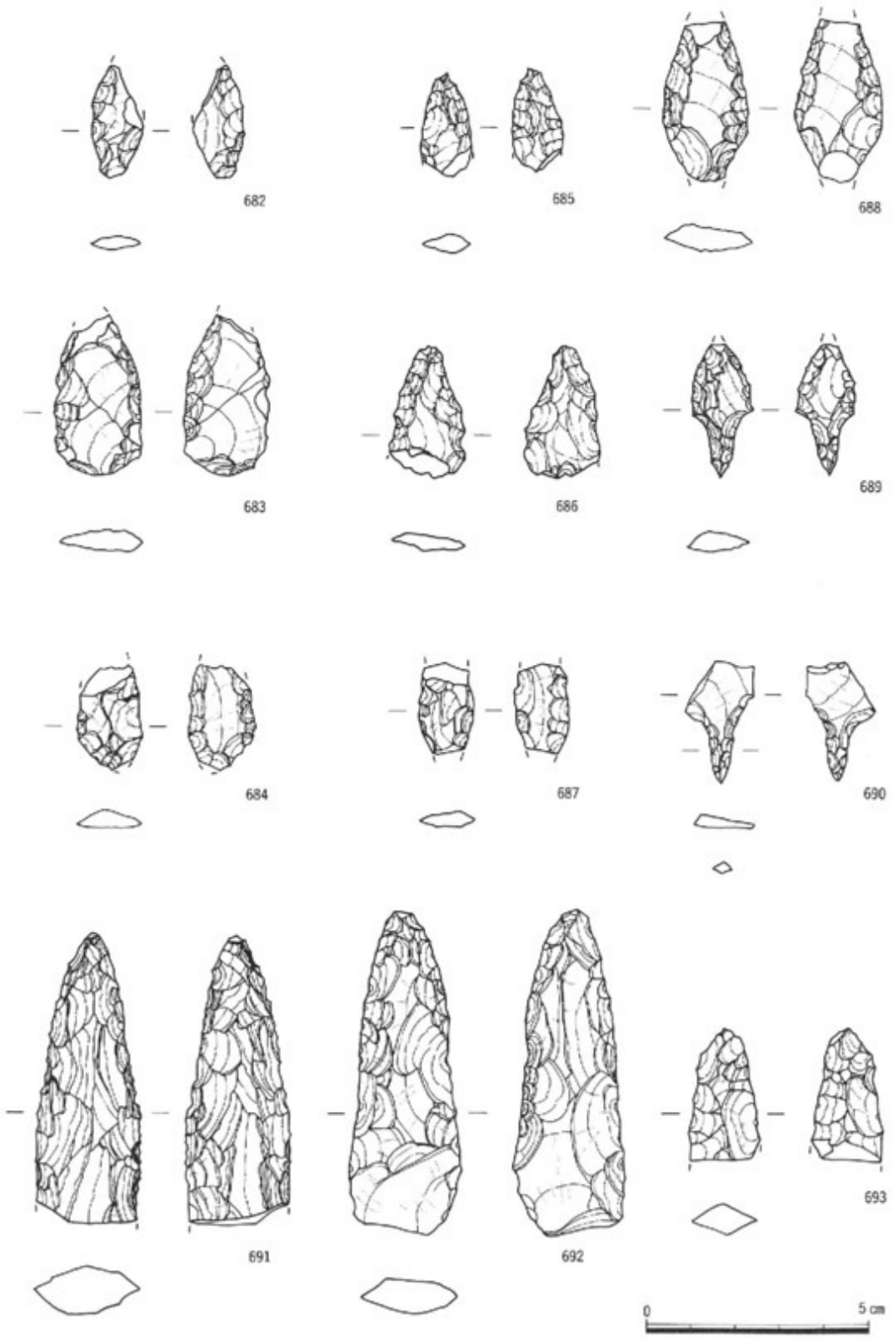
643は、鉢形土器。口縁端部を内外に拡張し上端面に、櫛描の斜格子文が施されている。



第152図　遺物包含層等出土遺物実測図　(2)



第153図　遺物包含層等出土遺物実測図　(3)



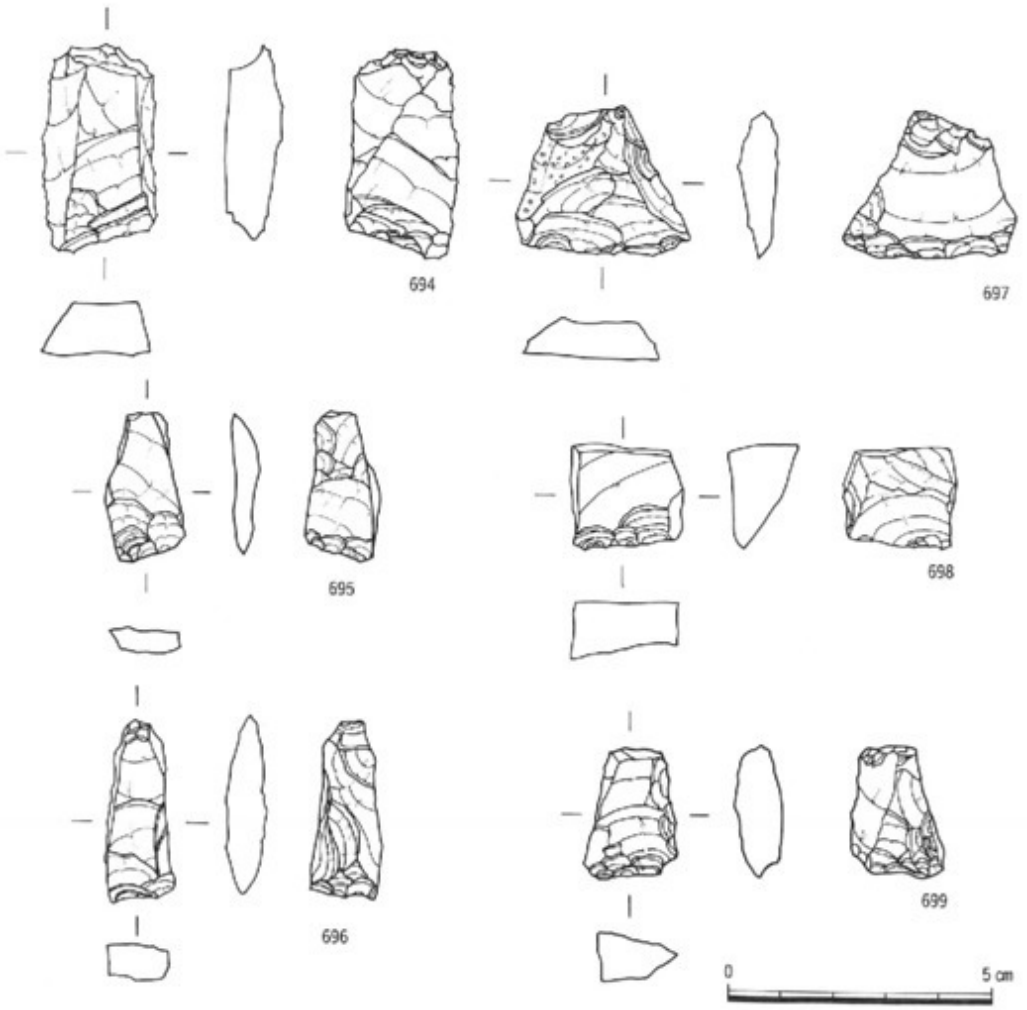
第154図　遺物包含層等出土遺物実測図　(4)

土製品（第151図）

土器片利用の土製紡錘車が2点（644・645）、穿孔されていない土製円板が1点出土している。遺構出土の場合でも、未穿孔や、途中までの穿孔のものが目立つ。

石鏃・石錐・石槍（第152～154図）

石鏃は、基部の形状でみれば、647～652・654～662は凹基無茎、663は同未製品、653・664～666・668～670は平基無茎、667・671～684が円基無茎、685～687は不明、688は凸基有茎、689は平基有茎である。平面形は二等辺三角形を基本とするが、側縁が内彎弧を描く形状のものがかなりあり、木葉形、ないしは船形になっているものが円基無茎鏃の中に目立つ。



第155図　遺物包含層等出土遺物実測図　(5)

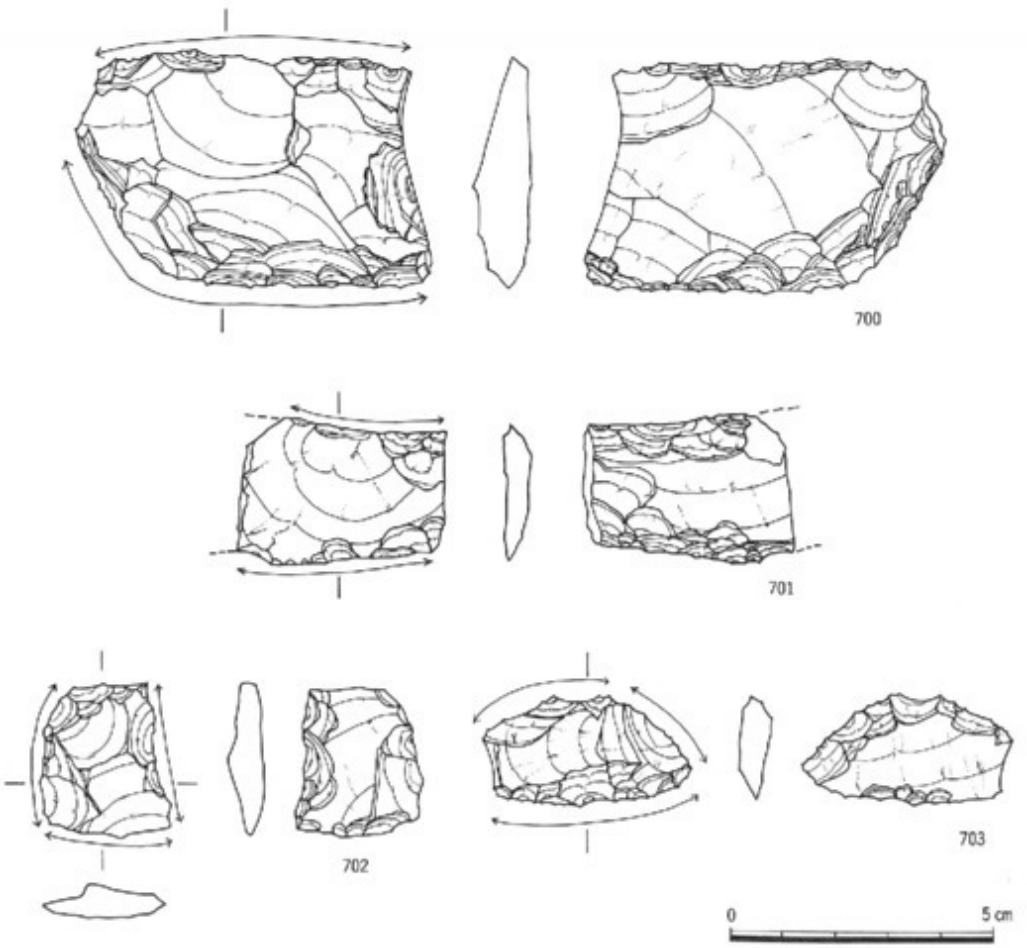
他に、明瞭ではないが、側縁基部に翼状の突起を持つ657・658がみられる。689は茎部の調整が非常に丁寧で石錐の可能性もあるが、鏃身部の形状から石鏃と捉えた。

690は石錐、基部の形は不定形で、調整も粗雑である。

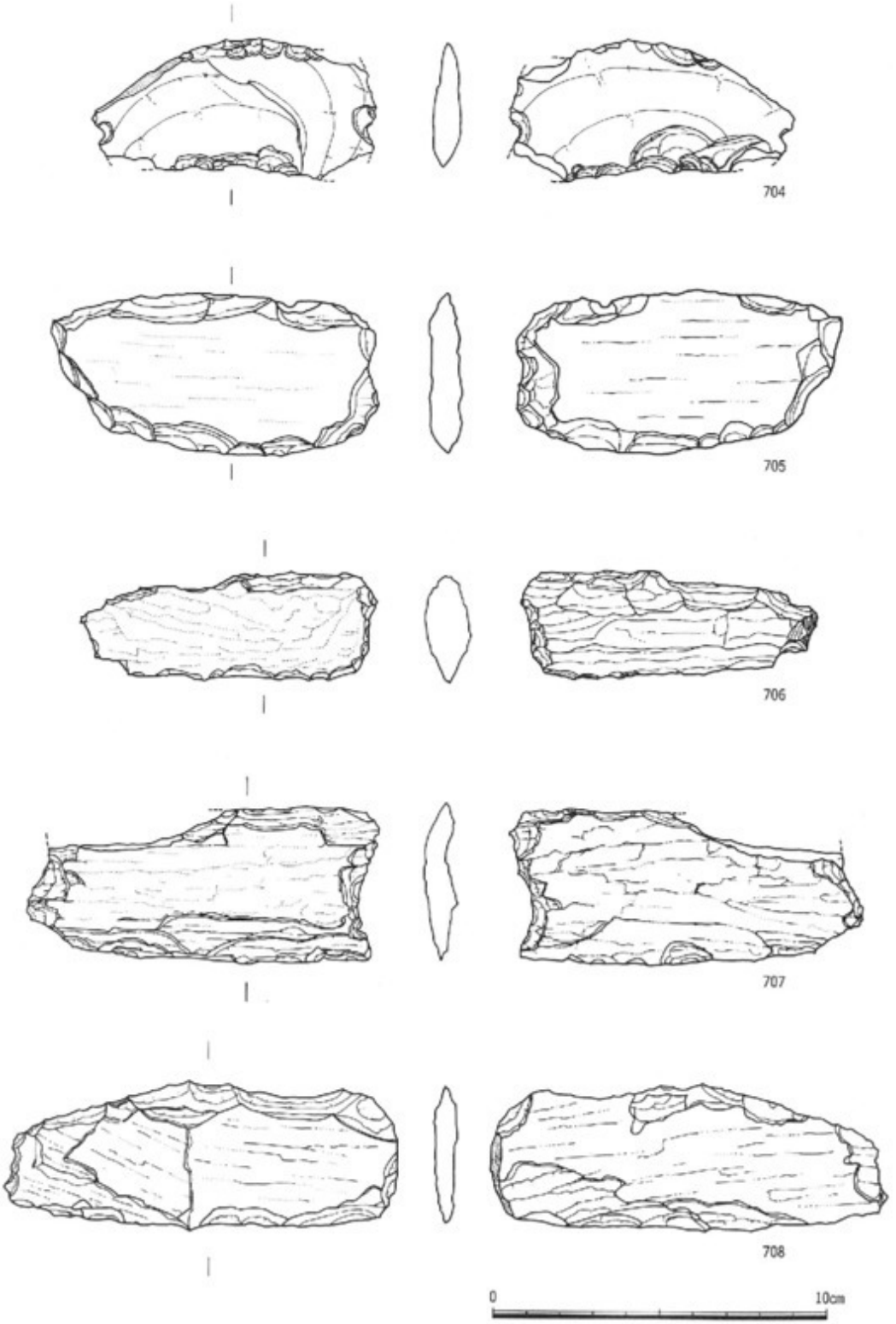
691～693はともに基部を欠損しているが、石槍である。691は、階段状の剥離を多く観察することができ、両極打法を多用しながら、丁寧に成形・調整を行っている。断面形は菱形に近い。692は、691に較べると、やや調整は粗い。剥離面の大きさは不揃いで、形状も非対称である。693は前2者に較べると、やや小振りであるが、断面形は菱形を呈している。

楔形石器（第155図）

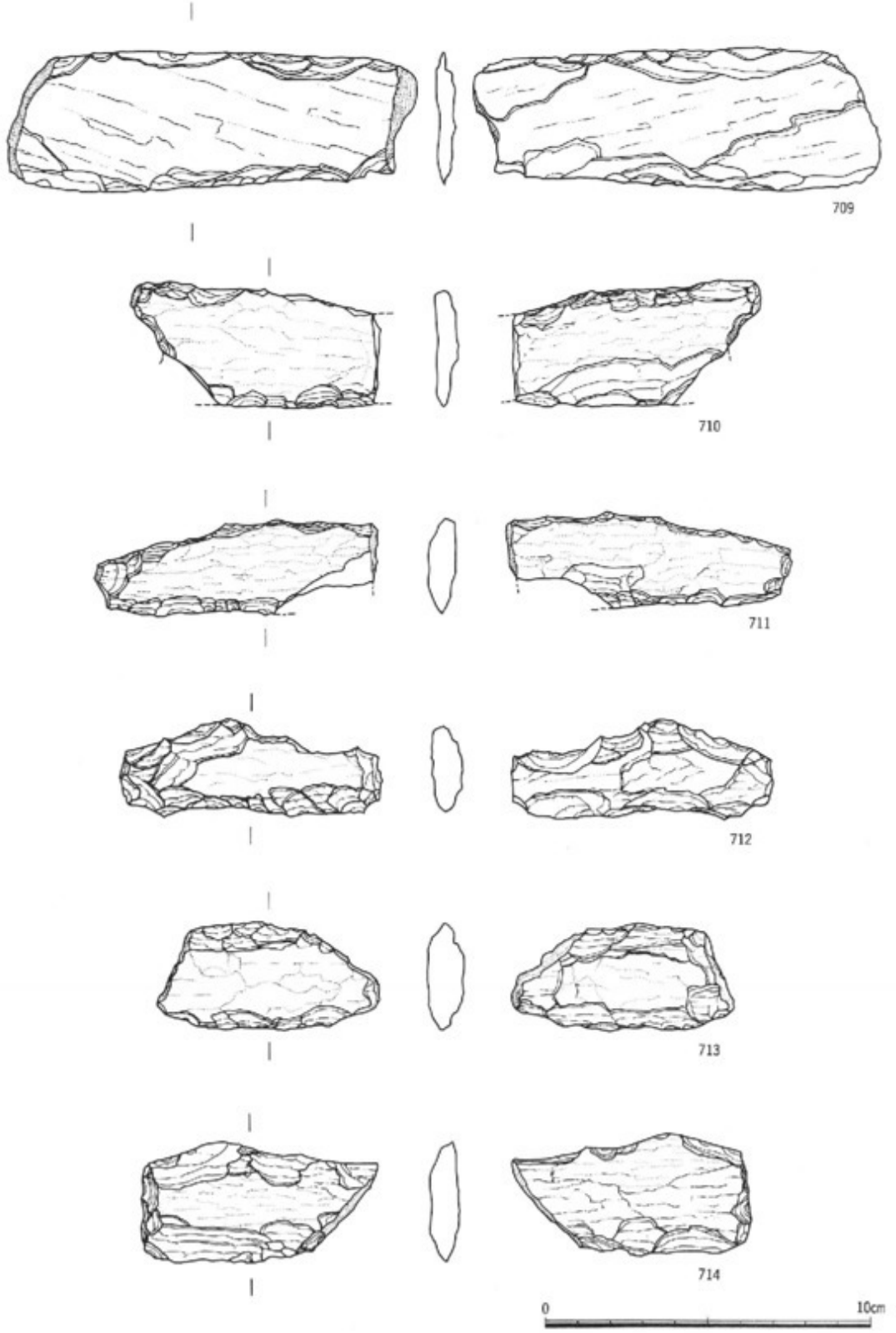
694～699は楔形石器である。多くは左右両辺が裁断面で、上下端は両極打法による。



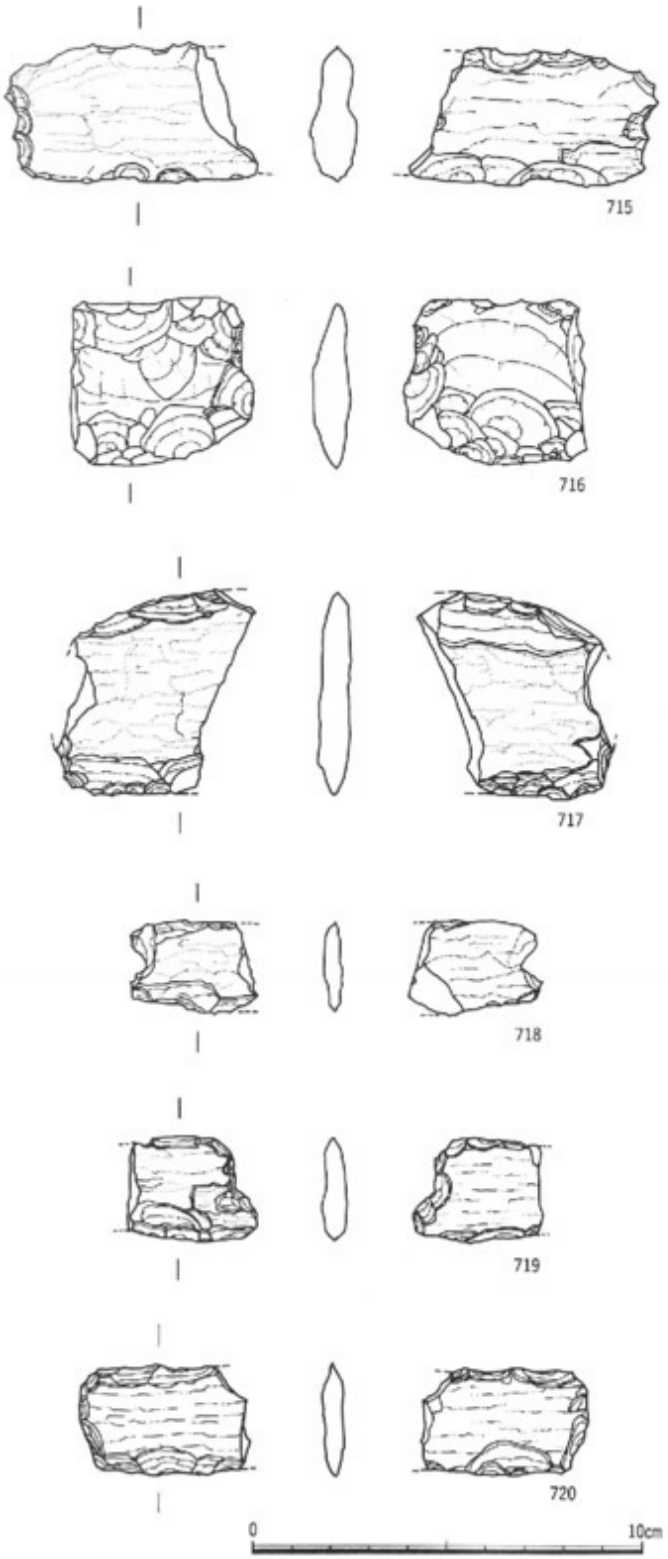
第156図　遺物包含層等出土遺物実測図　(6)



第157図　遺物包含層等出土遺物実測図　(7)



第158図　遺物包含層等出土遺物実測図　(8)



第159図　遺物包含層等出土遺物実測図　(9)

スクレイパー（第156図）

700～703はいずれも剝片を利用し、縁辺部に両面調整あるいは、両極打法による粗い刃部を形成している。

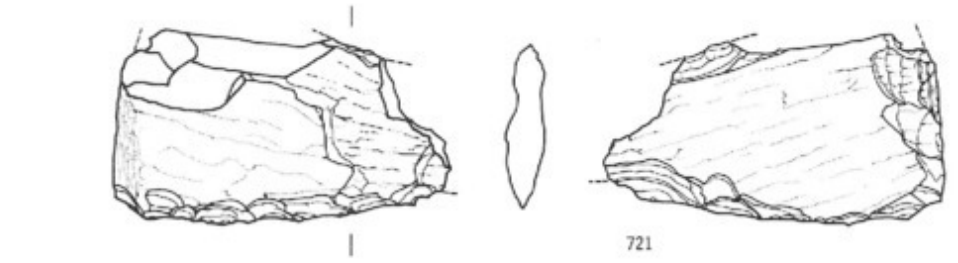
打製石庖丁（第157～160図）

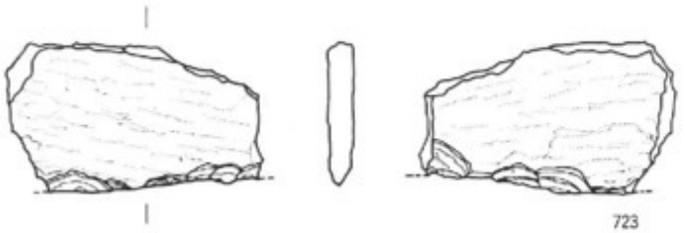
704・716は、本遺跡内では数少ないサヌカイト製の打製石庖丁である。704は両端部に小さな抉りを施し、716は半分欠損しているが、わずかに抉りが認められる。705以下は、結晶片岩製で、端部に抉りのあるもの（705・707・715・718・719）とないもの（706・708・709～714・720～726）がある。欠損品が多く、はっきりしたことはいえないが、大きさにはいくつかのタイプがあると考えられる。

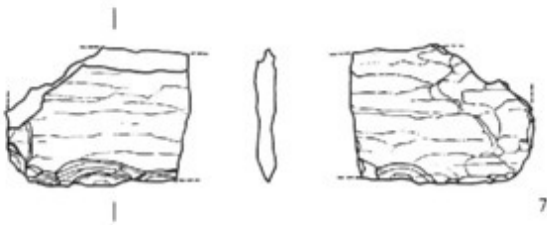
石鎌・石鋸（第161図）

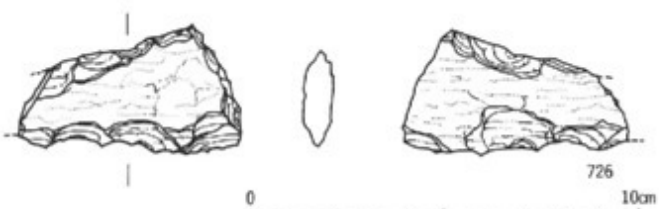
727は、緑色片岩の剝片で、幅広い部分の両端に擦り切るように抉りを施している石器である。抉りと全体の形状から、石鎌と考えたが、刃部は特に調整を加えているわけではなく、疑問も残る。

728・729は、石鋸状の石器である。刃部が擦り潰れている。刃部の形成は、728が両極









第160図　遺物包含層出土遺物実測図 ⑽

打法、729は剝片の縁辺をそのまま利用したものである。

磨製石斧（第162～164図）

730～735は柱状片刃石斧である。刃面側基部の抉り入りは、施されていない(730・735)か、敲打による滑り止め程度の簡略なもの（731・732）となっている。また、剝離面・自然面や、敲打痕等をそのまま残すものも目立ち、全面を丁寧に研磨するものはほとんどない。

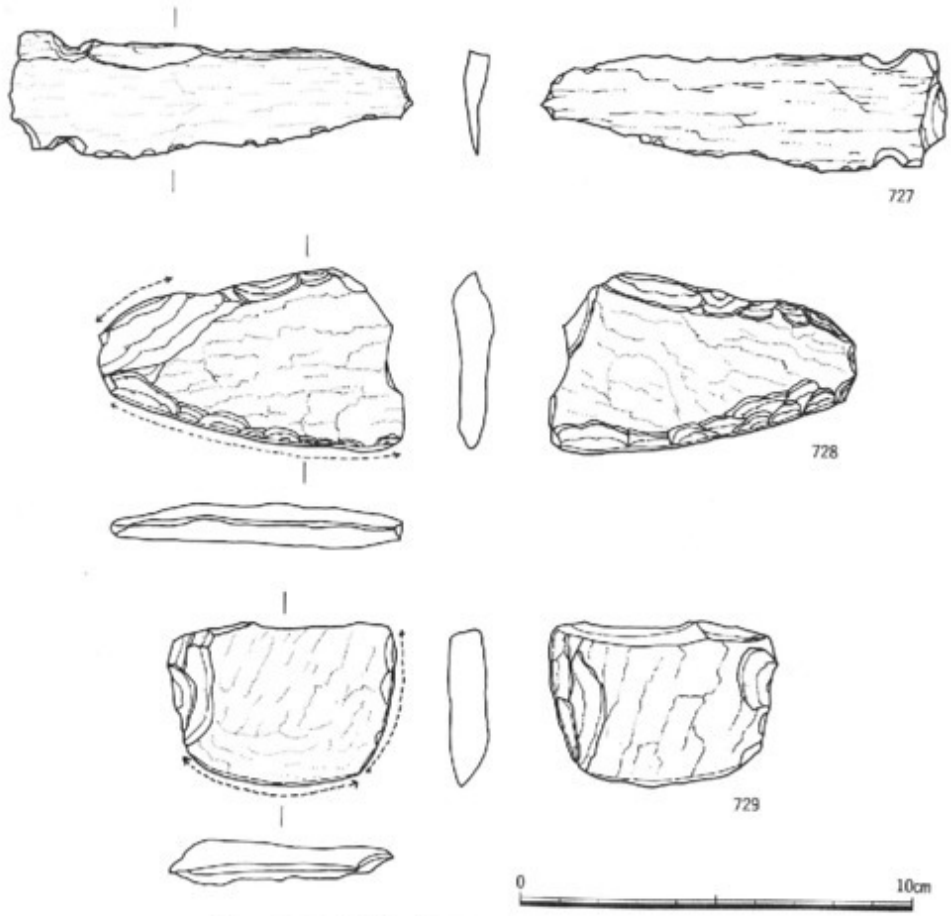
736は、扁平片刃石斧で、これも丁寧に研磨されているのは刃部だけである。

737は小型円柱状石斧、738・739は小型扁平石斧で、737は未製品である。

740は太型蛤刃石斧。刃部を欠損するが、刃部のみ丁寧な研磨を施す。基部は自然面と敲打痕を多く残す。

叩石（第164図）

741は自然礫を利用、縁辺を中心に多く敲打痕を残す。



第161図　遺物包含層出土遺物実測図　(11)

注

（1）　百間川今谷遺跡等で、「く」の字状に外反する口縁部をもち、最大径の張る形態を壺Hと分類する。岡山県教育委員会『岡山県埋蔵文化財調査報告51百間川兼基遺跡１、百間川今谷遺跡１』1982

（2）　愛媛県・城ノ向遺跡に器台とした中期後半の例があり、器高・口径もほぼ同じものである。後期の例として、矢ノ塚遺跡・仮ノ宗遺跡・旧練兵場跡遺跡で出土している。

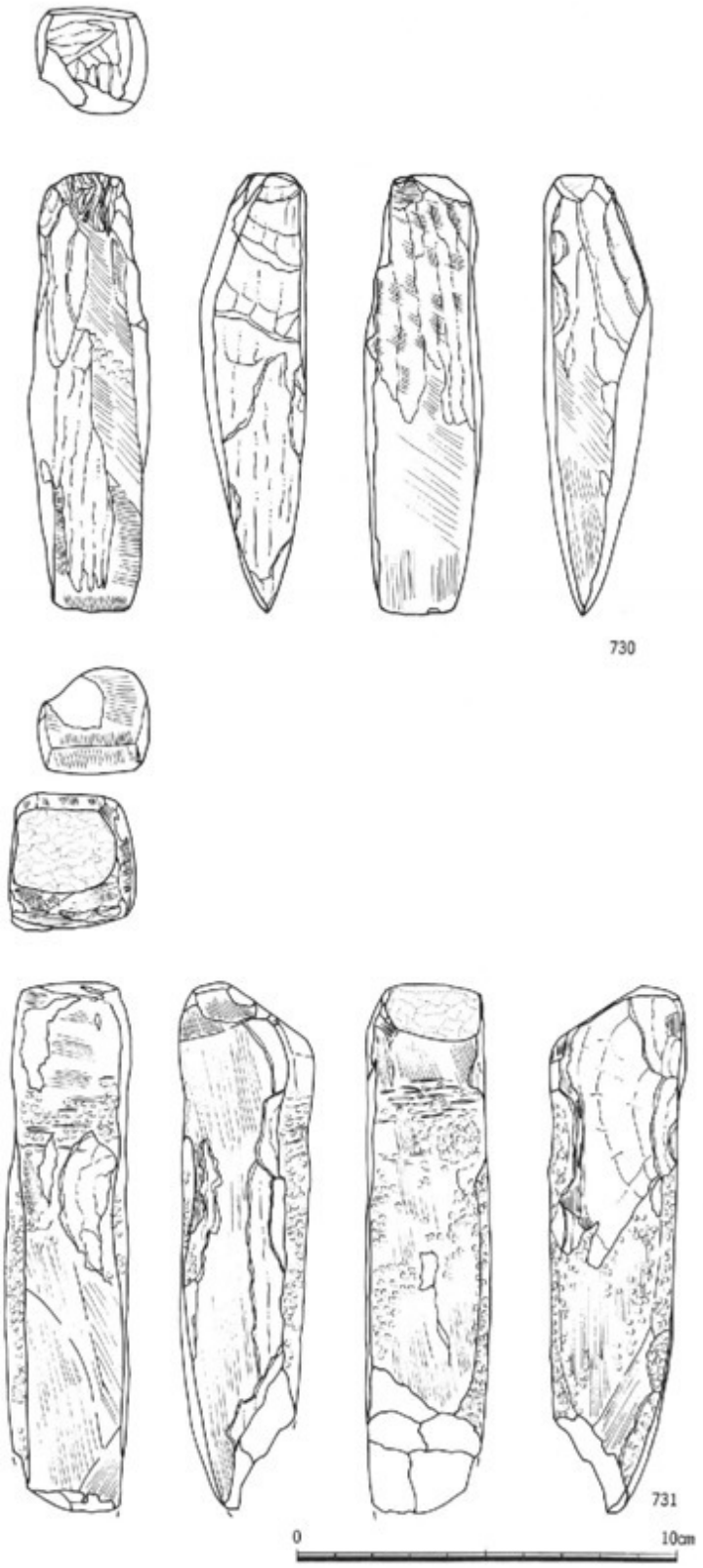
財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター「城ノ向遺跡」『一般国道33号砥部道路関係埋蔵文化財調査報告書』II　1981

香川県『香川県史13資料編考古』1987

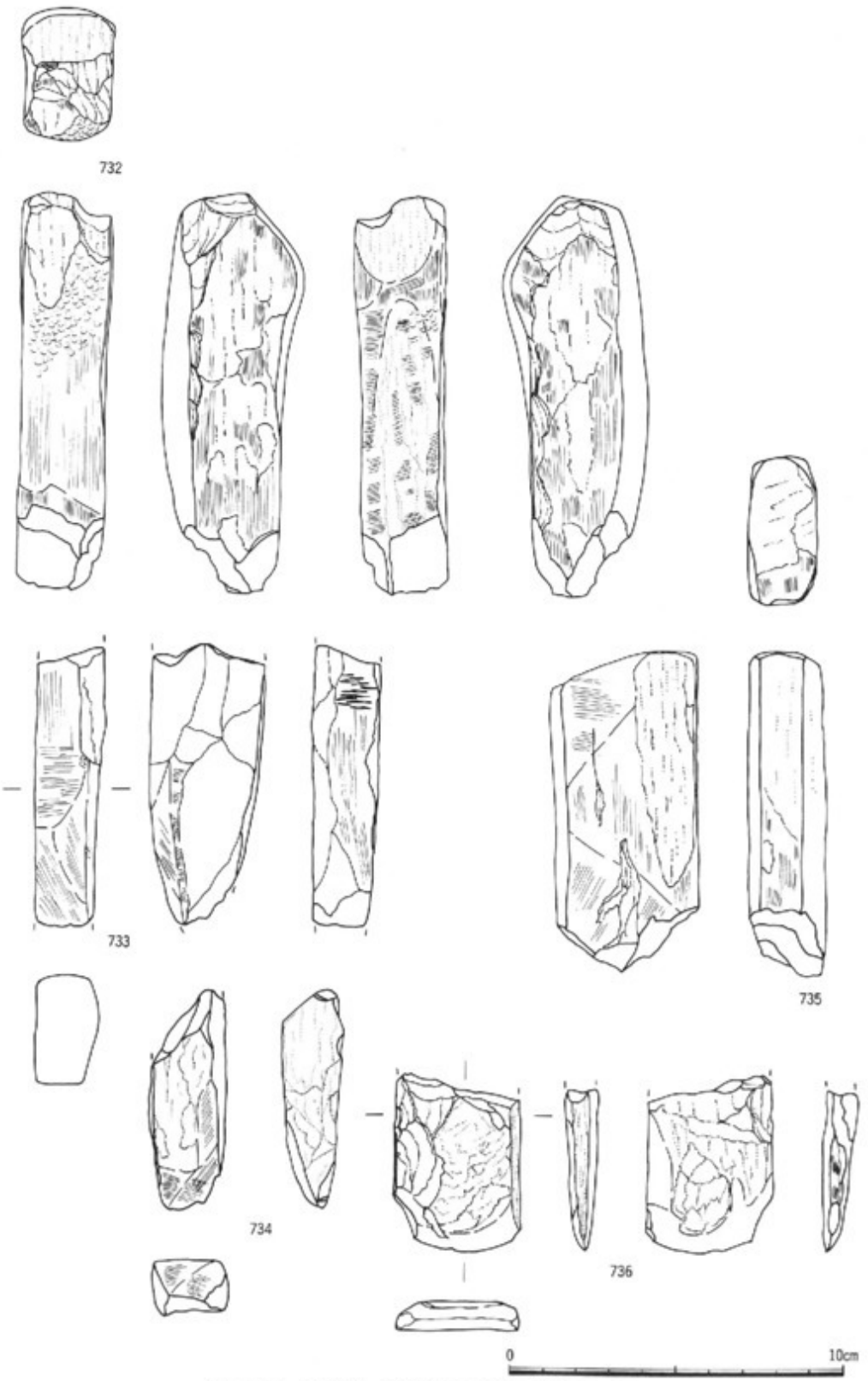
（3）　吉備で中期前葉に底部に２孔一対の穿孔がある鉢形土器がみられる。西讃三豊郡天神遺跡でも同様の例がみられる。

岡山県教育委員会「南方遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』40　1981

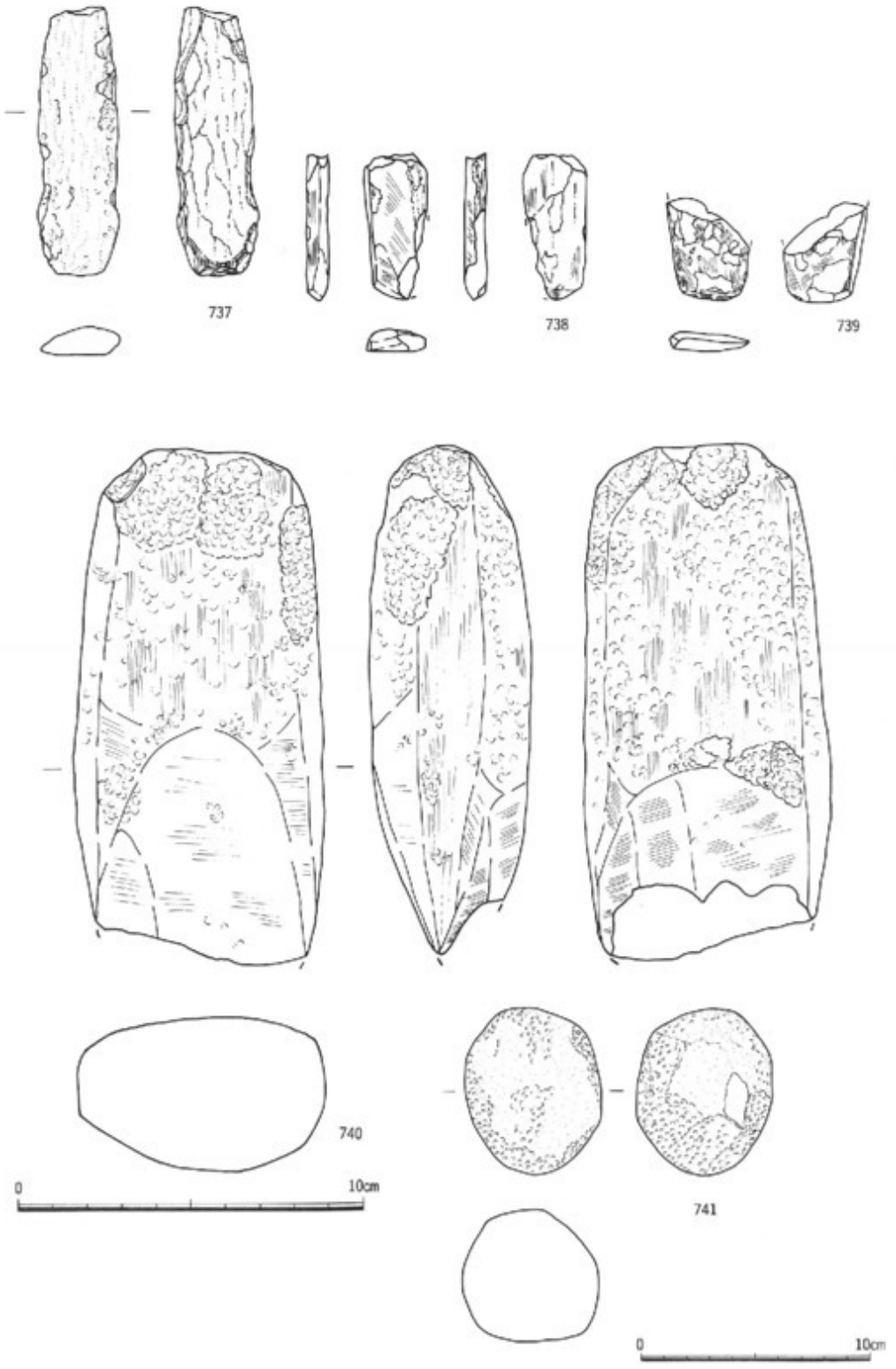
香川県『香川県史13資料編考古』1987



第162図　遺物包含層等出土遺物実測図　(12)



第163図　遺物包含層等出土遺物実測図　(13)



第164図　遺物包含層等出土遺物実測図　(14)

(3) 中世

中世には、掘立柱建物、土壙墓等がつくられる（第165図）。遺物包含層出土の遺物から、12世紀～16世紀の時期幅があるとみられるが、個々の遺構の時期を特定することは困難である。中世に構築されたとみられる遺構は、掘立柱建物跡19棟、溝７条、土壙墓・土坑27基、柱穴・小穴50基である。段丘面の中央部やや東よりに遺構は集中する傾向である。掘立柱建物跡は全体に散在傾向にあるが、棟の方向からみると大きく２方向に分かれる。また、溝はSD1011、SD1006、SD1007が真北からやや東に振った同じ方向を指しており、本来一条の溝であった可能性が高い。SD1005、SD1010もこれらと直交に近い方向を示しており、これらによって区画されていた可能性が考えられる。

① 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡（SA1001）（第166図）

第１調査区・第２調査区（W－12～15）にまたがって検出された。規模は１間×１間、主軸方向は真北より82°東に偏し、梁間2.80m、桁行4.80mを測る。中央部分に、水路による調査不可能な部分を挟んでいるので、桁行２間の可能性も考えられる。

Ｐ－１から土師質土器の細片が出土している。

掘立柱建物跡（SA1002）（第167図）

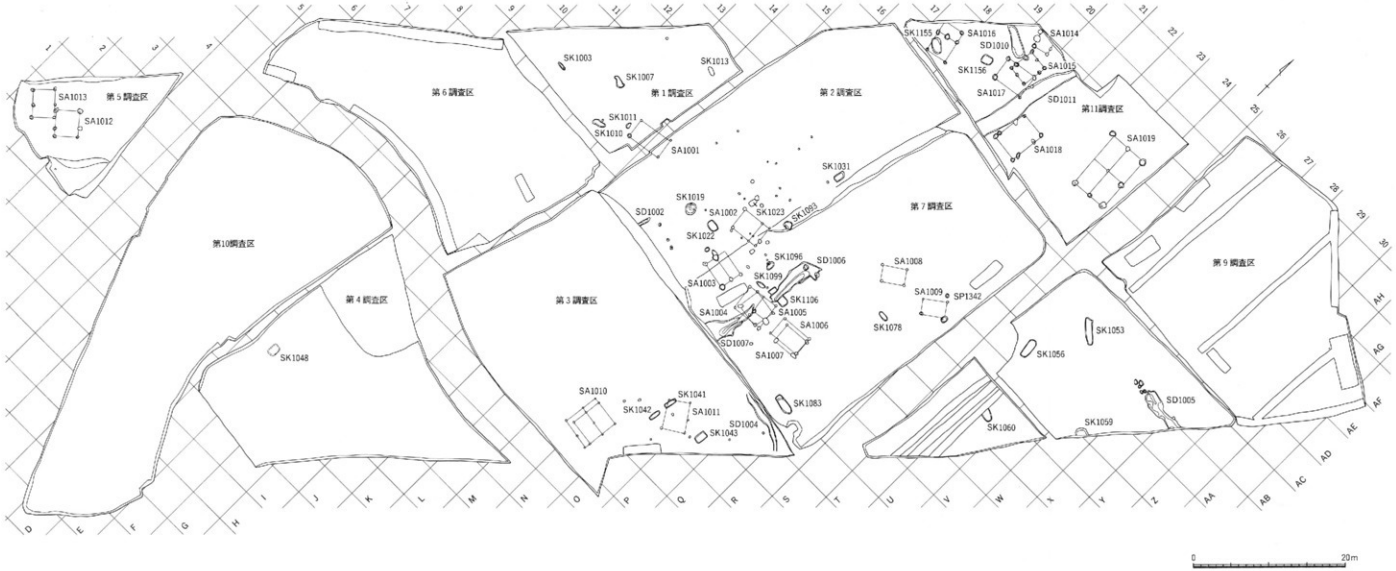
第２・７調査区（X・W－18）で検出された。規模は梁間１間×桁行３間（3.00m×4.00m）、主軸方向はN83°Eである。Ｐ－１・３、９・４、７・６は、それぞれ対応するものの、Ｐ－５・８が偏在するために、柱心間距離は一定しない。Ｐ－２・10の存在から、区画された部分が想定でき、この部分が弥生時代の土坑SK1029と重なっているため、弥生時代の遺物と中世の遺物の混在がみられる。

出土遺物（第167図）

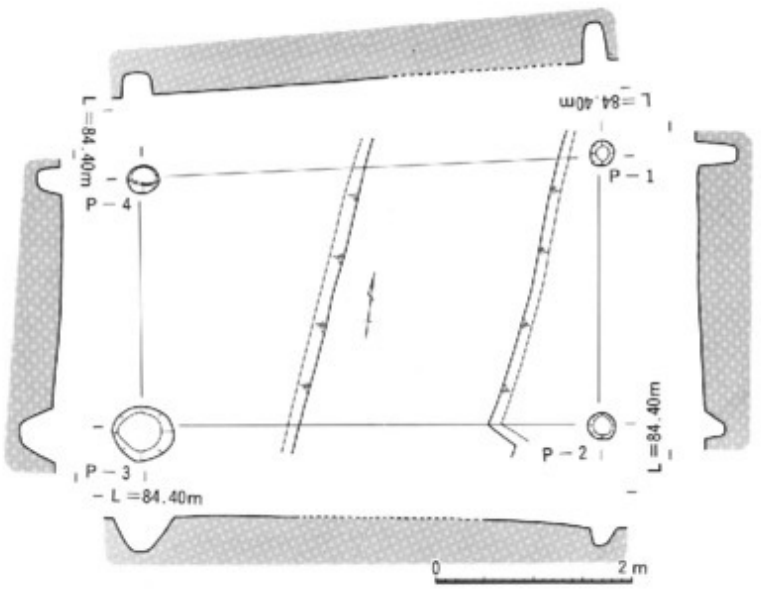
742と743はＰ－４から出土した。742は片口のついた土師質のこね鉢である。口縁端部は肥厚させ、端面は凹面に仕上げる。743は土師質で、断面円形の脚部である。

掘立柱建物跡（SA1003）（第168図）

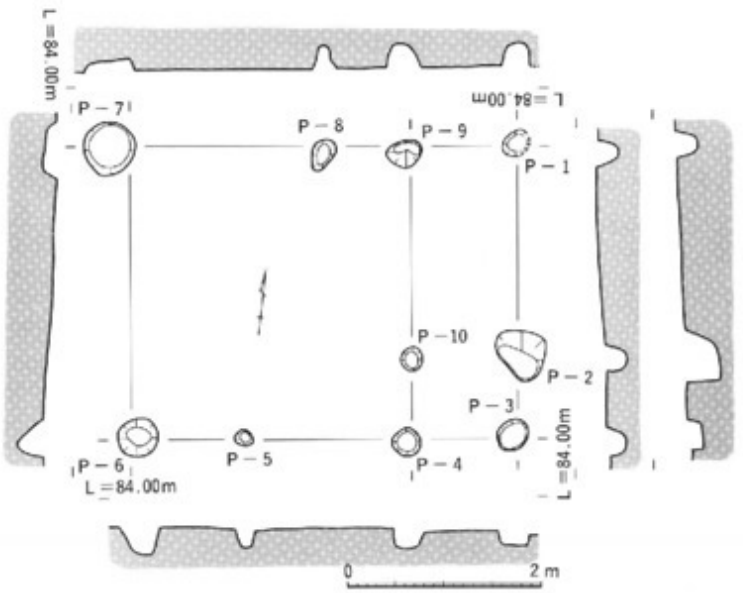
第２・７調査区（V－18・19）で検出した。規模は梁間２間×桁行１間（3.14m×3.80m）で、北西隅の柱穴を欠く。棟持柱を持つ構造とみられる。主軸はN82°Wを指す。Ｐ－１～２、

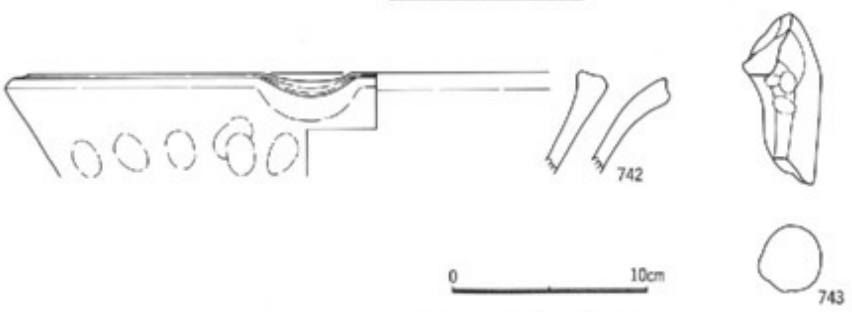


第165図　中世の遺構配置図

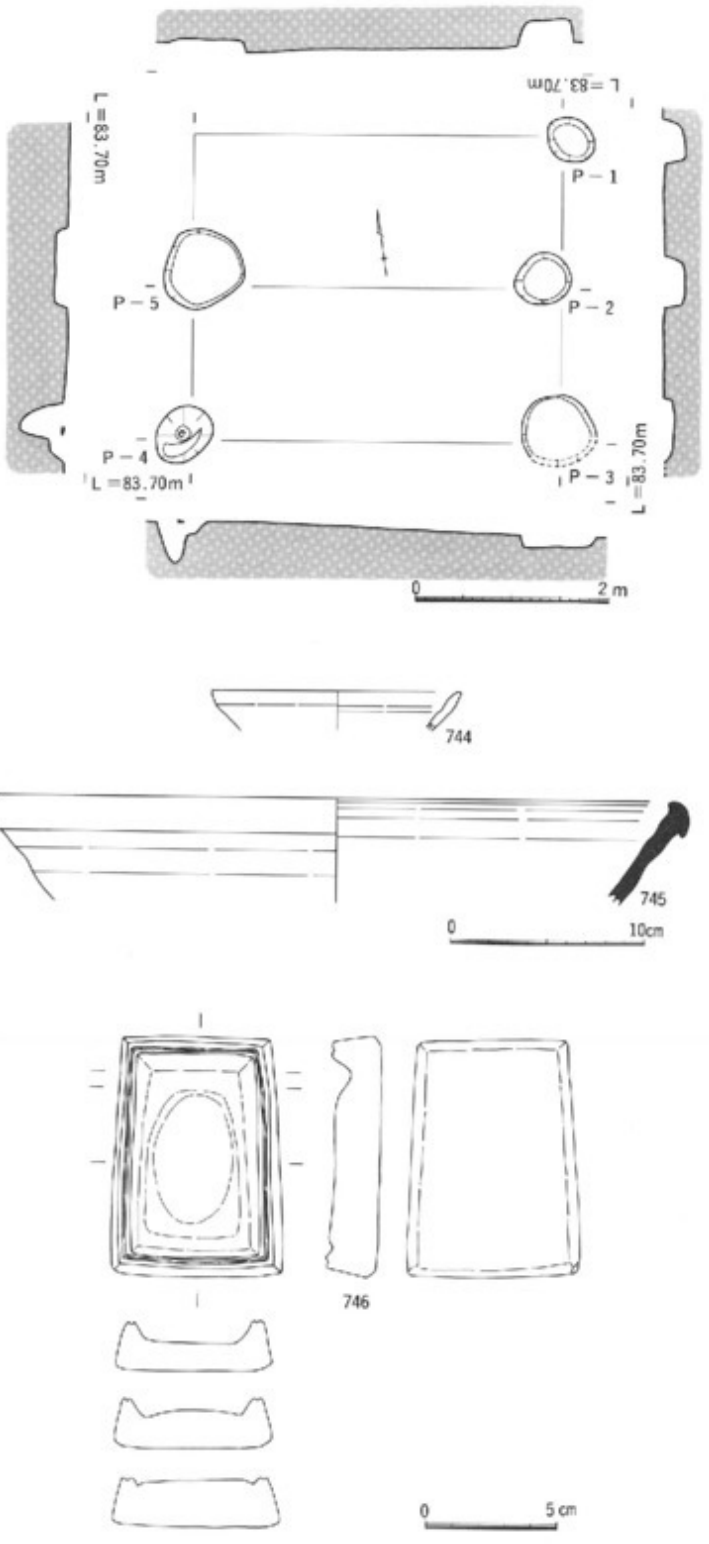


第166図　SA1001遺構実測図





第167図　SA1002遺構・出土遺物実測図



第168図　SA1003遺構・出土遺物実測図

2～3、4～5、それぞれの柱心間距離はほぼ1.6mで、一定である。

出土遺物（第168図）

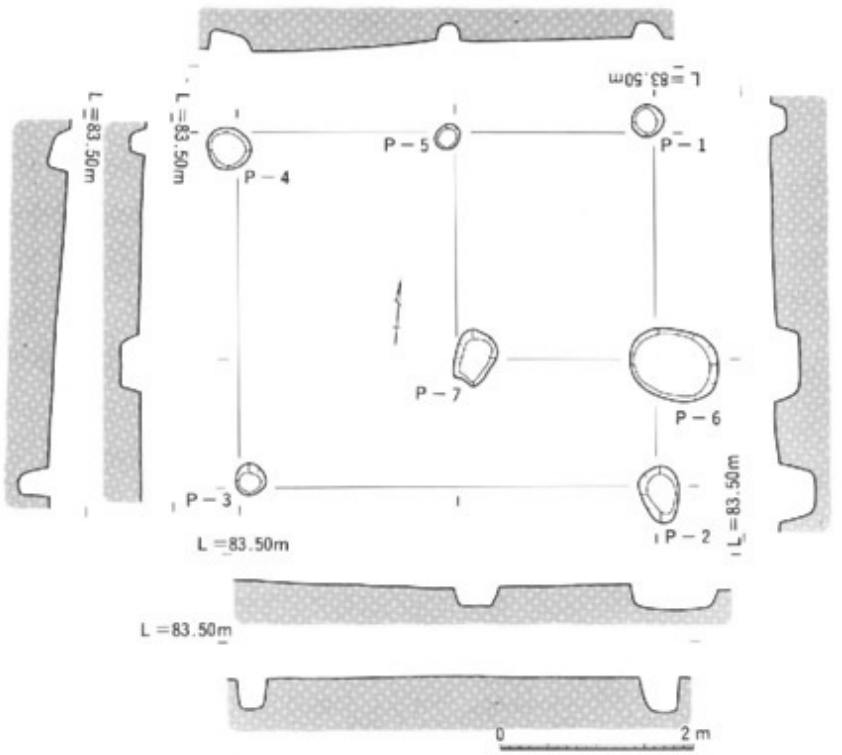
P－5から出土した744は土師質土器の椀である。体部は直線的に立ち上がり、口縁部はやや内彎。内外面ともにヨコナデを施す。745は東播系のこね鉢である。体部は直線的に立ち上がり、端部は上下に拡張、端面は丸く、口縁部外面に黒色帯がめぐる。

P－4から土師質土器片2点、瓦質の長方形硯が1点出土している。硯は長さ9.2cm、幅6.6cm、厚さ1.9cmである。

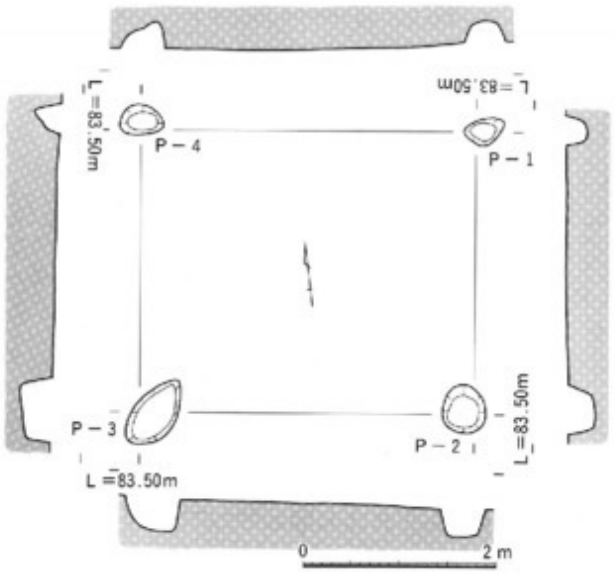
掘立柱建物跡（SA1004）（第169図）

第7調査区（V－19･20）で検出された。規模は梁間1間×桁行1間（3.62m×4.30m）だが、P－5・6・7の存在から、区画を持つ構造であろうと推定できる。この区画部分の柱心間距離は2.2～2.4mである。主軸方向は、真北から84°東に偏している。遺物はP－2から土師質土器の細片が出土している。

掘立柱建物跡（SA1005）（第170図）



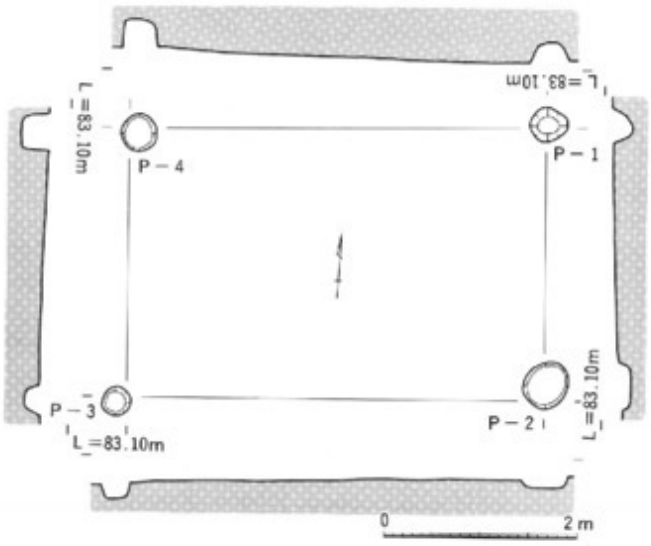
第169図　SA1004遺構実測図



第170図　SA1005遺構実測図

第7調査区（U・V－19・20）で検出された。梁間1間×桁行1間（3.00m×3.50m）の規模を持つ。主軸は真北から82°西に偏する。SA1004とほぼ重なる形で検出されており、どちらが先行するかは不明であるものの、建て替えが行われた結果であろうと考えられる。遺物はP－3に弥生土器片が混入しているだけである。

掘立柱建物跡（SA1006）（第171図）



第171図　SA1006遺構実測図

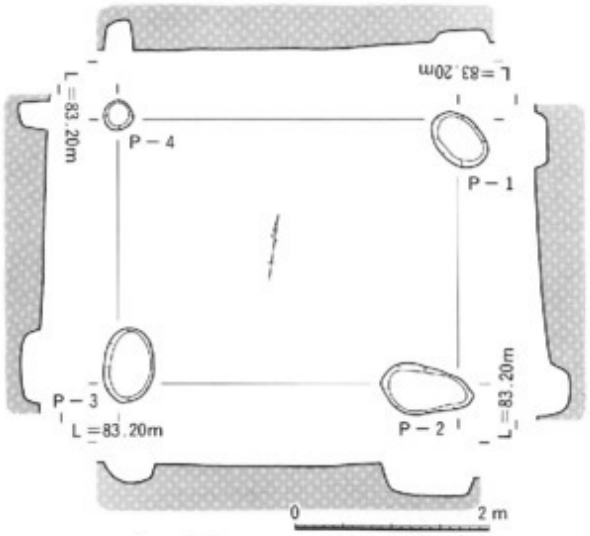
第7調査区（U・V－20・21）で検出された。規模は梁間1間×桁行1間（2.70m×4.30m）である。主軸方向は真北から82°東に偏している。柱穴は径40cm前後のほぼ円形である。柱穴からの出土遺物はない。

掘立柱建物跡（SA1007）（第172図）

第7調査区（U・V－21）で検出された。規模は梁間1間×桁行1間（2.70m×3.50m）である。主軸方向はN82°Eである。柱穴は北西隅のP－4が円形である他は長軸60～90cmの長楕円形を呈する。柱穴からの出土遺物はない。SA1006とほぼ重なっており、先後関係は不明であるが、建て替えが行われた結果と考えられる。

掘立柱建物跡（SA1008）（第173図）

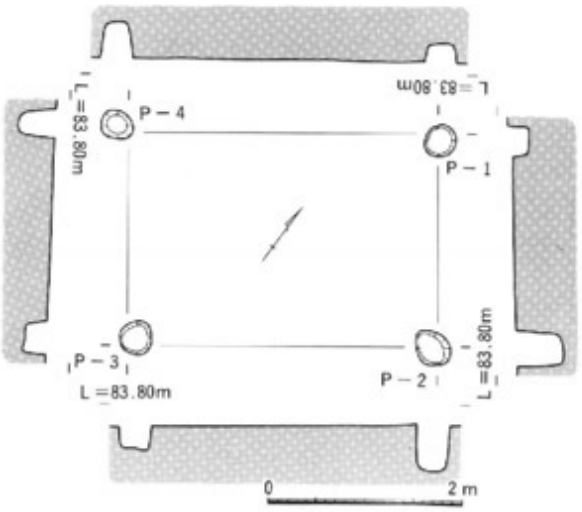
第７調査区（Ｙ－21・22）で検出された。規模は梁間１間×桁行１間（2.20m×3.20m）である。主軸方向は真北から53°東に偏する。柱穴は径40cm前後のほぼ円形で、深さは48～19cmである。遺物はＰ－４から土師質土器片が出土している。



第172図　SA1007遺構実測図

掘立柱建物跡（SA1009）（第174図）

第７調査区（Ｙ・Ｚ－23）で検出された。規模は梁間１間×桁行１間（2.20m×3.20m）である。主軸方向は真北から55°東に偏する。柱穴は、Ｐ－１・４はほぼ円形であるが、Ｐ－３は重なるピットの一部、Ｐ－２は土坑状の大きいプランであるが、その中の一部分が柱根部分にあたる。遺物は弥生土器片の混入があるだけである。



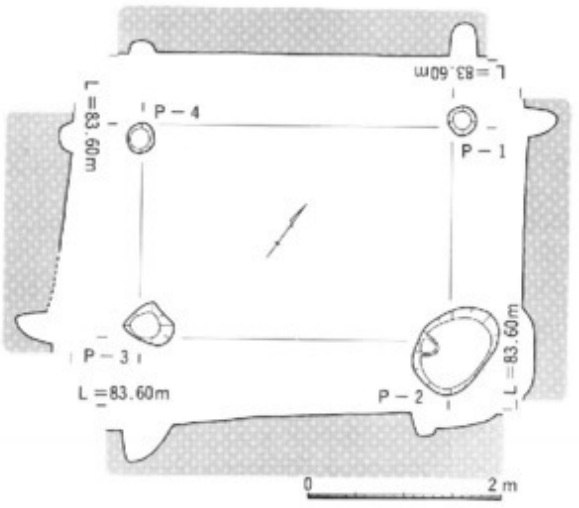
第173図　SA1008遺構実測図

掘立柱建物跡（SA1010）（第175図）

第３調査区（Ｐ・Ｑ－18・19）で検出された。梁間１間、桁行２間で、南側と西側に庇をもつ構造である。庇の部分を含めて4.40m×5.10mを測る。建物本体部分は3.60m×4.30m、桁行の柱心間距離は2.15mである。主軸は真北から７°東に偏する。庇部分は幅0.80mである。

建物の中央に柱穴Ｐ－７があり、瓦質土器の椀が出土した。一部を欠くが、底からやや浮いた状態で、上向き、やや上位に拳大の砂岩が出土している。地鎮に伴う行為の遺物であろうと考えられる。柱抜き取りの後の、または、地鎮目的の小穴の両方の可能性が考えられる。

出土遺物（第175図）

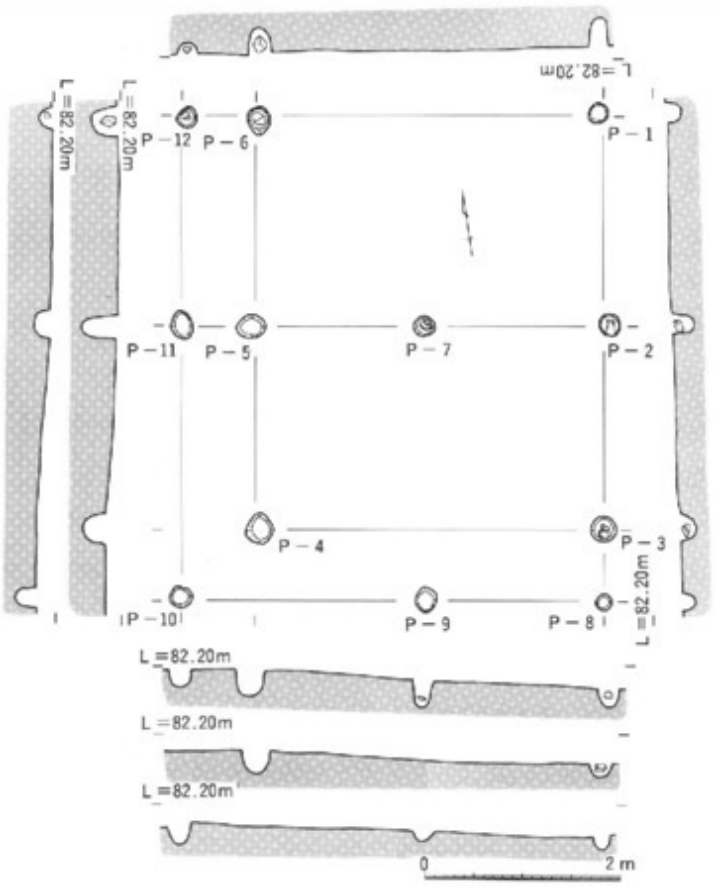


第174図　SA1009遺構実測図

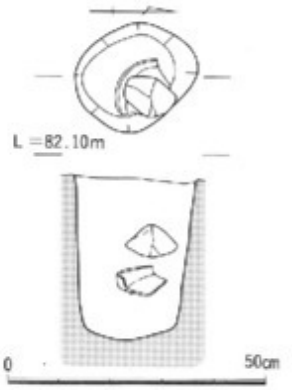
柱穴より出土した瓦質土器の椀（747）は、体部・口縁部やや内彎気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。底部は回転糸切り後、断面方形の低い高台を張り付ける。内面にはハケともユビナデともみえる線条痕が観察できる。

掘立柱建物跡（SA1011）（第176図）

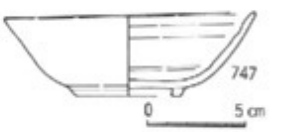
第3調査区（R・S－20・21）で検出された。規模は梁間1間×桁行2間（3.00m×4.00m）であ



第175図　SA1010遺構・出土遺物実測図



P－7実測図



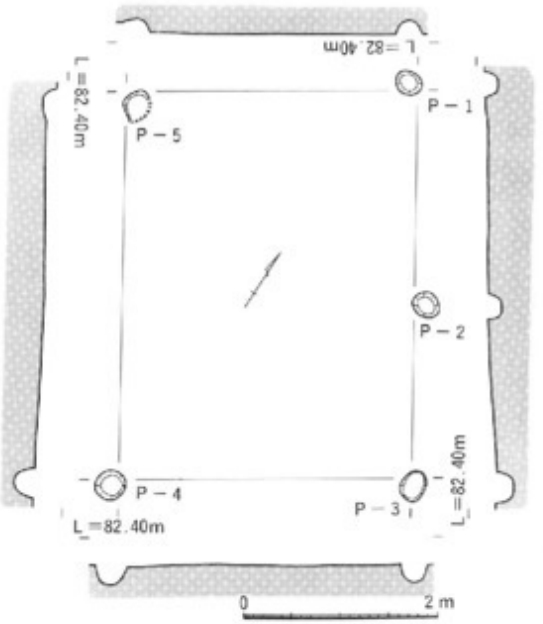
る。主軸は真北から32°西に偏する。柱穴は径30cm内外で、楕円形を呈するものが多い。桁行で西辺中間の柱穴を欠く。東辺中間のP－2も、やや南に偏在することから、東南側に入り口が設けられる構造と考えられる。P－4から土師質土器片が出土している。

掘立柱建物跡(SA1012)（第177図）

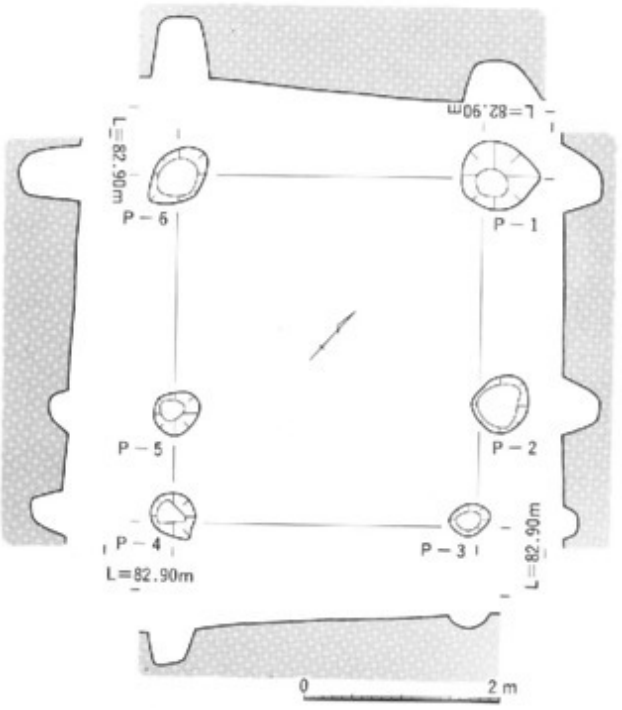
第5調査区（L・M－3・4）で検出された。規模は梁間1間×桁行2間（3.14m×3.60m）である。棟方向は真北から42°西に偏する。柱穴は円形で、径は40cmから80cmとばらつきがある。桁行の柱心間距離はP－1・2間は2.35m、P－5・6間で2.45mとやや南側に偏在する。出土遺物はなく、この調査区自体の出土遺物が少ないため、時代についてはまったく不明である。

掘立柱建物跡(SA1013)（第178図）

第5調査区（K・L・M－2・3）で検出された。規模は梁間1間×桁行2間（2.93m×3.86m）である。棟方向は真北から45°西に偏する。柱穴は円形または楕円形で、径は30cmから60cmとややばらつきがある。P－1・2間、P－5・6間の柱心間距離は2.07mでわずかに南側に偏在する。SA1012



第176図　SA1011遺構実測図



第177図　SA1012遺構実測図

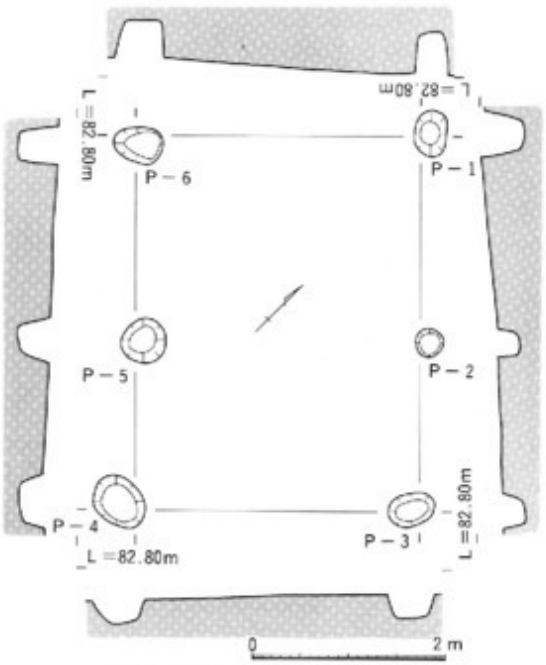
と一部接しており、棟方向がほぼ一致することから、先後関係は不明だが、建て替えが行われた結果であろうと考えられる。

掘立柱建物跡（SA1014）（第179図）

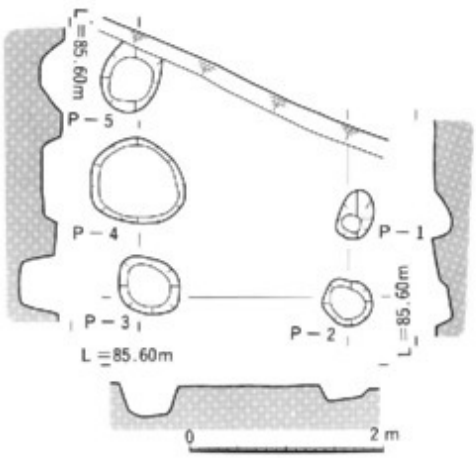
第11調査区（AF－20）で検出され一部が調査区外に延びる。規模は梁間1間(2.14m)、桁行は検出部分で2間（2.50m）である。棟方向は真北から17°西に偏する。柱穴はほぼ楕円形で、P－4は大きく、浅いが、P－1に対応するものと捉えた。

掘立柱建物跡（SA1015）（第180図）

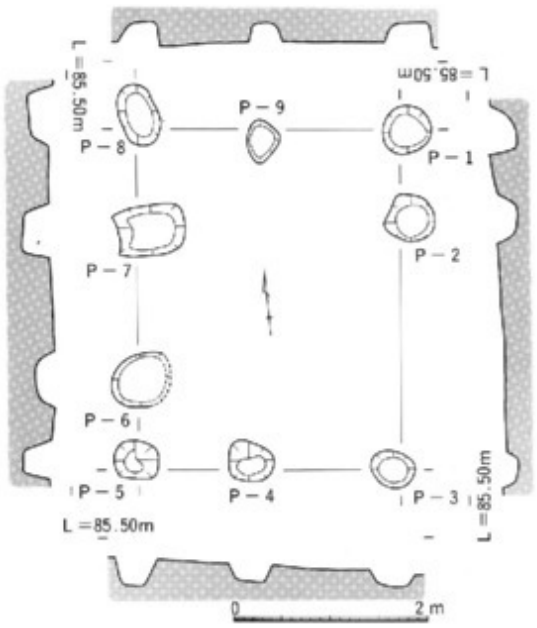
第11調査区（AE・AF－20・21）



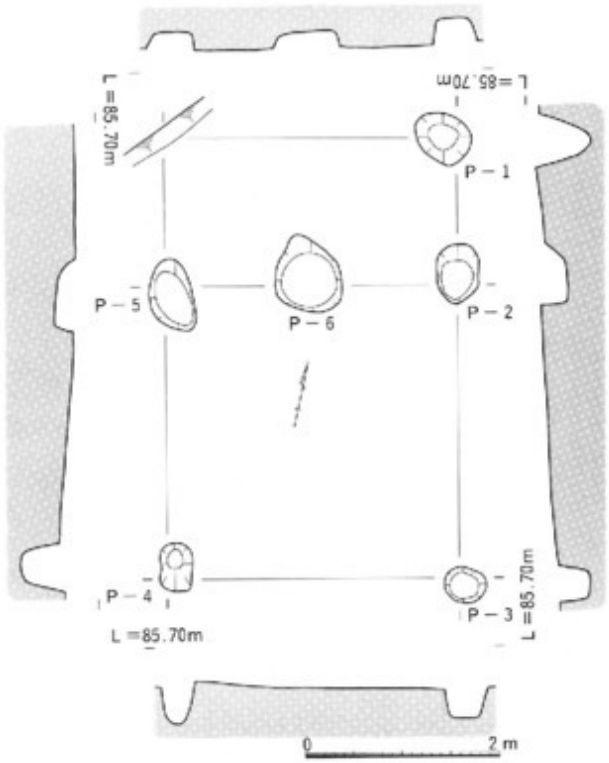
第178図　SA1013遺構実測図



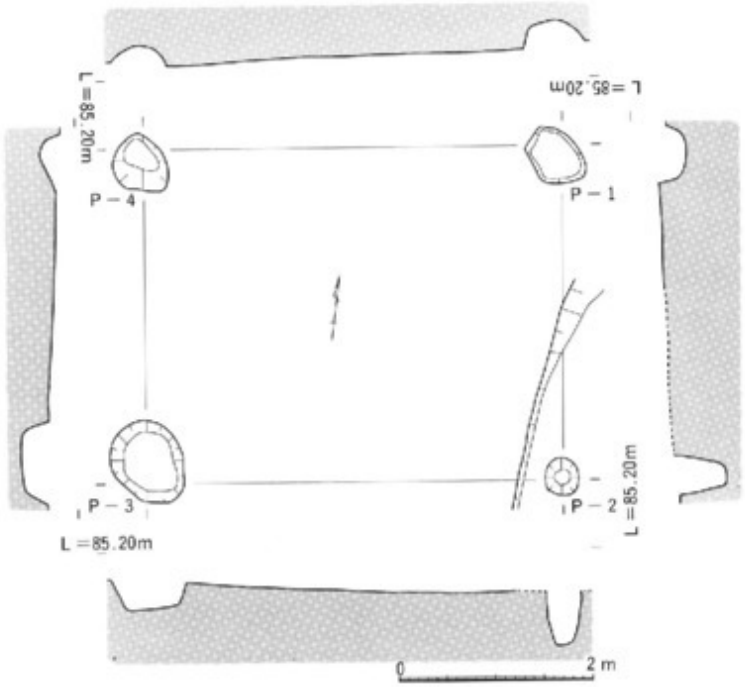
第179図　SA1014遺構実測図



第180図　SA1015遺構実測図



第181図　SA1016遺構実測図



第182図　SA1017遺構実測図

で検出された。梁間2間×桁行3間（2.70m×3.50m）の規模で、棟持柱を持つ構造である。棟方向は真北から5°東に偏する。桁行でP－2・3間にP－6と対応する柱穴を欠く。他の柱はそれぞれが対応するものの、0.92～1.52mと一定しない。柱穴は隅丸方形状のものが多い。出土遺物はP－9から土師質土器片が出土している。

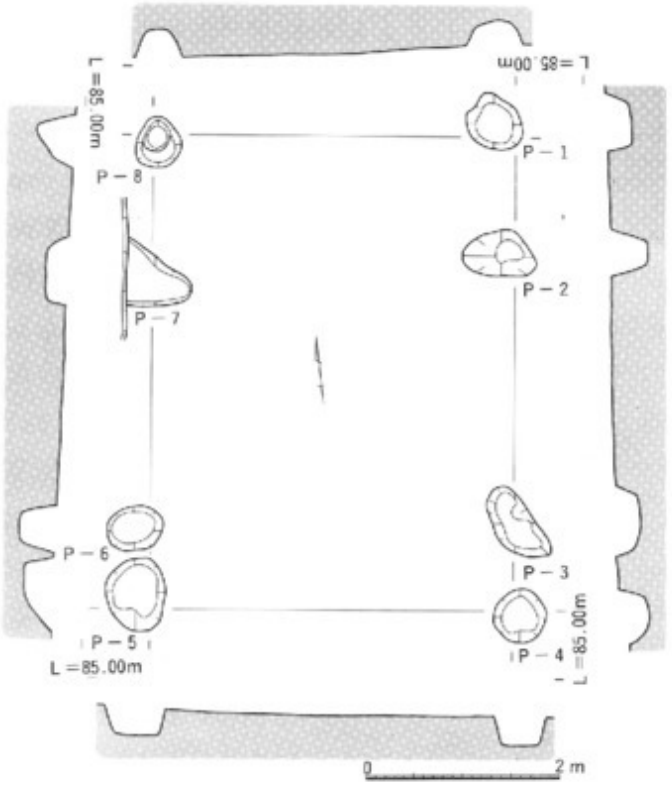
掘立柱建物跡（SA1016）（第181図）

第11調査区（AD・AE－18・19）で検出された。P－1に対応する柱穴は調査区外だが、梁間1間×桁行2間（3.00m×4.50m）の規模を有するものと考えられる。棟方向は真北から13°西に偏する。柱穴は円形・方形状など様々で、大きさもばらつきがある。P－1・3・4は31～58cmだが、P－2・5・6は17～27cmと浅い。P－1・2間、1.50m、P－2・3間は3.00mとP－2・5・6が北側に偏在する。

掘立柱建物跡（SA1017）（第182図）

第11調査区（AE－20・21）で検出された。規模は梁間1間×桁行1間（3.40m×

4.30m）である。棟方向は真北から83°東に偏する。柱穴は溝SD1011に重なるものがあり、溝の埋没後に構築されたものとみられる。



第183図　SA1018遺構実測図

掘立柱建物跡（SA1018）（第183図）

第11調査区（AC～AE－21・22）で検出された。規模は梁間1間×桁行3間（3.74m×4.86m）である。棟方向は真北から7°東に偏する。桁行の柱穴はそれぞれ対応するものの、柱心間距離がP－1・2間は1.20m、P－2・3間が2.80m、P－3・4間は0.90mと異なる。

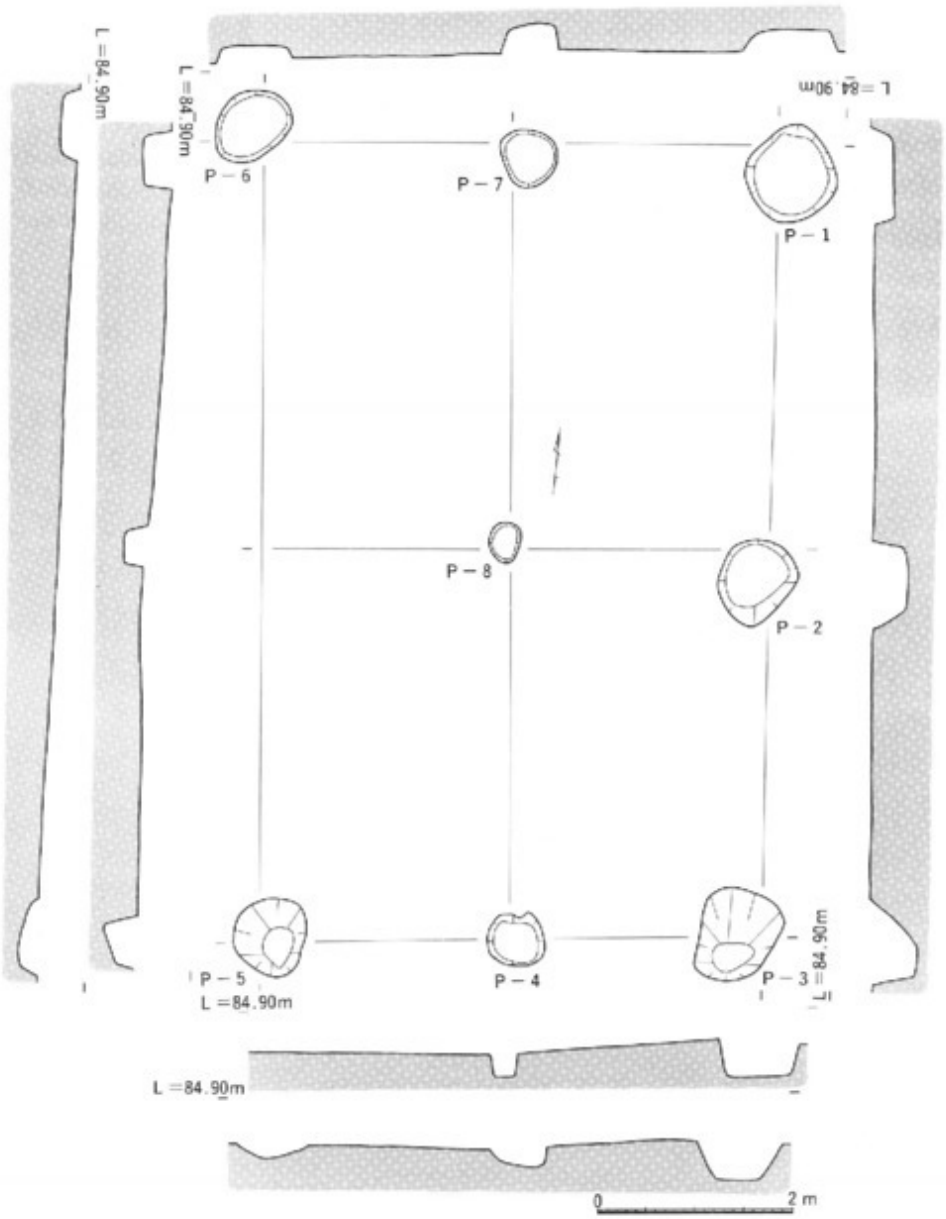
掘立柱建物跡（SA1019）（第184図）

第11調査区（AD～AF－23・24）で検出された。弥生時代の竪穴住居跡SB1010にほぼ重なって建てられている。規模は梁間2間×桁行2間で、5.20m×8.10mを測る。棟持ち柱を持つ総柱の建物とみられるが、P－5・6間に柱穴を欠く。棟方向は真北から5°西に偏している。柱穴は楕円形の長軸1m程度の大きなものが含まれているが、それに比して深度が25～50cm程度と浅い。柱穴からの出土遺物はない。

②　溝

溝（SD1006）（第185図）

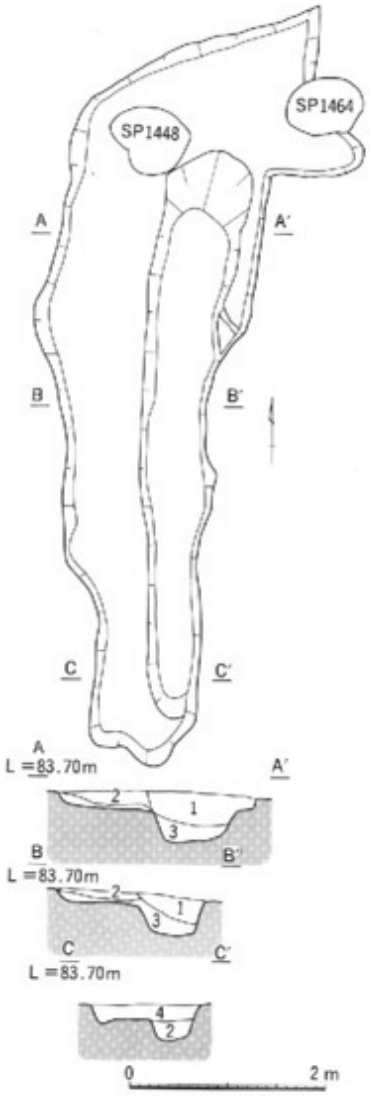
第7調査区（W・X－20）で検出された南北方向の溝である。検出部分の長さ5.3m、幅は最大部分で2.2mを測る。東側側辺に添って、幅0.7mで延長5.8mにわたり一段深くなる部分があり、断面形は階段状となっている。土層観察によると、一段深い部分が再掘削によるものとは認められないが、北半で一部再掘削が行われた様子が観察できる。



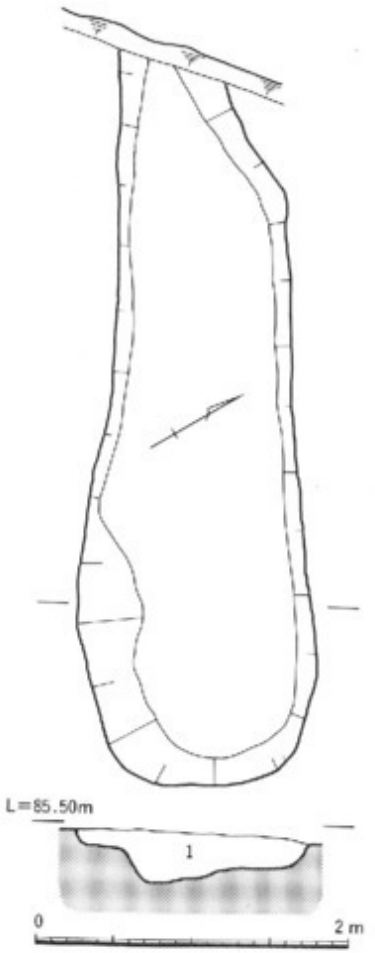
第184図　SA1019遺構実測図

本来は南北に長くつながっていたものと考えられ、すぐ南側のSD1007、第11調査区のSD1011はその一部であった可能性が高い。また、検出部分の北端でやや東側に曲がるのも、東西に延びていた可能性が考えられる。

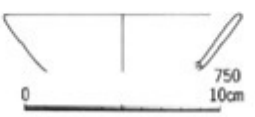
出土遺物（第185図）



1．褐色10YR4/4砂質土
2．にぶい黄褐色10YR5/4砂質土
3．暗褐色10YR3/3砂質土
4．にぶい黄褐色10YR5/3砂質土



1．褐色10YR4/4砂質土



第186図　SD1010遺構・出土遺物実測図

第185図　SD1006遺構・出土遺物実測図

検出部分の覆土からは、土師質の皿片2点、鍋片2点、こね鉢片1点、瓦器片3点、陶器片2点が出土している。748は土師質の皿である。底部はヘラ切りである。749は瓦質のこね鉢である。小片から径を起こしたので正確さにやや不安がある。口縁端部、やや肥厚し、端面は平坦でわずかに下方に拡張する。

溝（SD1010）（第186図）

第11調査区（AE・AF－19・20）で検出された北西－南東方向の溝である。北西側は調査区外に延び、検出部分の長さは4.58m、幅1.14mを測る。断面形は中央で一段深くなる形状かとみられる部分もあるが、明瞭ではなく、不整方形を呈しており、深さは34cm程度である。

覆土は単一層である。

出土遺物（第186図）

土師質土器片4点の他は、弥生土器片が混入しているだけである。750は土師質の杯である。他の土師質土器とは焼成が異なり、かなり良好で硬く締まっている。

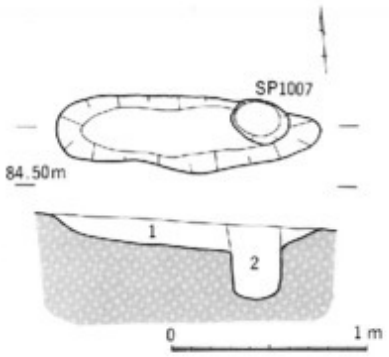
③ 土坑・土壙墓

土坑（SK1003）（第187図）

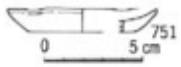
第1調査区（W－11）で検出された。細長い楕円形の土坑で長軸1.37m、短軸0.34m、深さは35cmを測る。主軸はほぼ東西方向である。柱穴SP1007が重なっている。

出土遺物（第187図）

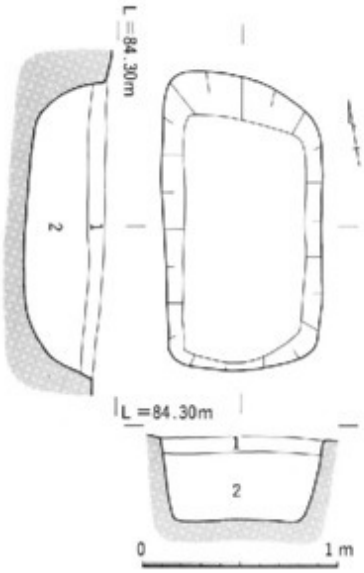
混入の弥生土器片が4点、土師質の小皿片が1点出土した（751）。底部は糸切りである。



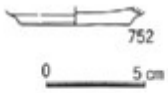
1．褐色10YR4/4粘性砂質土
2．にぶい黄褐色10YR4/3粘性砂質土（SP1007）



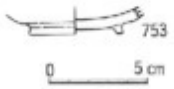
第187図　SK1003遺構・出土遺物実測図



1．褐色10YR4/4粘性砂質土
2．褐色10YR4/6砂質土



第188図　SK1031遺構・出土遺物実測図



第189図　SK1048出土遺物実測図

土壙墓（SK1031）（第188図）

第２調査区（Ｚ－19）で検出された。長辺1.57m、短辺0.8mのやや隅の丸い長方形をなしており、深さは44cmを測る。主軸はほぼ北を向き、遺構形状から、土壙墓であると考えられるが、副葬品とみなされる遺物はなく、土師質土器、瓦器等の破片が出土している。

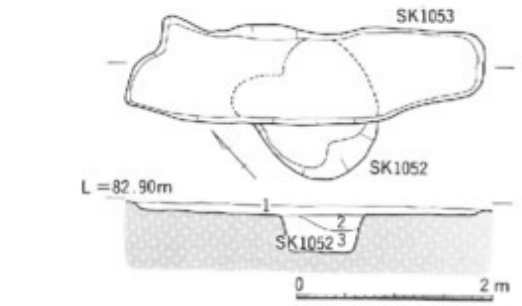
出土遺物（第188図）

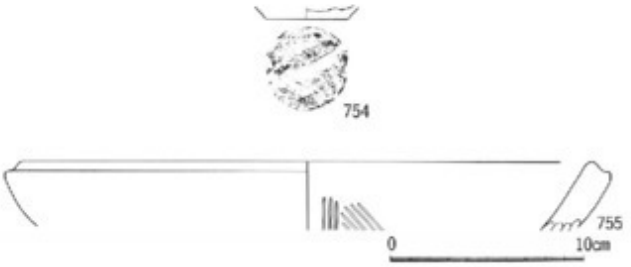
土師質土器片25点、瓦器片２点等が出土した。752は土師質の小皿である。底面は静止糸切りとみられ、内面等はロクロナデによる。

土壙墓（SK1048）（第189図）

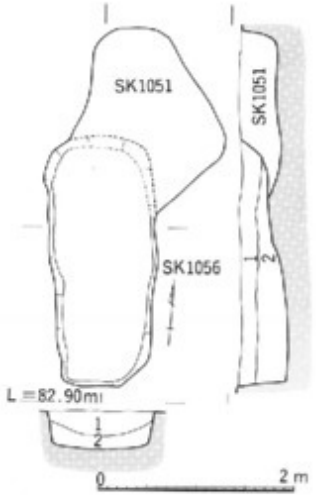
第４調査区（Ｋ－12）のSR2001上層に位置する。流路掘削中、長方形の土坑底面のみ検出した。平面規模は長辺1.65m、短辺1.10mである。長軸はほぼ北を向く。形状・主軸から土壙墓であった可能性が高い。753は遺構検出面の上位から出土した瓦器椀である。高台は断面逆台形状を呈し、内面見込みのミガキは乱雑な格子状をなす。

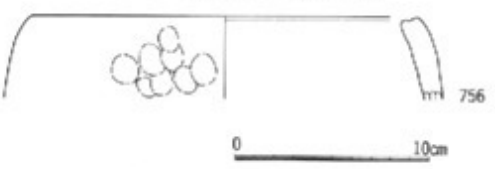
土坑（SK1053）（第190図）





第190図　SK1053遺構・出土遺物実測図





第191図　SK1056遺構・出土遺物実測図

第８調査区（AA・AB－26・27）で検出された。長軸3.60m、短軸1.00mを測る不整な長方形状を呈す。遺構面は削平を受けている部分であり、検出時の深さは14cmである。位置関係から溝SD1005の一部であった可能性もある。中央部分で弥生時代の土坑SK1052に重なって構築されている。

出土遺物（第190図）

遺物は土師質土器片４点、土師質の擂鉢１点が出土している。754は土師質の小皿である。底面は、静止糸切り痕が明瞭に残っている。755は土師質の擂鉢である。口縁端部は凹面に仕上げ、内面は５条の櫛描条線が認められる。

土壙墓（SK1056）（第191図）

第８調査区（Z－25・26）で検出された。弥生時代のSK1056を切って構築されている。長軸2.65m、短軸1.12m、削平を受けている地区であるが、深さは45cmを測る。隅丸方形で、主軸はほぼ北向きである。土壙墓である可能性が高い。

出土遺物（第191図）

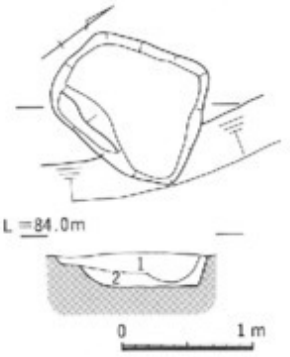
土師質の鍋が出土している（756）。体部・口縁部は内彎し、口縁端部は凹面に仕上げる。

土坑（SK1093）（第192図）

第７調査区（X－19）で検出された。長軸1.33m、短軸1.12mの平面形不整方形をなしており、深さは27cmを測る。断面形が階段状になる部分があり、土層観察によると再掘削された可能性がある。

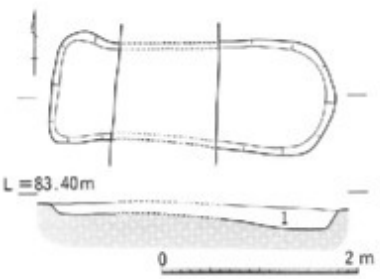
出土遺物（第192図）

土師質土器片６点、土師質の小皿１点が出土した。

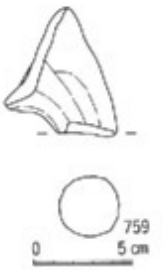


1．褐色10YR4/4砂質土
2．にぶい黄褐色10YR5/4砂質土

第192図　SK1093遺構・出土遺物実測図



1．褐色10YR4/4砂質土



第193図　SK1106遺構・出土遺物実測図

757は底径5.8cm、回転とみられる糸切り痕が観察できる。

土坑（SK1106）（第193図）

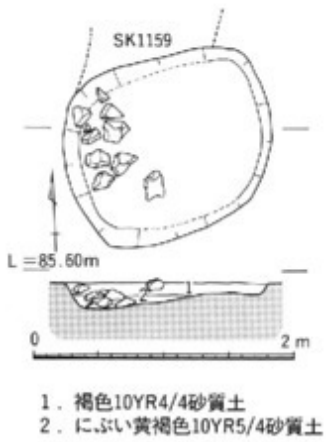
第7調査区（V－20）で検出された。規模は長軸2.92cm、短軸1.16cm、深さ26cmである。隅丸方形で、長軸はほぼ東西方向である。中央部をSD1006によって切られている。

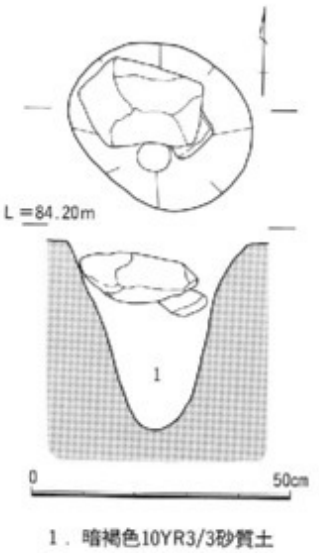
出土遺物（第193図）

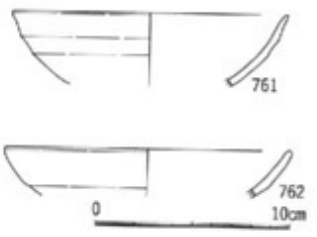
土師質土器片が10点、土師質の皿が2点、杯が3点、椀が1点、小皿、鍋、瓦器椀も出土している。758は瓦器椀の底部、759は土師質の脚部である。

土坑（SK1156）（第194図）

第11調査区（AE－19）で検出された隅丸方形状の土坑である。規模は長軸1.63m、短軸1.25m、深さは20cmを測る。SB1009に重なって構築されたSK1159にさらに重なる。土坑西端底に







第194図　SK1156遺構・出土遺物実測図　　第195図　SP1181遺構・出土遺物実測図

20cm大の砂岩礫がやや集中して出土している。青磁椀はこの礫の下から出土した。

出土遺物（第194図）

760は青磁椀の底部である。高台内を除いてオリーブ灰色の釉が施され、釉厚は0.4mm程度である。

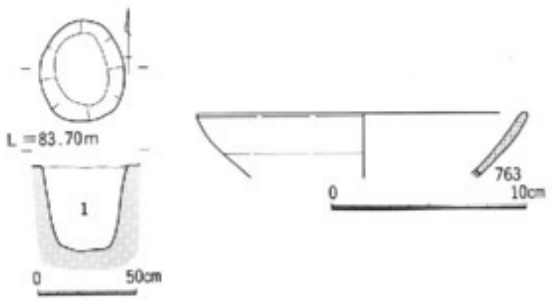
④ 柱穴・小穴

柱穴（SP1181）（第195図）

第2調査区（Y－19）で、SB1001に重なって検出された。規模は復元で長軸36cm、短軸30cmのやや楕円形を呈し、深さは36cmを測る。柱穴を塞ぐように扁平な砂岩礫が覆っている。

出土遺物（第195図）

瓦器片が11点出土している。761・762は瓦器椀である。いずれも内彎して立ち上がり、口縁部外面はヨコナデ、内面のミガキは認められない。



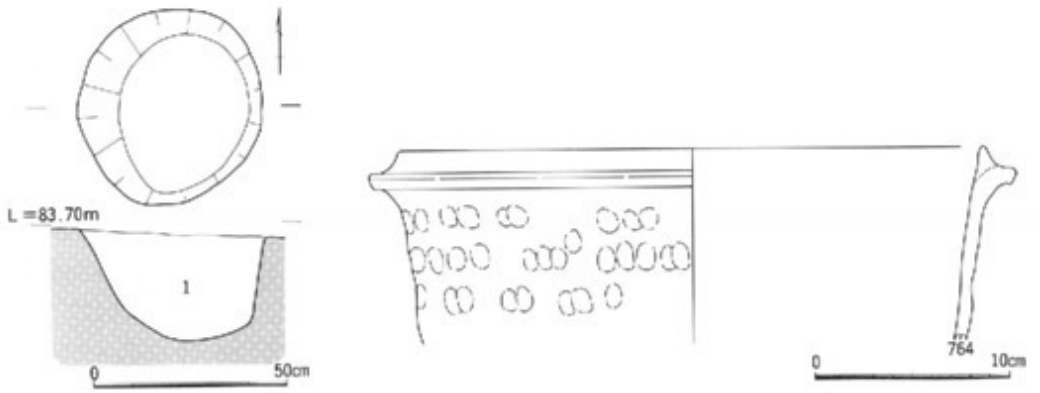
1．褐色10YR4/4砂質土

第196図　SP1342遺構・出土遺物実測図

柱穴（SP1342）（第196図）

第7調査区（Z－23）で検出された。隅丸方形状を呈する土坑SK1065に重なって検出された。

長軸52cm、短軸46cmの楕円形を呈し、



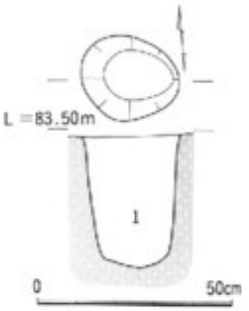
1．褐色10YR4/4砂質土

第197図　SP1485遺構・出土遺物実測図

深さ49cmである。

出土遺物（第196図）

瓦器片が2点出土している。763は瓦器椀である。内彎気味に立ち上がっている。



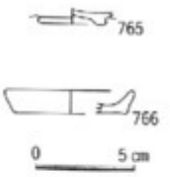
1．褐色10YR4/4砂質土

柱穴（SP1485）（第197図）

第7調査区（W－19）で検出された長軸52cm、短軸48cm、深さ26cmの楕円形の柱穴である。

出土遺物（第197図）

土師質土器片が4点出土している。764は土師質の羽釜である。体部は直線的で、端部を折り曲げ、方角状の鍔とし、口縁部を貼付け、尖り気味におさめる。



第198図　SP1494遺構・出土遺物実測図

柱穴（SP1494）（第198図）

第7調査区（W－19）で検出された、長軸25cm、短軸22cmの楕円形の柱穴で、深さは35cmを測る。

出土遺物（第198図）

土師質土器片2点、瓦器片1点が出土している。765は瓦器椀の底部。高台は断面方形である。766は土師質の小皿、口縁がわずかに内彎し、底面は糸切りの痕跡が認められる。

その他の柱穴出土の遺物（第199図）

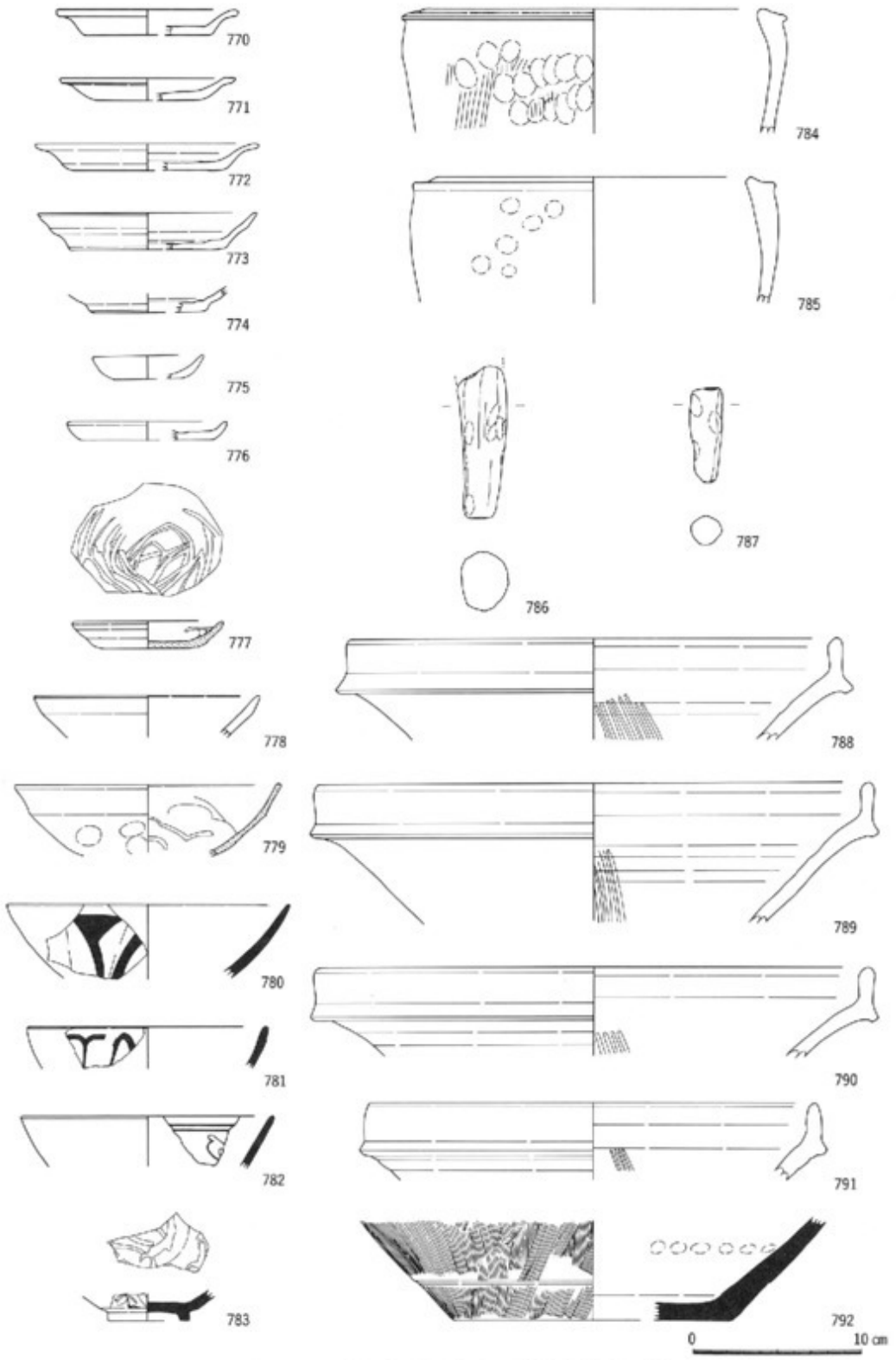
767は、第2調査区（Y－16）で検出された径27cmの円形の柱穴（SP1055）で出土した土師質の椀である。

第199図　柱穴・小穴出土遺物実測図

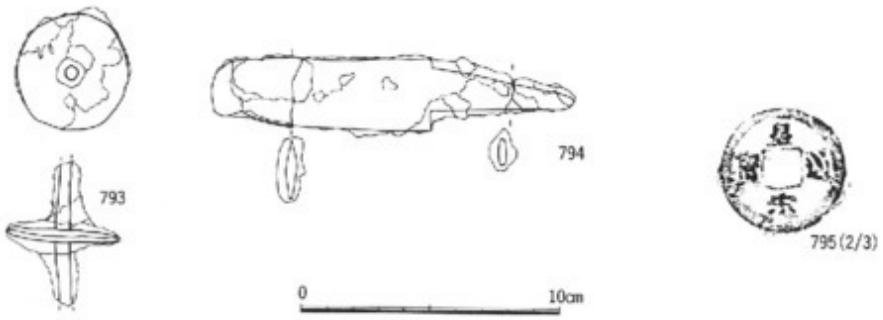
768は第2調査区（Z－17）で検出された楕円形の柱穴（SP1113）で出土した土師質の椀である。体部・口縁部とも直線的に立ち上がる。

769は第7調査区（U－20）で検出された柱穴（SP1535）から出土した土師質土器の小皿である。底面はヘラ切りとみられる。

⑤　遺構に伴わない遺物（第200・201図）



第200図　遺物包含層等出土遺物実測図　(1)



第201図　遺物包含層等出土遺物実測図　(2)

遺物包含層から、中世の遺物は総数654点出土している。第２・３・７調査区を中心にその周辺部で多く出土している。

770～772は土師質の皿で、口縁部は外彎して立ち上がる。773の土師質の皿は外彎して立ち上がり、口縁部は直線的にのびる。774も同様の形状を持つと考えられる。775･776は土師質の小皿である。内彎して口縁部は短く立ち上がる。700～776の底面は776が静止糸切りの他は、いずれも回転ヘラ切りである。

777は瓦器の皿である。円弧状のミガキが観察できる。

778は土師質の椀、779は瓦器椀である。

780～782は龍泉窯系の青磁椀である。780･781は、鏑蓮弁の陰刻が、782は内面に飛雲文が施される。783は唐津焼、内面の白色釉の文様のモチーフは不明。

784・785は土師質の鍋である。口縁部肥厚し端面は凹面をなす。786・787は脚部である。

788～791は備前焼の擂鉢である。口縁部は大きく拡張させる。792は須恵質の甕の底部である。

793は鉄製の紡錘車。794は両刃の鉄製品である。先端を欠損し、茎の主軸が歪んでいるが、槍の可能性が考えられる。

795は銅銭、「皇宋通寶」。

3　まとめ

(1)　弥生土器の様相

本遺跡出土の弥生土器はほとんどが中期に属し、後期の土器がわずかに混じる（550）。出土状況は集石土壙中心で、一括資料と言い難いものが含まれるが、短期間使用の遺構と考えられ、吉野川中流域の凹線文出現前後の傾向を示す良好な資料と考えられる。このことについては、すでに柴田昌児氏の予察[1]があり、それを土台として若干の考察を加えてみたい。

それぞれの遺構出土の土器については、本文中で概観し、個々については遺物観察表に詳しい。ここでは器種別にまとめ、そのうえで各遺構での組み合わせを再点検し、周辺各地との併行関係について考えたい。

①　中期弥生土器の形態

形態については、各器種を特徴によって細分し、壺（A～H）、甕（A～C）、鉢（A～C）、高杯（A～D）、大型高杯、蓋とする。さらに、中期後半の特徴である凹線文の有無、その他の装飾を記号化して傾向を探る。

1．凹線文が認められないもの　　2．凹線文が施されたもの

a．口縁端部に刻目文などが施される
b．口縁部内面に斜格子文、波状文などが施されるもの
c．頸部下端に断面三角形突帯をつける
d．頸部下端に圧痕文突帯を巡らせる
e．頸部に圧痕文または櫛描文が施される
f．体部に櫛描文が施される
g．体部に圧痕文が施される

これらの記号については、本項と観察表にのみ用いている。

壺A　頸部が直立し、口縁部が大きく外反する朝顔状を呈するものが最も多い。紫雲出山遺跡[2]、矢ノ塚遺跡[3]、百間川今谷遺跡[4]の壺Aに相当する。口縁部の外反の程度は斜め上方に開くもの（271・272など）と、水平に開くもの（276など）があり、例外的に斜め下方にまで曲がるもの（312）がある。形態上の細別も可能であろうが截然と分離できない中間的な

ものが多い。全体の形状がわかる個体は多くはないが、体部は細長い楕円形状（272など）と体部中央の張る形状（276など）がある。底部はほとんどが平底ないしはわずかな上げ底である。

多くは無装飾で、口縁部の内外面は幅広くヨコナデが認められ、口縁端部は平坦に収める。一部にヨコナデの結果、上下にわずかに拡張されるものもある。例外的に口縁端部を下方に拡張する240・268や、紐穴を持つ234がある。装飾は口縁端部の刻目が多く、それ単独のもの（275など）、頸部下端の断面三角形突帯や、ヘラや指頭による圧痕文突帯との組み合わせによるもの（305・354）、更に体部上半の櫛描文や刺突文、圧痕文と組み合わされるものもある（276など）。頸部には他に、連続的なヘラによる圧痕文（356・357）や、櫛描波状文・簾状文など（533など）もみられる。488や510は頸部と体部の境が曖昧なこともあるが、頸部下半～体部上半にかけて連続的に櫛描文等が施される。他の広口壺形土器は、突帯や刺突文など頸部と体部の境がはっきりするような装飾を持つものが多く、やや異なる特徴をもつ。

口縁部内面に、ヘラまたは2～3条の櫛による斜格子文や、櫛描波状文が施されるもの（312・365）がある。この場合口縁部の外反の程度は水平か、斜め下まで彎曲する。

口縁端部に凹線文を持つ広口壺形土器（72・309・370など）は、同時に口縁部内面に斜格子文が施される。形態的にも凹線文を持たない広口壺とほとんど変わらない。たとえば凹線文のある309と凹線文のない365は頸部の突帯が異なるだけで、ほぼ相似形である。口縁端部の拡張も顕著ではなく、やや肥厚する程度である。

遺物包含層出土の639は例外で、端部を上下に大きく拡張し、凹線もしっかりしている。頸部突帯が変化したとされる凹線文B種[5]がみられるのはSK1016出土の385だけである。

壺A'　朝顔状に開く口縁部を持つが、頸部と体部の境が曖昧で判然としない形態が少量ある（255・314・557など）。器面の損傷が激しいが、口縁部のヨコナデ技法はみられない。

壺B　開き気味に立ち上がるやや長い頸部から外反する口縁部を持つ（68・256・568など）。佐原編年の畿内第Ⅲ様式、壺形土器A[6]に似る。しかし、紫雲出山・矢ノ塚・百間川今谷遺跡の各遺跡では、これに相当する形態がない。頸部下端に圧痕文や断面三角形突帯をつける。この形態に凹線文を施した土器は出土していない。

壺C　直立する頸部と外反する口縁部を持つが、頸部が短いものがある（260・267・372・447など）。また、同形態で、口縁端部に凹線文が施される373、374がある。紫雲出山遺跡の壺E、矢ノ塚遺跡の壺Cにあたる。百間川今谷遺跡には該当する形態はない。372～374は頸部に圧痕文突帯を巡らしている。

壺D　開き気味に立ち上がり、わずかに外反する口縁部を持ち、口径20cmを越える大型の壺。百間川今谷遺跡の壺Dに相当するが、紫雲出山遺跡では壺Aに含まれ、矢ノ塚遺跡では壺Bの一部にあたる。本遺跡ではSK1014の317・318、SK1039の452などがあるが、いずれも凹線

文はない。しかし口縁端部はやや肥厚気味の方角状におさめ、ヨコナデ技法がやや幅広くみられる。

壺E　直線的で、わずかに外反する口頸部を持つ。紫雲出山遺跡の壺Cにあたるものだが、口縁を曖昧に、または方角状に収めるやや薄手の315・379（E）、口縁をやや分厚い方角状に収める313・380・450（E'）があるが、後者は矢ノ塚遺跡包含層出土の壺Eと酷似する。他に口頸部の短い74・216・375（E''）もあり、百間川今谷遺跡の壺Gと似る。凹線文を持つのは2例（381・382）である。

壺F　73・277・316・453・495は直線的に、あるいはやや内彎気味に外方に立ち上がる、漏斗状の口頸部を持ち、口縁下に断面三角形の突帯を巡らす。突帯には刻目を施す場合がある。体部は中央部の最大径部分が張る形状である。紫雲出山遺跡壺B、矢ノ塚壺Eにあたる。百間川今谷遺跡では壺Bがあるが、それよりも備中・備後地方により類似する例がある(7)。凹線文のない5例のうち3例は角閃石粒を含む明かな搬入土器である。また、凹線文が施される場合、376のように、口縁下の突帯が凹線文化したものと、突帯はそのままで、口縁端部に凹線文が施される377・378の場合がある。

壺G　482は筒状の長い頸部を持ち、口縁部はわずかに外反する。577もこの器形の可能性があるが、いずれにしても紫雲出山・矢ノ塚両遺跡で各1例みられるだけで類例は少ない。

壺H　489は倒卵形の体部を持ち、短い口縁部が直立する。類例は見当たらない。

281の把手も、壺形土器の縦につくこと、中空であることなど、同様の例は見あたらない。

なお、本遺跡では紫雲出山遺跡壺Dや、矢ノ塚遺跡壺Hにあたるような無頸壺形土器は出土していない。百間川今谷遺跡にみられる広口壺形土器の口縁部内面に突帯を付けたものもない。また、紫雲出山遺跡壺F、百間川今谷遺跡壺Eに相当する形態のものは不明である。

甕A　甕形土器は、ほとんどの個体が「く」の字状に屈曲する口縁部をもつ。口縁端部の形状で細分すると、拡張せず平坦に収める287・288など(イ)、上方に拡張する24・401など(ロ)、肥厚させて平坦に収める22・289・332など(ハ)、肥厚せず曖昧に収める286・337など(ニ)がある。上方に拡張された形状のものに搬入品（80・401など）が多い。口縁部内外面のヨコナデは端部肥厚または上方拡張の形態にはすべて施されており、方角状や曖昧な収め方のものではヨコナデは半数程度である。

また、口縁端部が平坦な258・485、肥厚した336の端面に刻目が施される。463・500は屈曲部に圧痕文突帯を巡らし、463は端部に刻目がある。

凹線文の施される甕形土器は、口縁端部を上方に拡張（238・404・406など）、または肥厚させる（405）。409は屈曲部に圧痕文突帯を巡らす。

体部の形状は概ねイチジク状を呈す。調整は、内外面ともにナデによるものが最も多く、

外面上半タテハケ、下半タテヘラミガキ、内面ナデが次に多い。内面ハケのものも散見される。内面下半ヘラケズリ技法はSK1016出土の411にみられるだけである。

甕B　口縁部の屈曲の度合いが弱いものがある（23・250・598など）。さらに266・483は端面に刻目を持つ。これらの口縁端部は拡張や肥厚せず、方角状にまたは丸く収める。

甕C　338・410・599は口縁部の屈曲の度合いが弱い、器高15cm以下の小型の甕である。

鉢A　25～27・290・501・502は半球形の、ボウル状の体部に屈曲して外反する口縁部を持つ。底部は平底と短い脚台を持つものがある。紫雲出山遺跡には該当する形態はなく、矢ノ塚遺跡の鉢1にあたる。290は百間川兼基遺跡土壙10出土例[8]と酷似している。

鉢B　28・643は半球形を呈すボウル状の体部で、口縁端部を内外に拡張する。28は無文だが、643は口縁端部上面に櫛描斜格子文を施す。また凹線文を持つ161・420は半球形で口縁部がより内彎する。口縁端部は内外に拡張し口縁部下に凹線文が施される。紫雲出山遺跡の大型鉢3と同様の形態である。

鉢C　419は体部が倒卵形を呈し、口縁は内彎したまま方角状に収める。瘤状の一対の突起がつく。瘤状突起を持つ鉢形土器は、岡山県門田遺跡T-6SD03出土例[9]、大阪府美園遺跡BSD201出土例[10]などがあるが、いずれも前期または中期初頭と捉えられており、形態的にも半球形の体部で、本遺跡例とは異なるものである。

鉢D　605はジョッキ形を呈する鉢形土器とみられる。口縁部及び底部に2孔一対の穿孔がみられる場合が多く、吉備地方で前期末に現れ、中期前葉に普及し、中期中葉前半までのこるとされる[11]。

他に内面調整の丁寧なものについては鉢形土器の可能性が高いと考えられる。突出する底部（83）、高台状の上げ底（212・604）、平底（192・503）などがみられる。

160は、低い脚台で、貫通しない三角形の透かしがある。紫雲出山遺跡では透かしのはいる低い脚台は無頸壺のものと考えられているが、本遺跡では無頸壺は出土しておらず、鉢形土器の脚台と考えられる。

高杯形土器は非常に少なく、はっきりとわかるのはわずか10個体、そのうち7個体がSK1016に集中する。

高杯A　291は半球形で屈曲して外反する口縁部をもつ鉢形土器と同様の杯部。脚台部を欠く。

高杯B　424・425は同様に半球形で屈曲して外反する口縁部を持つが、屈曲部内面に断面三角形の突帯を持つ。紫雲出山遺跡高杯E1、矢ノ塚遺跡高杯D1と同じ形態をしている。424の脚端は肥厚せず、やや曖昧に収める。

高杯C　421・422は半球形で、ボウル状の深い椀形の杯部を持つ。421の脚端はやや肥厚し、平坦に収める。

高杯D　423・426は皿状で口縁部が内彎し、ほぼ直立する。口縁端部は内外に拡張する。426は上端面に凹線文が施され、423もヨコナデの範囲は幅広い。ともに、紫雲出山、矢ノ塚両遺跡の高杯Aに相当する。

大型高杯　427は大型高杯である。皿状の杯部、口縁端部は内外に拡張し、上端面と口縁下に凹線が施され、口径が30cmを越える。紫雲出山遺跡大型鉢2と同形態、矢ノ塚遺跡高杯A4、百間川今谷遺跡の大型高杯にあたる。

30は中実の短い脚柱部、同じ形状の606は2条の刻目を施した突帯を持つ。いずれも他の脚台部と異なり、円盤充填と確認できない。脚上端部に突帯を持つ例は、紫雲出山・矢ノ塚両遺跡で2例ずつみられる。

高杯形土器の中では、紫雲出山遺跡高杯B、C、D、Fにあたるものは出土していない。

蓋　円板状で、2孔一対とみられる孔がある、254の1例だけである。

なお、吉備・畿内ともに第III様式に登場する水差形土器を欠き、器台も出土していない。図化した個体の内、原則として口縁部数を基にした個体数は236。各器種別の比率は、壺形土器136（57.7%）、甕形土器78（33.1%）鉢形土器12（5.0%）、高杯形土器10（4.2%）である。高位台地の集落のあり様の一端を示す。

以上のように器種別に検討してみると、西讃・吉備地方にみられる中期弥生土器と形態上、文様の上でも類縁関係を示すものが多く、極一部で、広口長頸壺形土器のように畿内的な器形を持つことが確認された。また、西讃地方の紫雲出、矢ノ塚、吉備地方にはない簾状文を施す土器（68・202）も散見され、これも畿内的要素の受け入れといえよう。

②　搬入土器の問題

また、本遺跡出土土器の胎土中に、顕著に角閃石粒や長石粒を観察できるものがある。先に挙げた236個体の内20個体（8.5%）がそれである。吉野川流域においては、角閃石粒が混入することはなく、讃岐地域からの搬入品と考えられる。ただ、讃岐においても、そのような混和材を使用した土器ばかりではなく、角閃石が混じる土器群については高松平野西部・旧香東川流域にその中心があろうといわれている[12]。そこは、本遺跡の立地する長峰台地から、清水峠を越えて国分台・金山へ至る最短距離の道筋にあたる。

搬入土器が出土した遺構は、SB1001・1004・1011・SK1008・1016・1039で、住居跡と集石土壙である。器種別では壺形土器が最も多く、前述したように、壺Fに占める比率が大きい。壺Aでは、口縁内面に斜格子文を持つ72・365・367・369や体部中央に貝殻腹縁による圧痕文

が施された355がある。壺Cもある(374)。甕形土器では、口縁端部を肥厚させるか、上方に拡張するものに限られる。甕A2はSB1011出土の238だけである。鉢形土器も包含層出土の643をみるだけである。

讃岐地域の弥生時代中期の資料は西讃地域では比較的知られているが、本遺跡と直接関わりのあったと考えられる高松平野の様子はいまだ明かではない。しかし、高松平野の産とみられる搬入品が本遺跡内で特異な存在ではなく、彼の地との緊密な交流が想定できる。

③ 遺構内での組み合わせ

本遺跡では住居内での床面遺物に恵まれない。冒頭に挙げた難点はあるものの、資料的には完形に近い個体の出土量が多い集石遺構を中心に検討したい。

時期区分の基準となる属性は、凹線文の有無であろう。凹線文を有する土器の出土する遺構は、SB1004、SB1005、SB1011、SK1014、SK1016の5遺構である。SB1004は壺A2bが1点（搬入品)、SB1005は鉢B2が1点、SB1011は甕A2ロが1点（搬入品)、SK1014は壺A2 bdが2点みられ、SK1016は各器種に凹線文が施される。

SK1016の壺形土器は、壺A・C・E・Fで構成される。凹線文を有するものと、ないものの両方が出土し、その形態はほぼ同じで凹線文の有無だけが差異となっている。甕形土器にも同じことがいえる。これは土壙使用期間に問題ありとはいえ、凹線文出現直後の様相と理解できる。高杯形土器については口縁・脚端ともに拡張しない形状から、双方ともに拡張し、凹線文を施した変化過程を同時に含む。

SK1014は、凹線文を施す壺Aが2個体あるものの、他は壺A・D・E・E'・F、甕A・Cで、甕は口縁部を肥厚させたものが最も多い。凹線文のないSK1008やSK1039により近いと捉えられる。

SK1008は壺Aが中心で、口縁端部刻目と、頸部下端の突帯が装飾として混じる。壺Fは搬入品である。甕Aのほか、鉢Aと高杯Aが1点ずつ混じる。SK1039は壺Aに刻目等の装飾がSK1008より目立つ。搬入の壺Fの他、壺E'・B・Dがある。甕形土器はほぼAであるが、1点だけ頸部突帯の搬入品が混じる。他の器種は出土していない。

さらに、一括性の高いSA2001の資料では、口縁端部下方拡張の壺Aや、壺B・Cがあり、甕はAの他に、口縁部の屈曲が十分でないBや、端部に刻目を持つものが含まれている。凹線文はなく、広口壺の頸部下端の突帯や、口縁部上面に装飾を持った土器もみられない。

壺Aの口縁内面に櫛描文や斜格子文を施すものはSK1016・1014・SB1004だけでしかみられない。壺頸部下端の突帯はSB1010・1011、SK1008・1014・1016・1039・1045でみられる。これらの文様と、凹線文の登場は壺形土器の口縁端部からとされる[13]ことに着目し、微視的な前後関係を考えると、SA2001→SK1008・1039→SK1014・SB1004→SK1016、ということ

になる。しかし、それぞれの遺構内の組み合わせが阿波中期弥生社会において普遍的である、とはまだ言い難く、何よりも一括性に問題があり、傾向性を重視して、巨視的な段階を考えると、各器種に凹線文が施されるSK1016以後と、SK1014以前の2段階を想定したい。そしてこれを1段階、2段階と仮称する。ただし、1段階については、SA2001にみられるような中に屈曲の十分でない甕形土器に刻目が施されているものや、頸部と体部の境が曖昧な壺形土器など古い要素と考えられるものを含んでいる。現段階では、慎重にならざるを得ないが、周辺地域の資料の増加のより様相がはっきりすれば、細分の可能性が十分考えられる。

次の通りである。

（1段階）

壺形土器は壺Aが主体で、壺B、壺C、壺D、壺E、壺F、壺Gが少量ある。文様的には口縁端部の刻目、頸部下端の断面三角形突帯または圧痕文突帯、頸部～体部上半の櫛描文、圧痕文などがあるが、無文のものが多い。極一部に凹線文A種が登場する。

甕形土器は「く」の字状に屈曲する甕Aが主体を占める。屈曲の度合いの弱い甕B、小型の甕Cが少量混じる。中に口縁端部に刻目を持つものがある。

鉢形土器は半球形で口縁部が屈曲外反する鉢Aと、屈曲せず内外に拡張する鉢Bがある。高杯形土器は非常に少なく、円盤充塡法が出現する。

（2段階）

壺形土器は壺Aが主体で、壺C、壺E、壺Fがある。いずれも凹線文が施されるものとそうでないものが共存する。凹線文B種の出現。口縁内面の斜格子文、頸部下端突帯は残り、櫛描文も一部残る。

甕形土器はほとんどが「く」の字に屈曲する甕A。凹線文の出現。内面ヘラケズリ技法の出現。

鉢形土器にも凹線文が施される。高杯形土器が増加し、凹線文を持つものもある。大型高杯の登場。

④ 桜ノ岡遺跡（1）出土土器の位置づけ

さて、これらの段階の位置づけであるが、中期の土器の編年作業の最も進んだ畿内では唐古編年を基にして発展された佐原編年[14]が長く影響力を持ち、畿内第Ⅲ様式は櫛描文の盛行期（古段階）から凹線文を採用しはじめた新段階、さらに凹線文の盛行期・第Ⅳ様式へ推移すると理解されてきた。しかし新資料の増加は必ずしもそれを補強するものばかりではなく、井藤編年[15]のように第Ⅲ－Ⅳ様式とまとめた上で細分するなど「第三・四様式は近年、多くの研究者が唐古編年を白紙に戻した上で再検討を試み」[16]ている。その結果、最新の編

年作業では凹線文の登場を画期とし、旧来の第Ⅲ様式新段階以降を第Ⅳ様式として捉え、その細分を試みているもの、旧来のものを尊重した形のものが、地域性を絡めて混在している。また従来の古段階の細分も行われている[17]。

一方、四国では紫雲出山Ⅰ～Ⅲ式の設定[18]があり、吉備地方でも精力的な編年が行われ、中期を含めたものでは鎌木編年[19]、雄町編年[20]、高橋編年[21]などがあり、それぞれの併行関係がおさえられている。百間川今谷遺跡では、百間川中期Ⅱ新相の土器群についてまとめられている[22]。第Ⅲ様式は雄町編年、高橋編年のように、凹線文なし、壺に凹線文、各器種に凹線文と、3小期に細分されるのを基本とするが、一括資料の不足から、最新の正岡編年[23]では2小期にまとめられている。

さて、吉野川流域であるが、名東Ⅰ～Ⅲ式の設定[24]、鮎喰川流域の検討[25]が畿内の佐原編年に準じて行われてきた。しかし当時は採集資料が多く限界があり、近年の発掘調査によって資料自体は増加しているものの、詳細な検討には至っていない。名東遺跡方形周溝墓、溝資料等[26]が下流域の様相を示すが、中流域とはやや様相が違い、畿内的要素が多いように思われる。他に鳴門市光勝院寺内遺跡[27]で中期後半について、凹線文盛行期の詳細な検討が行われている。これも、全体として中部瀬戸内的様相と結論づけられているが、桜ノ岡遺跡（Ⅰ）と比較すれば、より多くの属性で畿内・播磨との類縁関係が指摘されている。

本遺跡の1段階は紫雲出山Ⅰ式、吉備では高橋編年Ⅳ－ａ・ｂ期、正岡編年Ⅲ－1様式に併行するものとみて大過なかろう。畿内では凹線文出現前夜の第Ⅲ様式古段階併行と考えられる。県内では三好町七取遺跡住居跡出土土器[28]、名東遺跡調査地Ⅸ区SD01出土土器[29]が併行期と考えられる。

凹線文が各器種に施されるようになった2段階は紫雲出山Ⅱ式、吉備では高橋編年Ⅳ－ｃ期、正岡編年Ⅲ－2様式、特に百間川今谷遺跡の中期Ⅱ新相に併行すると考えられる。畿内との対応では旧来の第Ⅲ様式新段階併行とみられる。県内では光勝院寺内遺跡1号住居跡床面遺物と近いが、地域差を考慮してもこれに先行する段階と考えられる。

(2) 弥生時代の集落構成

今回の調査では11軒、建て替えの住居を別に数えると13軒の竪穴住居跡と2棟の掘立柱建物跡が検出された。ただ、住居跡の集中している段丘面東半の第2・7・11・9・8調査区のうち、第11調査区以外は調査区の約4割が削平を受けており（第6図参照）、削平部分に住居跡が存在した可能性は十分考えられる。

住居群は、大きく2期にわけられる。すなわち、SB1001の当初の住居（Ａとする）、SB1001の建て替え後の住居（Ｂとする）SB1002、SB1004の当初の住居（Ａとする）、SB1004の建て

替え後の住居(B)とするSB1006、SB1008、SB1009、SB1010とSB1003、SA2001が1段階、SB1005、SB1011が2段階で、SB1007とSA2002は出土遺物がほとんどなく、時期の決定は困難である。

1・2段階を通じて、住居の平面プランは楕円ないし不整円形を呈している。

① 1段階の住居跡について

SB1001・SB1004は建て替えが行われて、なお1段階で廃絶されたものである。SB1003廃絶後のほぼ同じ位置にSA2001が構築され、さらに1段階のうちに廃絶されている。

主柱数は、6本が4軒、5本が2軒、4本が2軒と、ばらつきがある。主柱数の規則性は乏しい。周壁部分では、溝を持つのが3軒、小柱穴が並ぶのが2軒、何も検出されなかったのが2軒である。周壁溝を持つ住居は6本主柱であるが、周壁と主柱数の構造の関連は他に認められない。主柱穴の配置から、棟方向を推定すると、SB1001ABはそれぞれN80°W、N75°E、SB1010がN80°Wで、ほぼ東西方向、SB1002、SB1004B、SB1006が、N20°W、SB1004AがN5°E、SB1009がN20°Eと、南北方向に近い。SB1008はN40°Wである。

特徴的なのは、1段階の住居の多くに集石遺構が重なることである。SB1001Aは同じ位置に建て替えられているので、除外すると、SB1001Bは覆土中に、SB1006は覆土中と、切りあってSK1178が、SB1008には集石土坑SK1061が重なり、SB1010は覆土中と集石土坑SK1168が近接する。SB1009は廃棄後構築されたSK1159が集石土坑と考えることもできる要素を持っている。SA2001は集石遺構そのものはないが、柱穴に柱穴抜き取り後の集中的な土器投棄がみられる。

② 2段階の住居跡について

2段階の住居跡は確実なものは2軒であるが、調査区内ではやや南東よりに偏在している。SB1011は半分が調査区外、SB1005は全体の形状が不明である。柱穴数、周壁溝、集石遺構などのことも傾向性をつかむにはいたらない。

集石遺構もSK1016が確認できるだけで、本遺跡の衰退期と考えられる。

③ 掘立柱建物跡について

独立棟持柱を持つ掘立柱建物跡SA2001は、住居群の中央やや西よりで、SB1001・1002・1008・1004に三方を囲まれるように位置する。廃絶後の主柱穴に土器を詰め込んでいる点でも、特異な建物であると認識できる。このような独立棟持柱をもつ構造の建物の、弥生時代に属する例は次のとおりである。

王子遺跡[30]　　鹿児島　弥生中期末～後期初　2×2間、3×3間、3×4間2棟

前畑遺跡[31]	鹿児島	弥生中期末	3×4間
上野原遺跡[32]	鹿児島	弥生中期末	3×3間
立野遺跡[33]	佐賀	弥生中期中葉（III期）	3×4間3棟、1×1間5棟
大山池遺跡[34]	鳥取	弥生中期	1×3間
西長峰遺跡[35]	徳島	弥生中期末～後期初	1×4間

他に近江地方に中期後半以降の例がある[36]。立野遺跡を除いて、いずれも弥生時代中期後半以降である。先行する例は、縄文時代後晩期の北陸地方にみられる[37]。しかし、地域的時間的隔たりとも現在は埋まらない。

宮本長二郎氏は、銅鐸などにも描かれる独立棟持柱を持つ建物が祭式儀礼に関わる可能性が高く、神殿につながる可能性を指摘している[38]。

柱穴に土器を投棄するのは、中期後半の美作地方・津山市押入西遺跡[39]で2例みられる。1間×4間の建物で、柱穴上端径50～60cm、深さ50～95cm、北東隅の柱穴を除き、柱の抜きとり跡が確認され、多量の土器が投棄されていた。しかも、各柱穴の出土土器は接合するものがある。もう1例も1間×1間で同じ状況である。SA2001と同様、廃絶の際の祭祀として、一ヵ所で土器を破砕する行為を含む祭祀の後、各柱穴に分納したものと考えられる。

またSA2001に先行するSB1003は4本主柱で炉がない。住居に用いられたものではなく、構造は異なるが、SA2001と同様の意義を付与された建物の可能性が考えられる。ただ、SA2001が廃絶されたのは1段階の中でも出土土器の様相は古相を示すと考えられる。SA2001が集落の中で特殊な役割をはたしていたのであれば、その廃絶以後、SB1003構築以来使用してきた場所を放棄した理由が疑問として残る。また、同じ長峰台地上の西長峰遺跡例はSA2001より後出するもので、規模もかなり大型である。本遺跡を形成した集団が移動した可能性を含め、相互の比較検討は今後の課題である。

(3) 弥生時代の集石遺構

本遺跡に特徴的な集石遺構は、土坑を伴う10基と、住居跡内の掘り形が認められない3基を併せて14基である。これらについては、石川直章氏の考察[10]がある。

集石遺構は本遺跡内でも、集石や土器の状況から、形態のバリエーションに富んでいるが、概ね、土器の破砕・砂岩礫の被覆・砥石を含む石器・黒色ないしは白色円礫・火の使用が、共通する点となっており、次のタイプに分けられる。

1類　住居内のもの（SB1001B、SB1006、SB1010）

住居内で掘り形を持たず、炉に重ねて、土器、石器、砂岩礫を集中させたものである。

2類　集石中心のもの（SK1061、SK1168、SK1178）

住居に重なり、あるいは近接し、集石が中心で他の遺物が少ないもの。SK1178は他の2基に比べて土器の分量が多い。SK1159もこれに属する可能性を有する。

3類　不整形土壙墓（SK1045、SD1001）

土坑は細長い不整形で、礫の被覆は一部に限られる。土器の分量は少なく、黒色チャート礫が目立つ存在である。

4類　小穴状土壙墓(SK1049)

柱穴状の小さな土坑で集石を伴う部分と、そうでない部分があり、詰め込まれている土器は隣のものと接合する。これはSA2001の主柱穴内に詰め込まれた土器が互いに接合することと共通する行為があったことを指摘できる。

5類　集団土器棺墓（SK1008）

隅丸方形状の土坑中央部に合わせ口で土器が対になって埋置された状態のもの。石器を伴い、砂岩礫を被覆する。

6類　大型土器棺墓（SK1014、SK1039）

大型土器棺を中心とし、周囲にも大量の土器を土坑内で破壊、石器を伴い、砂岩礫を被覆したもの。

7類　大型土壙墓（SK1016）

隅丸方形の土壙中央部に、土器と礫で被覆するが、棺にあたる土器は認められない。石器を伴い、大量の土器は土壙上で破砕されたものと、それ以外の場所で破砕されたものの両方が使用されている。

このうち、1～6類は1段階、7類が2段階である。また、住居に関係する1・2類と墓の可能性の強い3～7類に分けられる。

1類は、住居廃絶の際の祭祀に伴いものと捉えられる。炉に重ねて集石が行われることに意味があると考えられ、住居の中心である火処を塞ぐことで住居の持つ意義を終焉に導く儀礼であったと推測される。しかし遺跡内すべての住居跡に共通の行為ではない。要因としては、集落内の禁忌などの社会関係に基づくものと考えられる。

2類も住居内外に重なった集石行為で、住居に関する意味を持つものと考えられるが、SK1061、SK1178は住居埋没後のものである。廃絶後、時間をおいてなお必要であった2次的

な儀礼行為として捉えておきたい。そうすればSB1006・SB1010において1類を持ち、かつ、2類も持つこと、また住居と集石土坑の位置がずれることも理解できる。ただ、この考え方は墓域と住居域を固定的にみているため、椎ヶ丸～芝生遺跡集石土壙墓例[41]と比較すると墓の可能性を排除することはできない。

3～6類に関しては、自然科学的分析では墓説の補強はできなかったが、出土状況、集落内の位置関係から、被覆礫堆墓と推定できる。しかし、その形態の差が何に起因することなのかが問題である。まず、土器の量、土壙の規模・石器の有無などから、3・4類→5類→6類→7類という形態の変遷が考えられる。出土土器からは現段階では確定的な証左を与えることはできない。とすれば、やはり社会関係における差異が、形態差となったことも要因として考えておきたい。

また、5～7類にみられるように、土壙掘削直後の火を伴う行為があり、その後土器棺など方法は違うが、埋葬行為が行われている。儀礼の場と埋葬の場が一致したものである。石川氏は炭化材が構造材として用いられ、儀礼の場としての上屋構造の可能性を指摘する。さらに埋葬後の行為として礫の被覆がある。これは住居廃絶の際の火処を「塞ぐ」集石行為と共通する「思想」があったものと思われる。礫の被覆に前後して土器の破砕が行われる。土器の破砕はしばしば祭祀的行為と捉えられ、この場合も土器棺を除いて、そのように考えて大過なかろう。石器や黒色円礫は副葬遺物として捉えられるが、1類にもみられる黒色円礫には特別な意味があったものと推定できる。

このように、住居の廃絶と葬送に共通な集石を中心とする儀礼的行為は、弥生時代中期の本遺跡にあって、優れて特徴的な遺構として残る。しかし、埋葬施設上の礫の被覆は、本遺跡にとどまらず、弥生時代中期後半以降の吉野川流域の各所で確認されている[42]。特に中期末～後期初頭の土成町山麓部に多く、北原遺跡土壙11、集石土壙1～3[43]、北原大法寺遺跡SK1009[44]、前田遺跡SK1004、SK1060[45]、土成前田遺跡土坑3[46]椎ヶ丸～芝生遺跡集石土壙墓が報告されている。それぞれの集落内での位置については、前田遺跡例を除いて不明であるが、墓であると認識されている。北原遺跡集石土壙を除いて構築方法には共通点が多い。桜ノ岡遺跡（Ⅰ）7類と比べても、白（黒）色円礫を欠くこと、土器の分量が少ないこと以外は、火の使用・石器・土器・集石と概ね一致する。時期的に中期後半凹線文盛行期の1段階を欠くとはいえ集石遺構の系譜をひくものと理解しておきたい。北原遺跡集石土壙は集石の状態がやや異なり、庄内式併行期古段階の三好町・足代東原遺跡の積石墓群[47]、鳴門市・萩原墳墓群1号墓[48]などにつながる可能性を持っているが、「塞ぐ」集石が、墓標的な意味合いを加えた結果であるとも考えられる。やはり、凹線文盛行期の状況によって、分化し成立した可能性を踏まえてながら、被覆礫堆墓の系譜については、なお、詳細な検討が必要であろう。

なお、集石を伴わない土壙墓はSK1017が確認できるだけである。

(4) 弥生時代の石器

本遺跡で出土した弥生中期の石器は総数326点。未製品や欠損したものも含まれている。内訳は、サヌカイトの剥片を加工した石鏃107点（32.8%）、石錐10点（3%）、石槍6点（1.8%）、楔形石器22点(6.7%)、スクレイパー25点(7.7%)。結晶片岩を主に利用した剥片石器、打製石庖丁56点（17.2%）、石鏃5点（1.5%）、石鋸2点（0.6%）、打製石斧1点（0.3%）。主に緑色片岩・黒色片岩を加工した磨製石器、柱状片刃石斧20点（6.1%）、扁平片刃石斧6点（1.8%）、太型蛤刃石斧6点（1.8%）、小型扁平石斧7点（2.1%）、小型方柱状石斧3点（0.9%）、小型円柱状石斧3点（0.9%）。礫石器、叩石17点（5.2%）、砥石30点（9.2%）である。

用途別に、まとめてみると、狩猟具（石鏃・石槍）113点（34.7%）、収穫具（打製石庖丁・石鎌・打製石斧）62点（19.0%）、食品加工具（スクレイパー・叩石・砥石）72点（22.1%）、加工工具（石錐・楔形石器・石鋸・磨製石斧）79点（24.2%）である。叩石・砥石は加工工具としても利用されているのでその割合は高くなる。全体を概観すると、収穫具の割合が弥生集落としては低く、対して狩猟具の多さが目立つ。石鏃の中には、長さ3cm以上、重さ2g以上の、戦闘用[49]ともみなされる大型の鏃が28点含まれる。

本遺跡の石器を概観するとき、粗雑なつくりの石器が多いことに気づく。たとえば、打製石庖丁はサヌカイト製が2点あるだけで、他は石英片岩を素材としているが、両端に抉りを施したものは全56点のうち25点、刃部を形成しただけの粗い成形のものが26点ある。石鏃は有茎のものは7点、あとは平基・凹基を中心として凸基・円基が混じる無茎鏃であるが、調整は粗いものが目立つ。磨製石斧でも柱状石斧の抉り入りは退化して消え、代わりに、抉りの部分に粒状の敲打痕が集中する場合が多い。したがって、研磨も刃部を中心とし、基部・身部は研磨以前の敲打痕を残したり、自然面のままの例が多い。粗雑な石器が多いのは本遺跡の石器づくりの特徴か、あるいは廃絶される際に利器は移動させた結果とも考えられる。

石鏃　凹基無茎（36）—33, 34, 35, 36, 37, 70, 88, 89, 90, 92, 93, 94, 342, 520, 542, 607, 608, 609, 610, 611, 612, 647, 648, 649, 650, 651, 652, 654, 655, 656, 657, 658, 659, 660, 661, 662

平基無茎（16）—32, 86, 87, 91, 98, 215, 538, 543, 544, 653, 664, 665, 666, 668, 669, 670

平基無茎（船形）（4）—102, 169, 218, 583

円基無茎（23）—69, 95, 96, 97, 99, 216, 217, 632, 667, 671, 672, 673, 674, 675, 676, 677, 678,

679, 680, 681, 682, 683, 684
凸基無茎（1）—582
平基有茎（2）—103, 689
凸基有茎（5）—104, 105, 219, 613, 688
基部欠損（13）—38, 39, 40, 41, 100, 108, 110, 111, 112, 113, 685, 686, 687
未製品（7）——101, 106, 107, 109, 114, 168, 663
石槍（6）————43, 292, 615, 691, 692, 693
石錐　茎部あり（5）—116, 117, 118, 119, 690
錐部のみ（3）—42, 120, 121
棒状（2）———115, 614
楔形石器(22)————44, 45, 122, 123, 124, 125, 126, 127, 128, 129, 170, 545, 546, 547, 584, 616, 694, 695, 696, 697, 698, 699
スクレイパー(25)—130, 131, 132, 133, 134, 135, 197, 220, 221, 222, 293, 343, 475, 476, 506, 507, 521, 617, 618, 619, 633, 700, 701, 702, 702
打製石庖丁　抉りあり（25）—47, 48, 49, 138, 139, 140, 198, 223, 224, 226, 239, 294, 344, 429, 430, 431, 508, 548, 704, 705, 707, 715, 716, 718, 719
抉りなし（26）—46, 141, 142, 143, 193, 194, 225, 535, 620, 623, 706, 708, 709, 710, 711, 712, 713, 714, 720, 721, 722, 723, 724, 725, 726
不明（5）—144, 171, 227, 295, 525, 717
打製石鎌（5）　228, 296, 621, 622, 727
石鋸（2）—728, 729
磨製石斧　小型方柱状（3）—148, 270, 509
小型扁平（7）—54, 145, 146, 147, 532, 738, 739
小型円柱状（3）—55, 345, 737
柱状片刃（15）—50, 51, 53, 163, 433, 477, 516, 624, 625, 730, 731, 732, 733, 734, 735
柱状片刃未製品（5）　52, 434, 435, 436, 579
扁平片刃（6）—149, 150, 151, 229, 437, 736
太型蛤刃（3）—555, 580, 740
太型蛤刃未製品（3）—438, 526, 566
石鍬（1）————432
叩石　円礫利用（10）—57, 172, 195, 230, 549, 626, 627, 628, 629, 741
棒状礫利用（7）—56, 152, 153, 522, 539, 630
砥石（30）————58, 59, 60, 61, 62, 63, 64, 65, 66, 67, 154, 155, 156, 157, 158, 173, 231,

232, 233, 346, 347, 348, 349, 350, 439, 478, 490, 517, 523, 540

注

（1） 柴田昌児「桜ノ岡遺跡（I）出土弥生土器の位置付けに関する若干の予察」『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol. 1』1990 財団法人徳島県埋蔵文化財センター

（2） 小林行雄・佐原真『紫雲出』1964 詫間町文化財保護委員会

（3） 薦田耕作他『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第三冊矢ノ塚遺跡』1987 香川県教育委員会他

（4） 岡山県教育委員会『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51 百間川兼基遺跡1百間川今谷遺跡1』1982

（5） 前掲（2）、佐原氏の分類による。

（6） 佐原真「畿内地方」『弥生式土器集成本編2』1968

（7） 高畑知功「備中地域」伊藤実「備後地域」『弥生土器の様式と編年 山陰・山陽編一』1992

（8） 前掲（4）参照。

（9） 岡山県教育委員会「門田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』55 1983

（10） ㈱大阪文化財センター『美園』1985

（11） 正岡睦夫「備前地域」『弥生土器の様式と編年一山陰・山陽編一』1992

（12） 大久保徹也「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告VII 下川津遺跡』1990 ㈶香川県埋蔵文化財調査センター・香川県教育委員会

大久保氏は角閃石粒を多量に含むB類土器の製作地について言及し、旧香東川流域であろうと推定している。B類土器成立以前についても同様で、旧香東川流域の上天神遺跡は9割以上の土器に角閃石粒が含まれているという。

（13） 高橋護「入門講座・弥生土器一山陽1～4」『月刊考古学ジャーナル』173・175・179・181号 1980

（14） 前掲（6）

（15） 井藤暁子「入門講座・弥生土器 近畿1～5」『月刊考古学ジャーナル』195・202・205・207・219号 1981

（16） 森岡秀人「各地域の併行関係・解説」『弥生土器の様式と編年一近畿編II 一』1990 425P

（17） 寺沢薫・森岡秀人編『弥生土器の様式と編年一近畿編I・II一』1989・1990

この中で、河内・摂津・山城・近江は凹線文の登場を第IV様式の画期とし、和泉・大和・紀伊・丹波丹後は旧来の画期に準じている。さらに河内・大和・摂津・和泉・山城・近江で古段階の細分が行われている。

（18） 前掲（2）

（19） 鎌木義昌「山陽地方II」『弥生式土器集成 本編1』1964

(20) 岡山県教育委員会『埋蔵文化財発掘調査報告』1972

(21) 前掲（13）

(22) 前掲（4）

(23) 前掲（11）

(24) 岡本健児「入門講座・弥生土器一四国」1～5『月刊考古学ジャーナル』88～90・92・93号 1974

(25) 天羽利夫・岡山真知子「鮎喰川下流域における弥生文化の展開一序論一」『徳島県博物館紀要』5 1974

(26) 徳島市教育委員会調査の名東遺跡資料の中に当該期の土器が出土している。

徳島市教育委員会「徳島市埋蔵文化財発掘調査概要」1～3 1989・1992・1993

勝浦康守『名東遺跡発掘調査概要』1990 名東遺跡発掘調査委員会

(27) 菅原康夫他『光勝院寺内遺跡』1984 徳島県教育委員会

(28) 森浩一編「土取遺跡調査報告」1973 徳島県教育委員会・三好町教育委員会

(29) 勝浦康守「名東遺跡発掘調査概要一名東西部市下水路建設工事に伴う発掘調査」『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』3 1993 徳島市教育委員会

(30) 鹿児島県教育委員会『一般国道220号線鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書（I）王子遺跡』1985

(31) 鹿児島県教育委員会『一般国道220号線鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書（III）前畑遺跡』1990

(32) 日本考古学協会『日本考古学年報』39 1988

(33) 佐賀市教育委員会『佐賀市文化財調査報告書』第24集 1989

(34) 関金町教育委員会『大山池遺跡（上野辺地区）・大坪塚古墳発掘調査報告書』1985

(35) 徳島県教育委員会『西長峰遺跡現地説明会資料』1990

(36) 岩崎直也氏のご教示による。岩崎氏によれば、独立棟持柱建物は特に珍しい検出例ではなく、倉庫の場合も多いという。『近江八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』などによる。

(37) 宮本長二郎「弥生時代・古墳時代の掘立柱建物」『弥生時代の掘立柱建物跡一本編一』1991埋蔵文化研究会

(38) 前掲（30）

(39) 岡山県教育委員会「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3 中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査1」1973

(40) 石川直章「複次葬についてのノート 一桜ノ岡遺跡（I）出土の大型集石土壙検討のための基礎作業その1一」『徳島県埋蔵文化財センター年報』Vol.1 財団法人徳島県埋蔵文化財センター1990

石川直章「火をともなう葬送についてのノート一桜ノ岡遺跡（I）出土の大型集石土壙検討のための基礎作業その2一」『徳島県埋蔵文化財センター年報』Vol.2 財団法人徳島県埋蔵文化財センター1991

(41) 徳島県埋蔵文化財センター「椎ヶ丸～芝生遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol.2』1991

(42) 前掲（40）に詳しい。現段階では筆者の見解と相違するものも含まれている。

(43) 徳島県教育委員会『土成町北原遺跡』1988

(44)　徳島県埋蔵文化財センター「北原～大法寺遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol.2』1991

(45)　徳島県埋蔵文化財センター『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2 前田遺跡』1993

(46)　徳島県教育委員会『土成前田遺跡』1989

(47)　菅原康夫「徳島県足代東原遺跡」『日本考古学年報』35　1985日本考古学協会

(48)　菅原康夫他『萩原墳墓群』1983徳島県教育委員会

(49)　前掲（2）

松木武彦「弥生時代の石製武器の発達の地域性—特に打製石鏃について　」『考古学研究』35－4 1989

4　自然科学的分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

桜ノ岡遺跡（Ⅰ）（阿波郡阿波町桜ノ岡）は、吉野川中流域左岸の段丘上（標高約84m）に立地する。これまでの発掘調査により、弥生時代中期および中世を中心とした遺構や遺物が検出されている。とくに弥生時代中期の遺構では土壙が検出されており、土壙底部付近から土器片や炭化材が検出された。発掘調査所見によると、本土壙は土器棺墓による墓壙と推測され、本土壙で検出された炭化材は遺構に伴うものと考えられている。

今回の自然科学分析調査では、弥生時代中期の土壙の性格、とくに墓壙の可能性について検討することと、土壙底部から検出された炭化材の樹種を知ることが目的である。

土壙あるいは土器内に人骨の痕跡が認められない場合、その痕跡を検証する理化学的分析手法として、次の２つの方法がある。ひとつは、人体とくに人骨に多量に含まれ、土壌中では比較的移動しにくいとされるリン酸の含有量を測定するリン分析（竹迫　1981）である。もうひとつは、動植物の有機成分であり、土壌中に比較的残留しやすいとされる脂肪酸の組成を測定する脂肪酸分析（中野　1986）である。とくに、後者の脂肪酸分析は脂肪酸の特徴から、動植物の種類を同定できる点で優れている。しかし、試料の取扱いの難しさと分析の繁雑さ、あるいは土壌を対象にした場合のデータの信頼性について開発しなければならない課題がある。したがって、分析調査事例が豊富で、分析操作が比較的簡便なリン分析を選択した。一方、土壙底部から検出された炭化材の種類を知るために材同定を行うこととした。

(1)　土壌分析

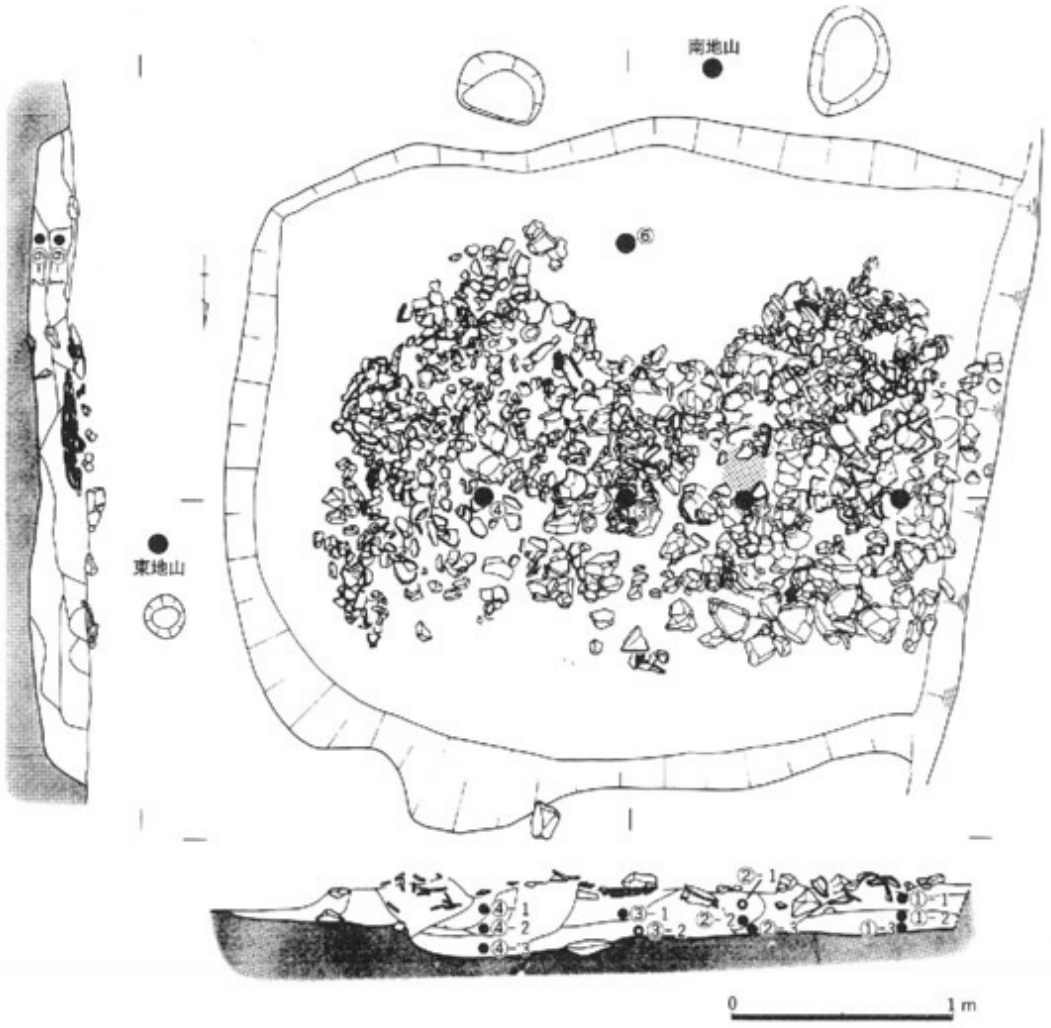
①　試料

リン分析については、８号土壙（SK1008）、16号土壙（SK1016）、39号土壙（SK1039）の埋積物と８号土壙、16号土壙付近から採取された地山（自然堆積層）を対象とした。分析点数は合計30点（図１～３）である。

炭化材同定については、２基の土壙(SK1008，SK1016)内から検出された炭化材合計５点（試料名：SK1008炭化材①・炭化材②、SK1016東西畦面直上・C床面直上・⑥地点床面直上炭化材）である。表１に各分析調査の試料表を示す。

○● は試料採取位置を示し，● はリン分析試料とした

図1　SK1008平・断面図および試料採取位置



○● は試料採取位置を示し，● はリン分析試料とした

図2　SK1016平・断面図および試料採取位置

● は試料採取位置を示し，リン分析試料とした

図3　SK1039平・断面図および試料採取位置

表1　分析試料の一覧

分析項目	土　壙	試料番号	質（当社の観察結果に基づく）
リン分析	SK1008	②－1	10YR4/2　にぶい黄褐色　壌土（L）
		②－2	10YR4/2　にぶい黄褐色　壌土（L）
		③－1	10YR4/2　にぶい黄褐色　壌土（L）
		③－2	10YR4/2　にぶい黄褐色　壌土（L）
		③－3	10YR4/2　にぶい黄褐色　壌土（L）
		③－4	10YR4/2　にぶい黄褐色　壌土（L）
		③－5	10YR4/2　にぶい黄褐色　壌土（L）
		③－6	10YR4/2　にぶい黄褐色　壌土（L）
		④－1	10YR4/2　にぶい黄褐色　壌土（L）
		④－2	10YR4/2　にぶい黄褐色　壌土（L）
		④－3	10YR4/2　にぶい黄褐色　壌土（L）
		地山①	10YR4/2　にぶい黄褐色　壌土（L）
		地山②	10YR4/2　にぶい黄褐色　壌土（L）
		土器①	10YR4/2　にぶい黄褐色　壌土（L）
		土器⑤	10YR4/2　にぶい黄褐色　壌土（L）
	SK1016	①－1	10YR4/2　にぶい黄褐色　壌土（L）
		①－2	10YR4/2　にぶい黄褐色　壌土（L）
		①－3	10YR4/2　にぶい黄褐色　壌土（L）
		②－2	10YR4/2　にぶい黄褐色　壌土（L）
		②－3	10YR4/2　にぶい黄褐色　壌土（L）
		③－1	10YR4/2　にぶい黄褐色　壌土（L）
		④－1	10YR4/2　にぶい黄褐色　壌土（L）
		④－2	10YR4/2　にぶい黄褐色　壌土（L）
		④－3	10YR4/2　にぶい黄褐色　壌土（L）
		⑥－1	10YR4/2　にぶい黄褐色　壌土（L）
		⑥－2	10YR4/2　にぶい黄褐色　壌土（L）
		東地山	10YR4/2　にぶい黄褐色　壌土（L）
		西地山	10YR4/2　にぶい黄褐色　壌土（L）
	SK1039	土器①	10YR4/2　にぶい黄褐色　壌土（L）
		土器②	10YR4/2　にぶい黄褐色　壌土（L）
炭化材同定	SK1008	炭化材①	炭化材
		炭化材②	炭化材
	SK1016	東西畦面直上	炭化材
		C床面直上	炭化材
		土壌分析⑥－2下	炭化材

注）　リン分析試料の質は、農林省農林水産技術会議事務局（1967）、ペドロジスト懇談会（1984）を参考に調査した。

② 弥生時代中期の土壌の性格

(a) リン分析の方法と結果

測定方法は、土壌標準分析・測定法委員会（1986）、土壌養分測定法委員会（1981）、京都大学農学部農芸化学教室（1957）などを参考にした。以下に具体的操作行程を示す。

試料を風乾後、軽く粉砕して2㎜の篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、5時間）により測定する。風乾細土試料2gをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸（HNO_3）5mℓを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（$HClO_4$）10mℓを加えて再び加熱分解を行う。分解修了後、水で100mℓに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて、分光光度計によりリン酸（P_2O_5）濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン含量（P_2O_5mg／g）を求める。分析結果を表2に示す。

表2　リン分析結果

土　坑	試料番号	リン酸含量 P_2O_5mg/g	土　坑	試料番号	リン酸含量 P_2O_5mg/g
SK1008	②－1	0.80	SK1016	①－1	0.82
	②－2	0.71		①－2	0.85
	③－1	0.74		①－3	0.73
	③－2	0.73		②－2	0.69
	③－3	0.73		②－3	0.69
	③－4	0.70		③－1	0.72
	③－5	0.60		④－1	0.72
	③－6	0.65		④－2	0.64
	④－1	0.72		④－3	0.62
	④－2	0.73		⑥－1	0.73
	④－3	0.65		⑥－2	0.75
	地山①	0.58		東地山	0.68
	地山②	0.48		南地山	0.74
	土器①	0.78			
	土器⑤	0.81	SK1039	土器①	1.01
				土器②	1.04

注）リン酸含量の単位は乾土1gあたりのmgで表示。

(b) 考察

SK1008では、地山を除く各試料の含量が0.60～0.81P_2O_5mg／g（平均値：0.73，母標準偏差：0.063）の比較的狭い範囲の値を示す。また、SK1016においても地山を含めた含量範囲が

0.62～0.85P_2O_5mg／g（平均値；0.72，母標準偏差；0.063）で、SK1008とほぼ同じ範囲の値を示す。一方、SK1039の土器内試料では、両者ともに1.0P_2O_5mg／gの範囲にあり、SK1008、SK1016よりやや高い値が認められる。

ところで、土壌に通常含有されるリン含量については様々な報告例がある。Bowen(1983)によって調査された各国のリン含量では、中央値が2.0P_2O_5mg／g、Bolt and Bruggenwert（1980）では1.0～2.5P_2O_5mg／gとされる。川崎ほか（1991）の研究事例では、リン含量の比較的高い黒ボク土の平均値は未耕地で2.1P_2O_5mg／g、既耕地で5.5P_2O_5mg／g、天野ほか(1991)の研究事例では、リンの自然賦存量は2.7P_2O_5mg／g以下とされる。なお、それぞれの研究事例に記載されている単位がまちまちであるため、ここではすべて「P_2O_5mg／g」として統一表示した。これらの報告例から、土壌本来のリン含量は普通3.0P_2O_5mg／g以下で、最大でも5.0P_2O_5mg／g前後と推定される(以後、本文中でこの範囲の含量を標準含量と仮称する)。したがって、この値を著しく越える土壌は、何らかの影響によってリン成分が土壌中に富化されたものと考えられる。今回の結果では、いずれもこの標準含量を越えていないことから、リン成分の高い内容物による富化は認められない。したがって、分析調査の対象とした土壙あるいは土器内に人体を埋葬した可能性を指摘することは難しい。ただし、SK1039の土器内において相対的な含量の増加が認められる点についてSK1008の土器より何らかの内容物の存在が考えられる。しかしこの値では積極的に検討できるものではなく、次のことが想定される。

① 土器内に遺体が埋葬されていたが、分解したリン成分のほとんどが埋積物に吸着・保持されることなく系外へ流失した。

② 人体などの動物遺体とは異なるものが保存された（例えば、植物性の食物など)。

③ 埋積物そのものに含まれているリン含量が土壙内の埋積物と異なっていた。

しかし、リン分析では内容物の痕跡（人あるいは動物遺体などに限る）を定性的に捉える手法であり、人以外の動物遺体が埋納された場合や植物体が保存されたか否かを判別することはできない。

(2) 炭化材同定

① 土壙埋積物の炭化材

(a) 炭化材の同定方法

試料を乾燥させたのち木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の割断面を作製し、走査型電子顕微鏡（無蒸着・反射電子検出型）で観察・同定した。

(b) 結果

同定結果を表3に示す。SK1016東西畦面直上とC床面直上の試料については、それぞれ3種類の材が認められたため、試料名にa～cの記号を付して表記した。各種類の主な解剖学的特徴や現生種の一般的性質等を以下に記す。なお、和名・学名等は主として「原色日本植物図鑑　木本編〈II〉」（北村・村田，1979）にしたがい、現生種の一般的性質等については「木の事典　第2，3，4，6，8巻」（平井，1979－1981）も参考にした。

表3　桜ノ岡遺跡（I）出土炭化材同定結果

試料名	用途	時代	樹種名
SK1008　炭化材①	燃料材	弥生時代中期	ヤマグワ
炭化材②	燃料材	弥生時代中期	ヤマグワ
SK1016　東西畦面直上a	燃料材	弥生時代中期	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
東西畦面直上b	燃料材	弥生時代中期	ツブラジイ
東西畦面直上c	燃料材	弥生時代中期	ヤマグワ近似種
C床面直上a	燃料材	弥生時代中期	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
C床面直上b	燃料材	弥生時代中期	ヒノキ属の一種
C床面直上c	燃料材	弥生時代中期	シキミ近似種
⑥地点床面直上炭化材	燃料材	弥生時代中期	コナラ属アカガシ亜属の一種

・ヒノキ属の一種（*Chamaecyparis* sp.）ヒノキ科

早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭く、年輪界は明瞭。樹脂細胞は晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型で1～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

ヒノキ属には、ヒノキ（*Chamaecyparis obtusa*(Sieb. et Zucc.)Endlcher）とサワラ（*C. pisifera*(Sied. et Zucc.)Endlcher）の2種がある。ヒノキは本州（福島県以南）・四国・九州に分布し、また各地で植栽される常緑高木で、国内ではスギに次ぐ植林面積を持つ重要樹種である。材はやや軽軟で加工は容易、割裂性は大きいが、強度・保存性は高い。建築・器具材など各種の用途が知られている。サワラは本州（岩手県以南）・九州に自生し、また植栽される高木で多くの園芸品種がある。材は軽軟で割裂性は大きく、加工も容易、強度的にはヒノキに劣るが耐水性が高いため、樽や桶にするほか各種の用途がある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus* sp.）ブナ科

環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、小道管は管壁は中庸～薄く、横断面では多角形、ともに単独。単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。柔組織は周囲状および短接線状。柔細胞はし

ばしば結晶を含む。年輪界は明瞭。

コナラ節では、コナラ亜属（落葉ナラ類）の中で、果実（いわゆるドングリ）が1年目に熟するグループで、モンゴリナラ（*Quercus mongolica* Fischer ex Turcz.）とその変種ミズナラ（*Q. mongolica* Fischer ex Turcz. var. *grosseserrata* (Bl.)Rehder et Wilson）、コナラ（*Q. serrata* Murray）、ナラガシワ（*Q. aliena* Blume）、カシワ（*Q. dentata* Thunberg）といくつかの変・品種を含む。モンゴリナラは北海道・本州（丹波地方以北）に、ミズナラ・カシワは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州（岩手・秋田県以南）・四国・九州に分布する。コナラは樹高20mになる高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・樽材などの用途が知られ、薪炭材としてはクヌギ（*Q. acutissima* Carruthers）に次ぐ優良材である。枝葉を緑肥としたり、虫えいを染料とすることもある。

・コナラ属アカガシ亜属の一種（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* sp.）ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織とがある。柔組織は短接線状および散在状。柔細胞はしばしば結晶を含む。年輪界は不明瞭。

アカガシ亜属（カシ類）には、アカガシ（*Quercus acuta* Thunberg）、イチイガシ（*Q. gilva* Blume）、アラカシ（*Q. glauca* Thunberg）など7種があるが、果実の構造からコナラ亜属に分類される常緑低木～小高木のウバメガシ（*Q. phyllyraeoides* Asa Gray）も、材構造上かカシ類と類似する。カシ類は、暖温帯常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の主要な構成種であり、主として西南日本に分布する。このうち最も高緯度地域にまで分布するのがアカガシで、宮城・新潟県が北限である。材は重硬・強靱で、器具・機械・建築・薪炭材などに用いられる。また種子は食用となる。

・ツブラジイ（*Castanopsis cuspidata*(Thunberg)Schottky）ブナ科

環孔材～放射孔材で孔圏部は3～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では楕円形、小道管は単独および2～3個が斜（放射）方向に複合、横断面では角張った楕円形～多角形、ともに管壁厚は中庸～薄い。道管の穿孔は単穿孔であるが、小道管には1～6段前後の階段穿孔が現れることがある。道管内壁の壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと集合～複合放射組織とがある。柔組織は周囲状、散在状および短接線状、年輪界は明瞭。

ツブラジイは、同属のスダジイやコナラ属アカガシ亜属（カシ類）とともに、暖温帯常緑広葉樹林の主要構成種である。本州（伊豆半島以西南）・四国・九州に分布し、また植栽され

る高木で、内陸地に多く生育する。材はやや重硬で、割裂性は大きく、加工はやや容易、耐朽性は中程度～低い。薪炭材としての用途が最も多く、器具・家具・建築材などにも用いられる。種子は食用となり、樹皮はタンニン原料となる。

・ヤマグワ（*Morus bombycis* Poiret）クワ科

環孔材で孔圏部は1～5列、晩材部へ向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。大道管は管壁は厚く、横断面では楕円形、単独または2～3個が複合、小道管は管壁厚は中庸、横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は密に交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性II～III型、1～6細胞幅、1～50細胞高で、しばしば結晶を含む。柔組織は周囲状～翼状および散在状。年輪界は明瞭。

ヤマグワは北海道・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木で多くの園芸品種があり、養蚕に利用されている。ヤマグワの材はやや重硬で強靱、加工はやや困難で、保存性は高い。装飾材や器具・家具材として用いられ、樹皮は和紙の原料や染料となり、果実は食用となる。

・シキミ近似種（cf. *Illicium anisatum* L.）シキミ科

散孔材で管壁厚は中庸～薄く、横断面では多角形、単独または2～4個が複合する。道管は階段穿孔を有し、段は多数、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性II～I型、1～2細胞幅、1～20細胞高。年輪界は不明瞭。

シキミは本州（宮城・新潟県以南）・四国・九州自生する常緑小高木であり、庭や墓地に植栽されることもある。西日本に多く、カシ林やモミ・ツガ林の下木として普通である。材の強度は中程度で、細工物・薪炭材などに用いられる。材の利用よりも、枝葉を仏花とすることで良く知られている。

(c) 考察

炭化材は、ヒノキ属・コナラ節・アカガシ亜属・ツブラジイ・ヤマグワ・シキミ近似種の6種類に同定された。今回検出された炭化材の用途については、不明である。仮にこれらの炭化材が燃料材として利用されていたならば、次のことが推定される。

分析調査の対象とされた土壙のうち、SK1016では試料数に対して種類数が比較的多い。また、材が軽軟で燃え残りにくいと考えられるヒノキ属も1点検出されており、使用していた当時の組成に近い結果の可能性がある。同定された種類を見ると、コナラ節・アカガシ亜属・ツブラジイのようにブナ科に属する樹種が多い。これらはいずれも燃料材として優れた材であり、現在でも木炭等の燃料材に用いられている。また、地域は離れるが兵庫県佐用郡の坂遺跡及び山平B遺跡では平安時代の製鉄炉から検出された燃料材にコナラ節と同亜属のクヌギ節が（パリノ・サーヴェイ株式会社，1992）、兵庫県竹野町鬼神谷窯跡の須恵器窯から検出された燃料材にアカガシ亜属、シイ属等（伊東，1990）がそれぞれ同定されている。

今回の結果は、他地域で行われた事例と同様にブナ科の樹種が多く、これらの木材は選択して用いられた可能性がある。しかし、徳島県では過去に材同定が行われた例はこれまでに知られておらず、過去の人間の用材選択については不明な点が多い。そのため、今回の結果についても用材が選択されていたと断定することはできない。これについては、様々な木質遺物について分析調査事例を増やすことが不可欠であり、今後さらに資料の蓄積が必要である。

(引用文献)

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信（1991）中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，149p.：p.28－36.

Bowen,H.J.M.（1983）環境無機化学　－元素の循環と生化学－，浅見輝男・茅野充男訳，p.297，博友社［Bowen,H.J.M.(1979) *Environmental Cemistry of Elements*］.

Bolt,G.H. and Bruggenwert,M.G.M.（1980）土壌の化学．岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽捷行訳，309p.，p.235—236，学会出版センター［Bolt,G.H. and Bruggenwert,M.G.M.(1976) *SOIL CHEMISTRY*］.

土壌標準分析・測定法委員会編（1986）土壌標準分析・測定法．354p.，　博友社.

土壌養分測定法委員会編（1981）土壌養分分析法．440p.，養賢堂.

平井信二(1979－1981）木の事典　第2、3、4、6、8巻、かなえ書房

伊東隆夫（1990）鬼神谷窯跡出土炭化材の樹種．「鬼神谷窯跡発掘調査報告」，p.45—46，竹野町教育委員会

川崎　弘・吉田　澪・井上恒久（1991）九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，149p.，p.23－27.

北村四郎・村田　源（1979）原色日本植物図鑑　木本編〈II〉．545p.，　保育社.

京都大学農学部農芸化学教室編（1957）農芸化学実験書　第1巻．411p.，　産業図書.

中野益男（1986）真脇遺跡出土土器に残存する動物油脂．『真脇遺跡』配石遺構の土壌に残存する脂肪の分析，大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書，第1巻，46p.，　秋田県鹿角市教育委員会.

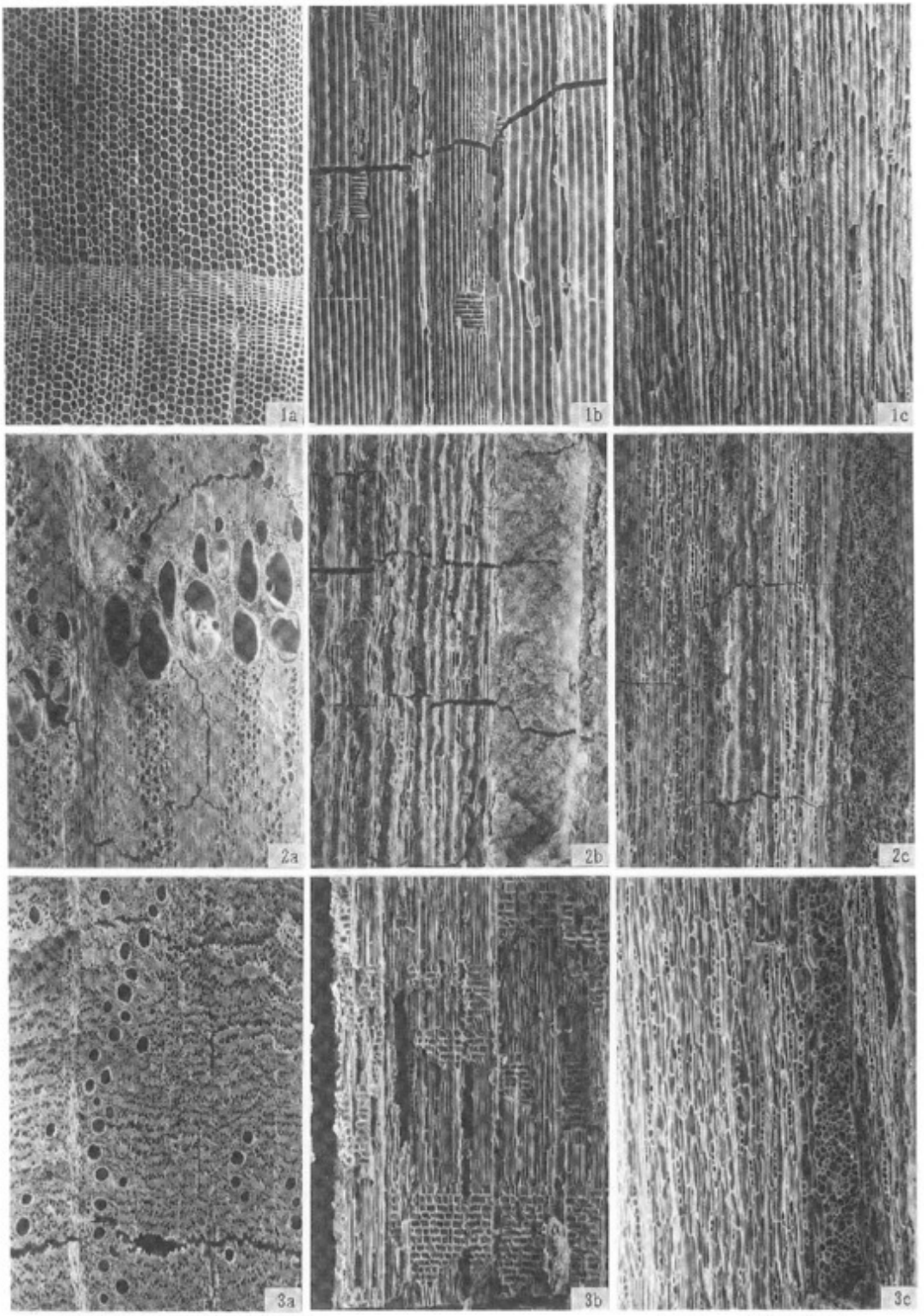
農林省農林水産技術会議事務局監修（1967）新版標準土色帖

パリノ・サーヴェイ株式会社（1992）炭の樹種同定．兵庫県生産遺跡調査報告書第1冊「製鉄遺跡I（佐用郡）」，p.92—95，　兵庫県教育委員会.

ペドロジスト懇談会編（1984）野外土性の判定．「土壌調査ハンドブック」，156p.，p.39—40，　博友社.

竹迫　紘（1981）11号住居址内埋甕中の土壌リン酸分析．横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査報告，p.156—158，　横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査団.

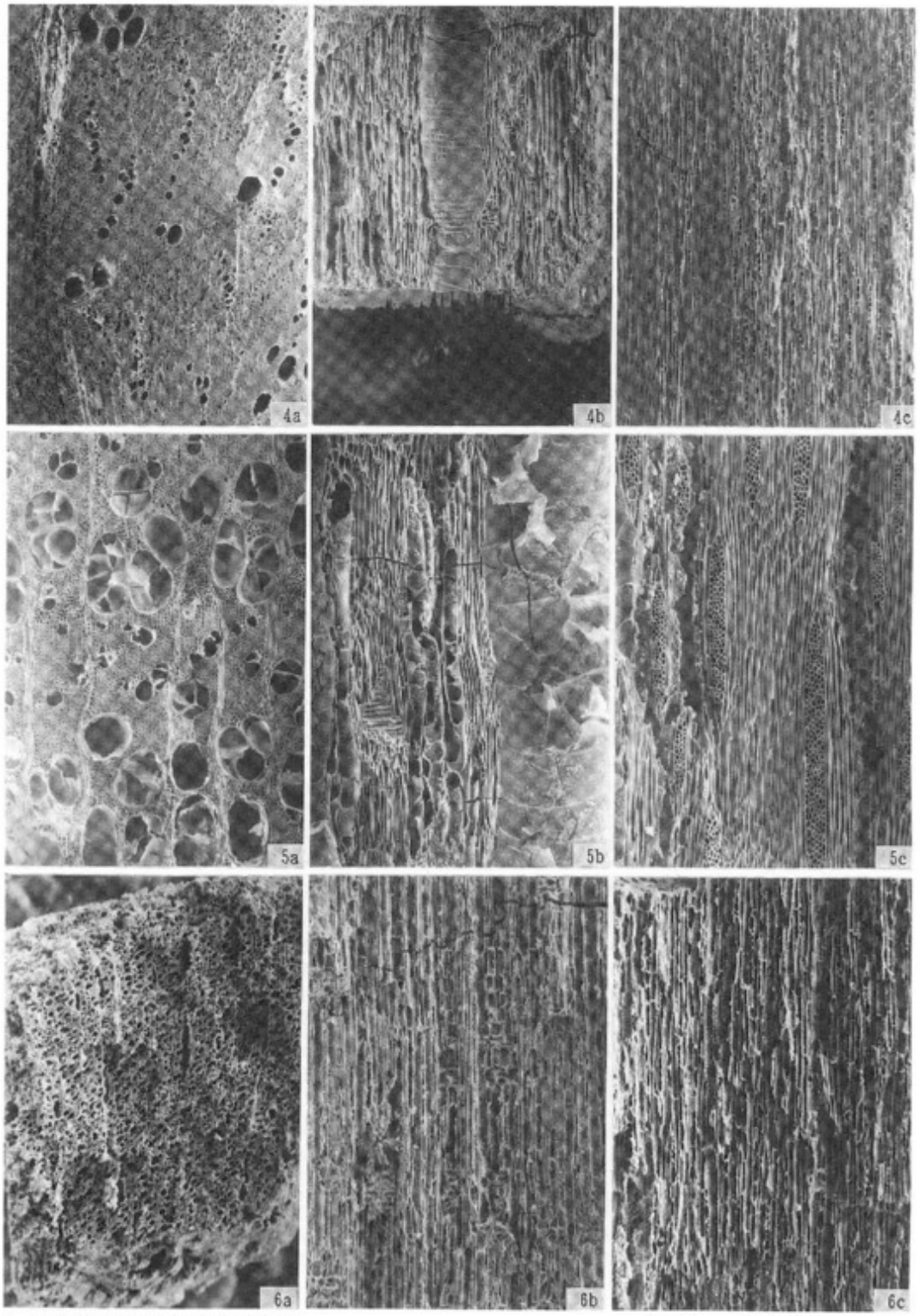
図版1　桜ノ岡遺跡（Ⅰ）炭化材(1)



1．ヒノキ属の一種（SK1016 C 床面直上 b）
2．コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種（SK1016C 床面直上 a）
3．コナラ属アカガシ亜属の一種（SK1016 ⑥地点床面直上炭化材）
a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：2a, 3a
200μm：1a-c, 2b-c, 3b-c

図版２　桜ノ岡遺跡（II）炭化材(2)



4．ツブラジイ（SK1016 東西畦面直上 b）
5．ヤマグワ（SK1008 炭化材①）
6．シキミ近似種（SK1016 C 床面直上 c）
a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b,c

B　桜ノ岡遺跡（Ⅲ）

1　基本層序（第202・203図）

桜ノ岡遺跡（Ⅲ）は、たちばな谷の支流によって形成された、東西幅約30m、南北の長さ200mの尾根状をなす狭い段丘面上にある。調査前の土地利用は、調査地が果樹園と畑作、調査地の北側に水田がある。調査区とその周辺の地形を第203図に示した。水田部分はもちろんのこと、果樹園部分についても北側と南側については削平を受けているようである。

調査区壁Ａ－Ｂ間の土層図（第203図）によると北側は表土下が地山、中央部は表土下に明黄褐色の砂質土層が、比較的安定して堆積し、南側はまた、表土下が削平された地山となっている。Ｃ－Ｄ間については、Ａ地点付近までは表土直下が地山、緩やかな斜面部にかかる地点で明黄褐色土が堆積している。

この表土層・明黄褐色土層ともに密度は低いが、遺物を包含している。

2　出土遺物（第204図）

調査区内で出土した遺物は、弥生土器片17点、土師器片２点、須恵質土器片２点、サヌカイト片10点、結晶片岩片４点、細石刃１点、楔形石器１点、小型円柱状石斧１点がすべてである。

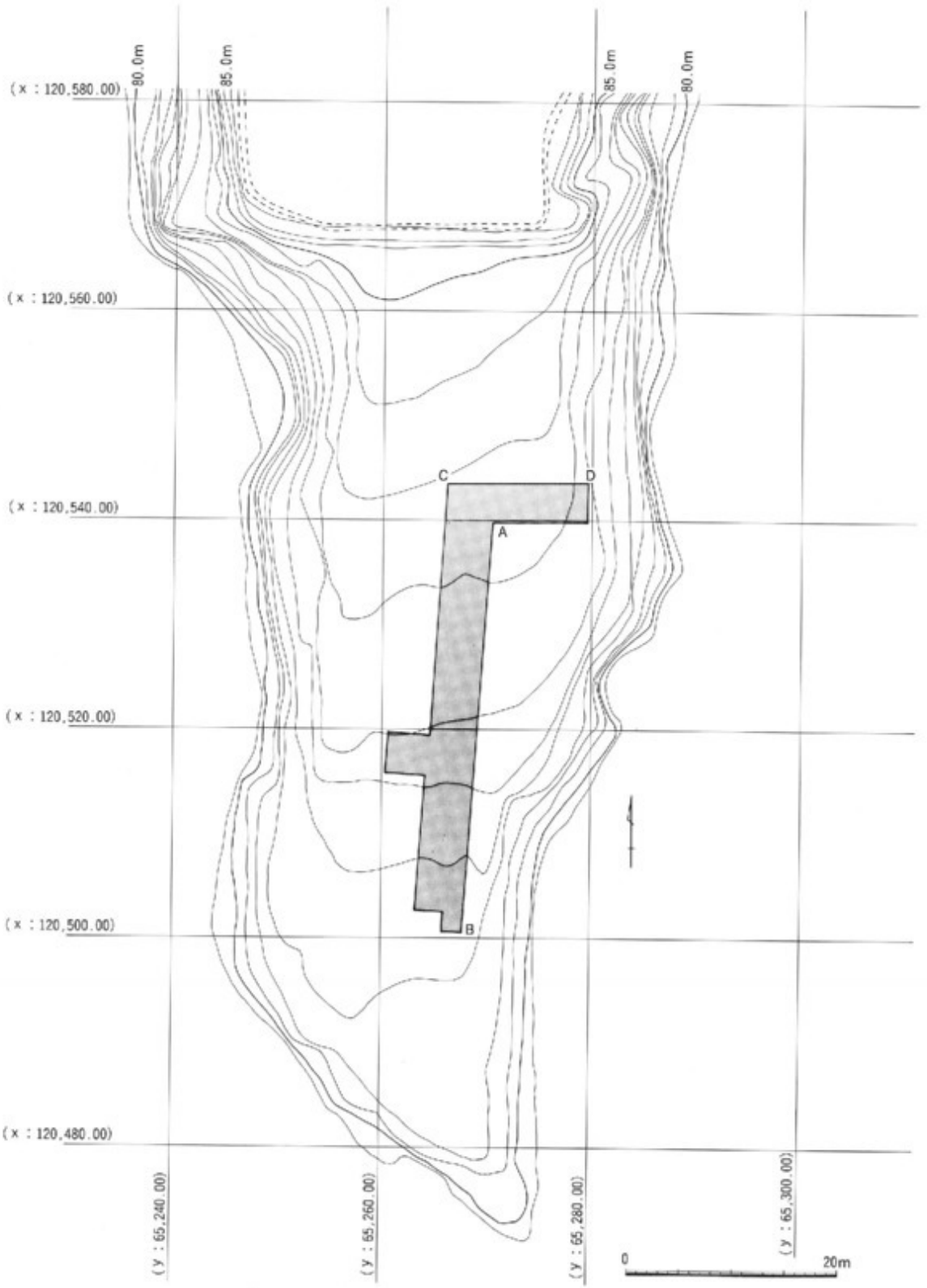
１は細石刃とみられる緑灰色のチャート製の縦長の剥片である。表面に交互剥離による２条の稜が観察でき、断面台形を呈している。井島Ｉ式段階の可能性がある。

２は楔形石器である。波璃質安山岩の自然礫の両端が、両極打法による剥離状況を呈す。左側面は裁断面である。３・４はサヌカイトの横長の剥片である。ともに他の剥片に較べて風化の度合いが著しく、細石刃等と共伴する時期の可能性がある。

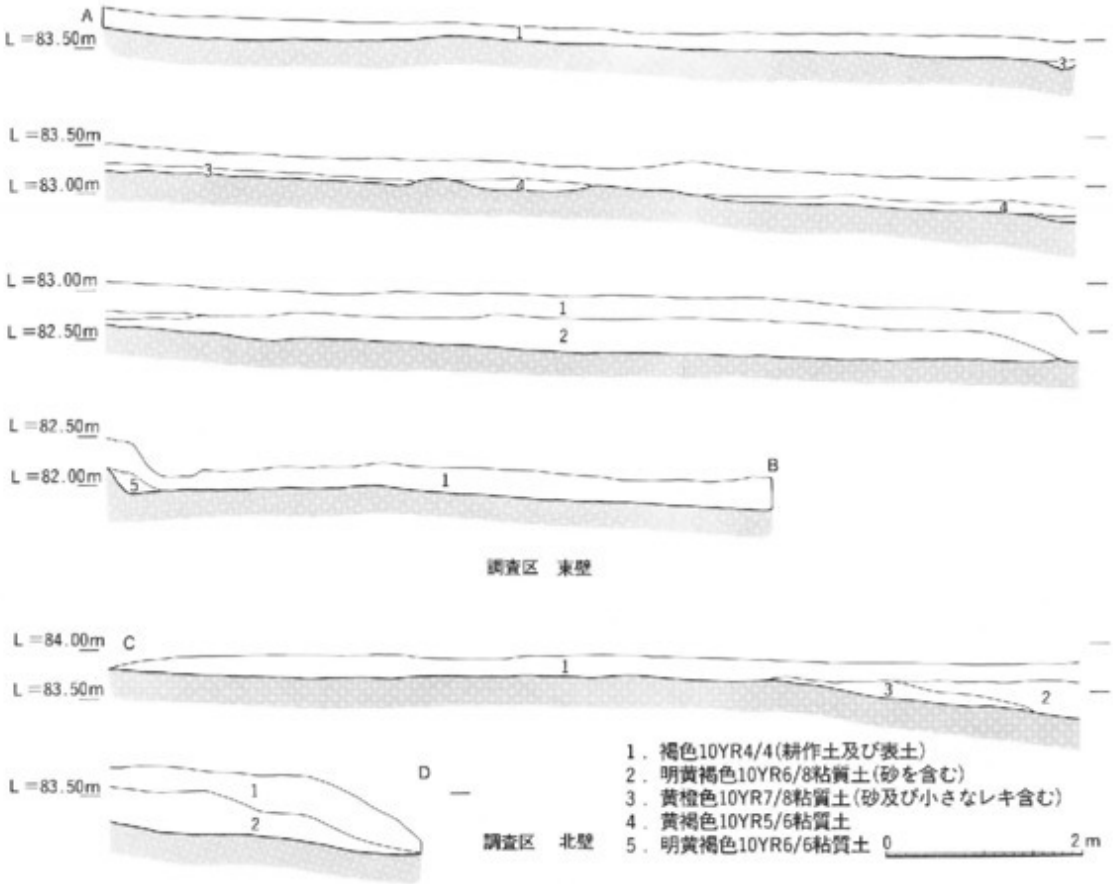
５は小型円柱状石斧である。石材は粘板岩。表面に自然面が残っているので、母岩からはぎ取った剥片の縁辺を敲打して成形し、刃部を中心に表裏面の研磨と、側辺の研磨を行って仕上げている。口吉谷遺跡に類例[(1)]がみられる。

弥生土器片は図化できる個体はなかったが、壺・甕等の破片とみられ、あまり摩滅していない。器面調整は、粗いハケが中心で、甕の体部下半とみられる破片に、内面ヘラケズリ技法がみられ、中期後半以降のものである可能性が考えられる。

須恵質土器片の中には、備前焼の擂鉢がみられる。片口の部分しか残っていないので図化は不可能であるが、古い段階の可能性がある。土師器片は甕の口縁部の極小片があるが、口縁内面をハケで撫でて仕上げている。



第202図　桜ノ岡遺跡（III）地形・調査区配置図



第203図　桜ノ岡遺跡（III）調査区壁土層図

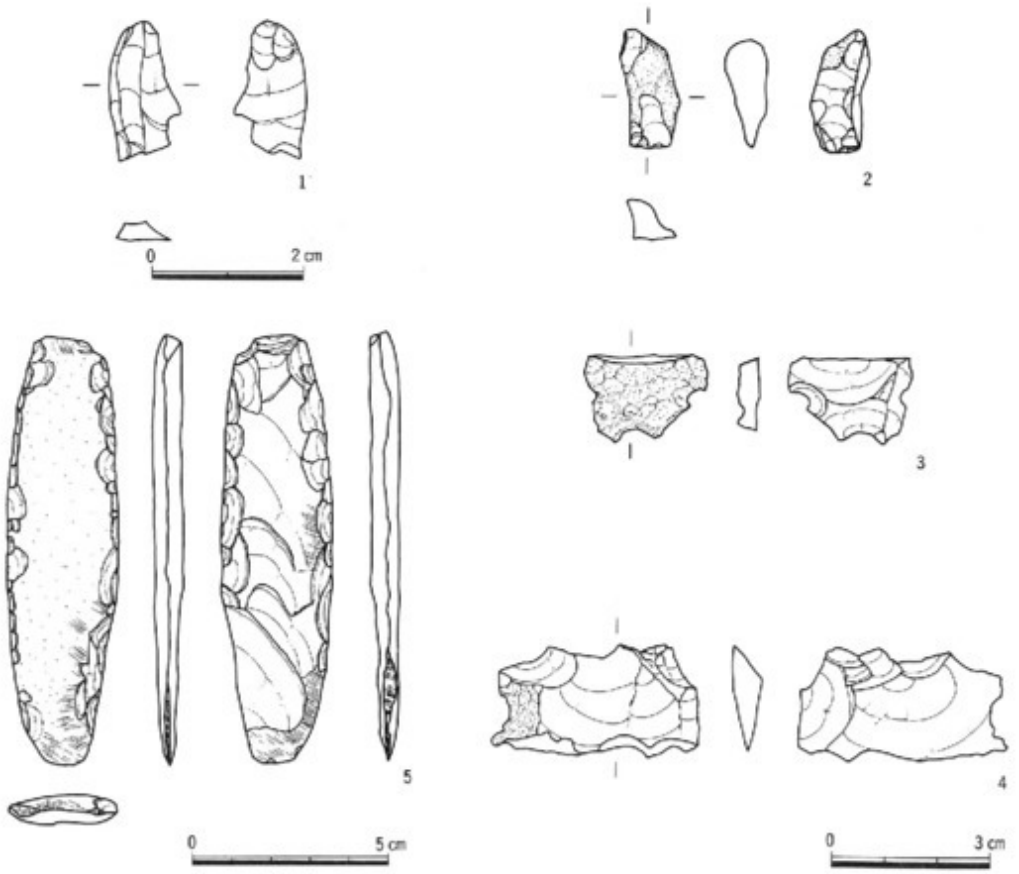
3　まとめ

桜ノ岡遺跡（III）の地点では、遺構は検出されず、遺物の出土数も少ない。遺物は旧石器時代の可能性のあるものから、弥生時代・中世と幅がある。定住的な営為は検出されなかったものの、周辺の遺跡との関連で成立した遺物包蔵地と理解しておきたい。

また、細石刃の出土は徳島県内では、まだその例が少なく廿枝遺跡に次ぐものであり、石器石材はサヌカイトが圧倒的に優位な吉野川北岸にありながら、チャートを石材として使用していることも興味深い。

注

（1）　財団法人徳島県埋蔵文化財センター「日吉谷遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報Vol.1』1990



第204図　桜ノ岡遺跡（III）出土遺物実測図

第2表　弥生時代竪穴住居跡一覧表

遺構名	出土地点	規模（cm）	平面形	出土遺物	時期	特徴・備考	挿図番号
SB1001	2・7区 Y・Z-18・19	長軸 680 / 短軸 628 / 深さ 20 / 炉 102×91×15 柱穴（深さ） P-1（43）P-2（30）P-3（34）P-4（20） P-5（28）P-6（21）P-7（33）P-8（11） P-9（36）P-10（28）P-11（21）P-12（20） P-13（22）P-14（21）P-15（29）	不整楕円形	弥生土器、紡錘車、石鏃、石錐、石槍、模形石器、石鋸、磨製石斧、打製石庖丁、砥石、台石、敲石、サヌカイト片等	中期 1段階	周壁溝あり。 建て替え。 焼石遺構あり。	10～18
SB1002	7区 Z・AA-22	長軸 (600) / 短軸 (550) / 深さ / 炉 100×61×26 柱穴（深さ） P-1（13）P-2（18）P-3（26）P-4（16） P-5（34）P-6（43）P-7（21）P-8（13） P-9（32）P-10（26）P-11（31）P-13（31） P-14（19）P-15（21）P-16（6）	楕円形（？）	弥生土器、石鏃、サヌカイト片	中期 2段階	周壁は削平により欠失。	19
SB1003	7区 W・X-21・22	長軸 572 / 短軸 516 / 深さ 18 / 炉 —— 柱穴（深さ） P-1（33）P-2（20）P-3（29）P-4（25） P-5（30）P-6（18）P-7（16）P-8（15） P-9（15）P-10（12）P-11（20）P-12（15）	不整楕円形	弥生土器片、打製石庖丁	中期 1段階	炉をもたない。	48
SB1004	7区 T～V-22・23	長軸 980 / 610 / 短軸 (800) / 610 / 深さ 26 / 26 / 炉 138×108×13 柱穴（深さ）P-1（20）P-2（8）P-3（17）P-4（10）P-5（11）P-6（42）P-7（10）P-8（11）P-9（23）P-10（35）P-11（26）P-12（18）P-13（20）P-14（12）P-15（19）P-16（25）P-17（37）P-18（34）	円形	弥生土器、紡錘車、石鏃、石錐、模形石器、スクレイパー、サヌカイト片、打製石庖丁、磨製石斧	中期 1段階	周堀溝あり。 建て替え・拡張。	20～29
SB1005	9区 AC・AD-25・26	長軸 (490) / 短軸 (295) / 深さ 8 / 炉 140×96×26 柱穴（深さ） P-1（29）P-2（9）P-3（23）P-4（28） P-5（26）P-6（25）P-7（26）P-8（26） P-9（30）P-10（25）P-11（19）	不明	弥生土器、紡錘車、磨製石斧、サヌカイト片	中期 2段階		30
SB1006	9区 AD・AE-28・29	長軸 632 / 短軸 480 / 深さ 20 / 炉 101×70×14 柱穴（深さ） P-1（14）P-2（27）P-3（31）P-4（43） P-5（21）P-6（19）P-7（19）P-8（20） P-9（10）P-10（12）P-11（16）P-12（16） P-13（14）P-14（13）P-15（13）P-16（23）	不整隅丸形	弥生土器、石鏃、スクレイパー、サヌカイト片、叩石、砥石	中期 1段階	P-8は単独須構の可能性。 高床部あり。 焼石遺構あり。	31～35
SB1007	9区 AC・AD-30・31	長軸 596 / 短軸 585 / 深さ 8 / 炉 (66)×95×25 柱穴（深さ） P-1（17）P-2（43）P-3（22）P-4（10） P-5（14）P-6（6）P-7（6）P-8（13） P-9（30）P-10（31）P-11（12）P-12（18） P-13（29）P-14（27）P-15（18）P-16（23）	不整円形	弥生土器、サヌカイト片	中期（？） 不明		36
SB1008	7区 Z・AA-23・24	長軸 (550) / 短軸 550 / 深さ — / 炉 114×78×26 柱穴（深さ） P-1（43）P-2（32）P-3（26）P-4（23） P-5（12）P-6（26）P-7（21）P-8（18） P-9（11）P-10（18）P-11（29）P-12（26） P-13（30）P-14（20）P-15（9）P-16（26）	楕円形	弥生土器、サヌカイト片、打製石庖丁、結晶片岩片	中期 1段階	周壁溝あり。 周壁は削平により欠失。	37～39

遺構名	出土地点	規模（cm）	平面形	出土遺物	時期	特徴・備考	挿図番号
SB1009	11区 AE・AF-18～20	長軸 短軸 深さ 計 520 (488) 15 79×62×18 柱穴（深さ）P-1(36) P-2(23) P-3(17) P-4(20) P-5(25) P-6(21) P-7(25) P-8(42) P-9(35) P-10(17) P-11(17) P-12(22) P-13(12) P-14(19) P-15(38) P-16(25) P-17(27) P-18(27) P-19(26) P-20(13) P-21(7)	不整円形	弥生土器、スクレイパー、打製石鏃、丁、サヌカイト片	中期 1段階		40
SB1010	11区 AD・AE-23・24	長軸 短軸 深さ 計 800 656 13 83×62×12 柱穴（深さ）P-1(12) P-2(16) P-3(23) P-4(22) P-5(22) P-6(18) P-7(18) P-8(12) P-9(18) P-10(30) P-11(41) P-12(9) P-13(18) P-14(20) P-15(22) P-16(22) P-17(14) P-18(28) P-19(23) P-20(14) P-21(15)	不整楕円形	弥生土器、石錘、打製石鏃丁、サヌカイト片、石英、結晶片岩、磨製石斧、チャート	中期 1段階	松菊里甲位置。 集石遺構あり。	41～46
SB1011	8区 Z・AA-28・29	長軸 短軸 深さ 計 580 (305) 15 —— 柱穴（深さ） P-1(9) P-2(18) P-3(32) P-4(24) P-5(16) P-6(10) P-7(19) P-8(23) P-9(5) P-10(10) P-11(44)	円形	弥生土器、サヌカイト片	中期 2段階		47

第3表　弥生時代建物遺構一覧表

遺構名	出土地点	規模 間数	規模 梁間(m)	規模 桁行(m)	規模 床面積(㎡)	主軸方向	出土遺物	特徴・備考	挿図番号
SA2001	7区 W～Y 21	1×1	3.0	3.0	9.0	N-5° W	弥生土器、磨製石斧、サヌカイト片	独立棟持柱	49～54
SA2002	7区 V・W-19	1×2	3.0	6.0	18.0	N 2° W	なし		55

第4表　弥生時代遺構一覧表

遺構名	出土地点	規模（cm） 長軸	規模（cm） 短軸	規模（cm） 深さ	平面形	出土遺物	特徴・備考	挿図番号
SK1008	1区 V-13	360	220	25	隅丸方形	弥生土器、チャート、打製石庖丁、スクレイパー、石錐、石鏃	被覆礫堆、土器、炭化材、黒色円礫、石器	56～63
SK1014	1区 W-14	(220)	75	25	楕円形	弥生土器、砥石、石錐、打製石庖丁、サヌカイト片、磨製石斧	被覆礫堆、土器、炭化物、石器、黒色円礫	64～72
SK1016	2区 X 15	(400)	300	25	隅丸方形	弥生土器、磨製石斧、打製石斧、打製石庖丁、砥石、石英	被覆礫堆、土器、炭化物、石器、白色円礫	73～86
SK1039	3区 R 19	230	130	20	隅丸方形	弥生土器、チャート、砥石、磨製石斧、スクレイパー	被覆礫堆、土器、炭化物、石器、黒色円礫	87～94
SK1045	1区 Z 15	(283)	(45)	35	不整形	弥生土器、チャート	一部被覆礫堆、土器、炭化物、黒色円礫	95・96
SK1049	1区 W 10	A 105	55	30	楕円形	弥生土器、砥石	被覆礫堆、土器、礫石	97～99
		B 48	32	25	隅丸方形	弥生土器	土器	
SK1061	7区 Z・AA 23・24	208	(192)	25	隅丸方形	弥生土器、サヌカイト片	被覆礫堆	100
SK1168	11区 AE-23	140	140	33	不整形	弥生土器、サヌカイト片	被覆礫堆	101
SK1178	9区 AD-28	140	93	20	隅丸方形	弥生土器、打製石庖丁、サヌカイト片、磨製石斧	被覆礫堆、土器、石器、炭化物	102～105
SD1001	2区 Y・Z-16・17	505	42	30	不整形	弥生土器、チャート、石石	被覆礫堆、土器、石器、黒色円礫	106・107

遺構名	出土地点	規模 (cm) 長軸	短軸	深さ	平面形	出土遺物	特徴・備考	挿図番号
SK1005	1区 V-12	79	64	10	円形	弥生土器、結晶片岩、サヌカイト片		
SK1017	2区 W-15	(90)	103	32	不整形	磨製石斧	土壙墓	108
SK1028	2区 W-18	100	74	14	方形	弥生土器、砥石	中世SA1002が重なる	109
SK1029	2区 W-18	121	106	21	不整方形	弥生土器、石鏃、スクレイパー、刃石	中世SA1002が重なる	109
SK1034	3区 R-18	118	86	12	楕円形	砥石	上面削平	110
SK1040	3区 P-19	190	42	39	不整形	弥生土器、結晶片岩		
SK1051	8区 Z・AA-25・26	172	106	40	隅丸方形	弥生土器	上面削平	111
SK1052	8区 AB-26	142	128	40	不整円形	弥生土器	上面削平	190
SK1057	8区 Z-27	122	107	28	楕円形	弥生土器		112
SK1058	8区 Z-28	163	65	34	隅丸方形	弥生土器		
SK1062	7区 Z-23	(208)	150	(25)	隅丸方形	弥生土器、サヌカイト片		113
SK1063	7区 Y・Z-23・24	155	155	24	隅丸方形	弥生土器		114
SK1064	7区 Z-23	127	100	35	楕円形	弥生土器、結晶片岩、砥石		
SK1065	7区 Y・Z-23	266	200	32	不整形	弥生土器、サヌカイト片、結晶片岩		
SK1067	7区 Y-23	120	106	21	隅丸方形	弥生土器		
SK1068	7区 X・Y-23・24	(268)	289	28	楕円形	弥生土器、石斧(?)		115
SK1069	7区 Y-22・23	329	200	21	不整形	弥生土器、サヌカイト片、石庖丁、結晶片岩		116
SK1075	7区 X・Y-21	215	100	21	長楕円形	弥生土器		117
SK1082	7区 U-22	151	91	19	不整方形	石鏃、結晶片岩、サヌカイト片		118
SK1109	6区 R-7・8	(270)	(270)	16	不整形	砥石		119
SK1111	6区 R・S-8	98	93	23	不整形	砥石		120
SK1127	9区 AD-27	284	120	27	不整形	敲磨凹、楔形石器、石鏃、石庖丁		121
SK1128	9区 AC・AD-28	(130)	80	16	隅丸方形	弥生土器		
SK1129	9区 AC・AD-28	116	110	36	不整形	刃石		122
SK1132	9区 AE-29	101	94	13	不整円形	弥生土器	弥生後期	123
SK1133	9区 AE-29・30	129	86	11	不整楕円形	弥生土器		124
SK1135	9区 AD-30	207	141	21	不整形		SB1007に所なる	
SK1152	11区 AE-20	200	108	45	不整形	弥生土器、サヌカイト片、結晶片岩		

遺構名	出土地点	規模 (cm) 長軸	短軸	深さ	平面形	出土遺物	特徴・備考	挿図番号
SK1153	11区 AD・AE-19・20	280	160	21	不整形	弥生土器、サヌカイト片		
SK1157	11区 AD 17・18	218	134	22	小判形	弥生土器		125
SK1159	11区 AE 20	228	144	28	小判形	弥生土器、結晶片岩		126
SK1164	11区 AD 22	194	102	36	不整楕円形	弥生土器、磨製石斧		127
SK1171	11区 AC・AD-24	344	(146)	27	不整楕円形	弥生土器、磨製石斧		128～130
SK1174	9区 AC 27	108	68	41	不整形	弥生土器		131
SK1175	9区 AC・AD-28	96	54	24	隅丸方形	弥生土器、サヌカイト片		132
SK1176	9区 AC 28	124	83	31	楕円形	弥生土器、上製円板		133
SK1184	11区 AD-19	88	82	15	不整形		切りあい関係から弥生時代	
SK1188	11区 AE-20	122	62	12	小判形	弥生土器、結晶片岩		134
SK1194	11区 AC・AD-23・24	146	138	27	不整円形		切りあい関係から弥生時代	
SP1040	1区 Y 15	38	32	34	楕円形	弥生土器		
SP1043	2区 X 15	53	36	15	楕円形		SK1016付属遺構か	73
SP1050	2区 X 16	20	19	9	円形		SK1016付属遺構か	73
SP1051	2区 X-15	40	30	42	隅丸方形	弥生土器	SK1016付属遺構か	73・86
SP1052	2区 W-15・16	25	22	10	楕円形	弥生土器		
SP1120	2区 Y 18	28	24	9	円形		SB1001付属遺構か	10
SP1122	2区 Y 18	24	22	14	円形		SB1001付属遺構か	10
SP1123	2区 Y-18	18	18	4	円形		SB1001付属遺構か	10
SP1138	2区 Z-18	27	23	13	円形		SB1001付属遺構か	10
SP1139	2区 Z-18	24	21	8	円形		SB1001付属遺構か	10
SP1343	7区 Y-23	54	49	27	円形	弥生土器		135
SP1361	7区 Z 23	39	36	22	円形	弥生土器、敲打石器、サヌカイト片		141
SP1371	7区 Y 23	80	68	25	不整円形	弥生土器、サヌカイト片		136
SP1372	7区 Y-23	62	62	37	円形	弥生土器		
SP1380	7区 X-23	35	40	20	不整形	弥生土器		
SP1382	7区 Y-23	40	35	29	不整形	弥生土器		
SP1389	7区 Y・Z-22	40	32	37	不整楕円形	石鏃		141

遺構名	出土地点	規模 (cm) 長軸	短軸	深さ	平面形	出土遺物	特徴・備考	挿図番号
SP1421	7区 W-21	78	30	29	小判形	弥生土器		
SP1422	7区 W-21	58	50	38	楕円形	弥生土器、サヌカイト片		
SP1548	7区 X-22	82	68	32	隅丸方形	弥生土器		141
SP1552	7区 U 18	78	66	14	不整楕円形	弥生土器		
SP1603	9区 AC・AD-29	54	44	17	楕円形	弥生土器		
SP1609	9区 AE 29	87	68	17	楕円形	弥生土器		137
SP1748	11区 AE 21	76	44	28	長楕円形	弥生土器、磨製石斧		138
SP1762	11区 AF 20	33	29	39	隅丸方形	磨製石斧		139
SP1769	11区 AF 29	72	60	34	不整形	弥生土器、磨製石斧		
SP1880	11区 AD 22・23	58	52	26	円形	弥生土器		140
SP1888	11区 AE 23	(84)	78	10	楕円形	弥生土器		
SX1005	2区 Y・X 17・18	730	156	49	不整長方形	弥生土器、サヌカイト片、石錘、結晶片岩		150
SR2001	4・6・10区	(50m)	(11m)	(0.8m)	—	弥生土器、須恵質土器、瓦、有舌尖頭器、石鏃、石錐、石核、スクレイパー、打製石庖丁、石鎌		142～149

第5表　中世建物遺構一覧表

遺構名	出土地点	規模 間数	梁間(m)	桁行(m)	建築面積(m²)	主軸方向	出土遺物	特徴・備考	挿図番号
SA1001	1・2区 W-12～15	1×1	2.80	4.80	13.44	N82°E	土師質土器		166
SA1002	2・7区 W・X-18	1×3	3.00	4.00	12.00	N83°E	土師質土器		167
SA1003	2・7区 V-18・19	2×1	3.14	3.80	11.93	N82°W	土師質土器、須恵質土器、陶器	独特柱あり	168
SA1004	7区 V-19・20	1×1	3.62	4.30	15.57	N84°E	土師質土器		169
SA1005	7区 U・V-19・20	1×1	3.00	3.50	10.50	N82°W			170
SA1006	7区 U・V-20・21	1×1	2.70	4.30	11.61	N82°E			171
SA1007	7区 U・V-21	1×1	2.70	3.50	9.45	N82°E			172
SA1008	7区 Y-21・22	1×1	2.20	3.20	7.04	N53°E	土師質土器		173
SA1009	7区 Y・Z-23	1×1	2.20	3.20	7.04	N55°E			174
SA1010	3区 P・Q-18・19	1×2	3.60	4.30	21.80	N7°E	土師質土器、瓦質土器、根石	南側・西側に庇あり。中央柱穴、地鎮(?)	175
SA1011	3区 R・S-20・21	1×2	3.00	4.00	12.00	N32°W	土師質土器		176
SA1012	5区 L・M-3・4	1×2	3.14	3.60	11.30	N42°W			177

遺構名	出土地点	規模 間数	規模 梁間(m)	規模 桁行(m)	規模 面積(㎡)	主軸方向	出土遺物	特徴・備考	挿図番号
SA1013	5区 K～M-2・3	1×2	2.93	3.86	11.31	N45°W			178
SA1014	11区 AF 20	1×3	2.14	(2.50)	(5.44)	N17°W		一部調査区外	179
SA1015	11区 AE・AF-20・21	2×3	2.70	3.50	9.45	N5°E	土師質土器	焼土柱あり	180
SA1016	11区 AD・AE-18・19	1×2	3.00	4.50	13.50	N13°W			181
SA1017	11区 AE 20・21	1×1	3.40	4.30	14.62	N83°E			182
SA1018	11区 AC～AE-21・22	1×3	3.74	4.86	18.18	N7°E		桁行の柱間長が異なる	183
SA1019	11区 AD～AF-23・24	2×2	5.20	8.10	42.12	N5°W		総柱	184

第6表　中世遺構一覧表

遺構名	出土地点	規模(m) 長さ	規模(m) 幅	規模(m) 深さ	断面形	出土遺物	特徴・備考	挿図番号
SD1002	2区 U-16	(1.86)	0.47	0.26	U字形	土師質土器等	削平をうける	
SD1004	3区 S・T-21～23	(8.63)	0.35	0.13	逆台形	土師質土器、磁器等	上面削平	
SD1005	8区 AA・AB-29・30	(6.40)	2.20	0.33	箱段状	土師質土器、須恵質土器、青磁等	東流	
SD1006	7区 V～X-20	5.30	2.20	0.38	階段状	土師質土器、瓦質土器、陶器	南流	185
SD1007	7区 T～V-19・20	(6.90)	2.80	0.48	階段状	土師質土器、須恵質土器、陶器等	南流	
SD1010	11区 AE・AF 19・20	(4.58)	1.14	0.34	階段状	土師質土器等	東流	186
SD1011	11区 AC～AF 20・21	(14.86)	1.96	0.23	皿形	土師質土器等	南流	

遺構名	出土地点	規模(cm) 長軸	規模(cm) 短軸	規模(cm) 深さ	平面形	出土遺物	特徴・備考	挿図番号
SK1003	1区 W-11	137	34	35	小判形	土師質土器等		187
SK1007	1区 W-13	173	58	20	不整形	土師質土器等		
SK1010	1区 W-13	185	66	23	長楕円形	土師質土器等		
SK1011	1区 W-14	90	47	43	不整楕円形	土師質土器等		
SK1013	1区 Y-14	125	50	25	隅丸方形	土師質土器等		
SK1019	2区 V-16・17	173	141	57	楕円形	土師質土器等		
SK1022	2区 V-17	155	106	18	隅丸方形	土師質土器、瓦器等		
SK1023	2区 X 18	(98)	70	10	不整方形	土師質土器等		
SK1030	2区 V 18	(70)	60	12	小判形	土師質土器		
SK1031	2区 Z 19	157	80	14	不整方形	土師質土器、瓦器等	土壙墓	188

遺構名	出土地点	規模(cm) 長軸	短軸	深さ	平面形	出土遺物	特徴・備考	挿図番号
SK1037	3区 Q-18	121	58	20	長方形	結晶片岩等	土壙墓	
SK1041	3区 R-20	173	59	15	隅丸方形	結晶片岩等	土壙墓	
SK1042	3区 R-20	179	51	20	隅丸方形	土師質土器等	土壙墓	
SK1043	3区 R-21	166	96	22	長方形	土師質土器、須恵質土器等	土壙墓	
SK1048	4区 L-11	165	110		方形	瓦器	土壙墓	189
SK1053	8区 AA・AB-26・27	360	100	14	隅丸方形	土師質土器	上面削平	190
SK1056	8区 Z-26・26	265	112	45	隅丸方形	土師質土器	上面削平、土壙墓	191
SK1059	8区 Y・Z-28	172	(106)	36	不整形	土師質土器、瓦質土器等		
SK1060	8区 X-26	(140)	128	17	小判形(?)	土師質土器		
SK1078	7区 X-22	151	62	26	小判形	土師質土器等		
SK1083	7区 T・U-22	292	112	32	隅丸方形	土師質土器等		
SK1093	7区 X-19	133	112	27	不整方形	土師質土器等		192
SK1096	7区 W-19	136	100	16	楕円形	土師質土器、瓦質土器		
SK1099	7区 V-19	148	64	27	楕円形	土師質土器		
SK1106	7区 V-20	292	116	26	隅丸方形	土師質土器、瓦質土器		193
SK1155	11区 AD-18	225	130	21	小判形	土師質土器等		
SK1156	11区 AE-19	163	125	20	隅丸方形	青磁	15cm大の砂岩礫が目立つ	194
SP1007	1区 W-11	32	20	36	円形		切りあい関係から中世以降	
SP1026	1区 V-13	23	21	17	円形	土師質土器		
SP1055	2区 Y-16	27	26	10	円形	土師質土器		199
SP1058	2区 X-16	28	27	9	円形	土師質土器		
SP1072	2区 V-16	43	38	20	楕円形	土師質土器等		
SP1087	2区 W-17	22	16	15	楕円形	土師質土器		
SP1088	2区 V-17	35	34	51	不整円形	土師質土器		
SP1089	2区 V-17	51	32	14	楕円形	土師質土器		
SP1093	2区 Y-17	26	16	25	不整楕円形	土師質土器		
SP1095	2区 X-17	46	46	26	不整方形	土師質土器等		
SP1097	2区 X-17	40	28	20	楕円形	土師質土器等		

遺構名	出土地点	規模（cm）			平面形	出土遺物	特徴・備考	挿図番号
		長軸	短軸	深さ				
SP1098	2区 Y-17	24	22	13	円形	土師質土器		
SP1113	2区 Z-17	22	19	19	円形	土師質土器		199
SP1115	2区 Z-17	27	23	13	楕円形	土師質土器、瓦器等		
SP1126	2区 X-18	68	60	14	不整方形		切り合い関係から中世以降	
SP1127	2区 X-17	29	23	24	円形	土師質土器等		
SP1130	2区 W-18	30	28	20	円形	土師質土器		
SP1131	2区 V-18	68	49	9	楕円形	土師質土器		
SP1141	2区 X-18	39	27	18	楕円形	土師質土器		
SP1144	2区 X-18	48	38	38	楕円形	土師質土器		
SP1156	2区 W-18	17	15	9	円形	土師質土器		
SP1176	1区 Y-13	38	32	20	円形	須恵質土器等		
SP1178	2区 X-18	42	26	21	楕円形	土師質土器		
SP1181	2区 Y-19	36	30	36	楕円形	瓦器		195
SP1198	3区 R-19	42	23	6	長方形	土師質土器		
SP1199	3区 Q-19	26	25	13	円形	土師質土器		
SP1230	3区 R-20	32	30	16	円形	土師質土器等		
SP1238	3区 Q-20	24	20	10	円形	土師質土器		
SP1258	3区 R-21	34	21	15	長方形	土師質土器等		
SP1263	3区 T-22	30	25	6	隅丸方形	土師質土器等	上面扁平	
SP1268	3区 S-22	23	22	12	円形	土師質土器等		
SP1273	3区 S-21	32	29	37	円形	須恵質土器、石鏃	石鏃は弥生時代の項に記述	141
SP1304	8区 AA・AB-28	74	46	25	楕円形	土師質土器、石英		
SP1305	8区 AB-28	82	59	25	楕円形	土師質土器		
SP1306	8区 AA・AB-28	40	(32)	26	不整方形	土師質土器等		
SP1307	8区 AA-28・29	45	33	19	楕円形	土師質土器、陶器		
SP1310	8区 AB-29	53	38	34	楕円形	土師質土器等		
SP1342	7区 Z-23	52	46	49	楕円形	土師質土器		196
SP1448	7区 W-20	82	70	27	不整楕円形		切り合い関係から中世以降	

遺構名	出土地点	規模（cm） 長軸	短軸	深さ	平面形	出土遺物	特徴・備考	挿図番号
SP1464	7区 W-X 20	76	58	36	楕円形		切り合い関係から中世以降	
SP1485	7区 W 19	52	48	30	円形	土師質土器等		197
SP1487	7区 W 19	48	30	19	楕円形		切り合い関係から中世以降	
SP1494	7区 W 19	25	22	35	楕円形	土師質土器、瓦器		198
SP1497	7区 W 19	35	26	28	楕円形	土師質土器	砂岩根石あり	
SP1501	7区 W 18・19	80	52	18	隅丸方形	土師質土器		
SP1505	7区 V 19	54	37	13	楕円形	土師質土器		
SP1515	7区 V 19	26	22	23	円形	土師質土器等		
SP1518	7区 V 20	36	32	21	楕円形		切り合い関係から中世以降	
SP1535	7区 U 20	41	(23)	40	円形	土師質土器		199
SP1749	11区 AE-21	43	40	14	楕円形		切り合い関係から中世以降	

第7表　遺物包含層等出土遺物（旧石器・縄文時代）観察表

番号	器種	地点 層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	石材	特徴・備考
1	ナイフ形石器	7区 包含層	5.3	2.2	1.1	9.94	完存	サヌカイト	切出し型ナイフ形石器
2	横長剥片石核	7区 包含層	2.9	6.5	2.3	30.44	完存	サヌカイト	置状にちかい横長剥片石核。スクレイパーにも転用か。
3	スクレイパー	2区 Z-18 包含層	(3.7)	(2.8)	(1.1)	(11.1)	部欠損	サヌカイト	下辺、両面調整による刃部形成。
4	剥片	4区 K-12 包含層	2.0	1.6	0.3	1.31	完存(?)	チャート（灰緑色）	側辺にこまかな剥離。
5	有茎尖頭器	4区 包含層	(5.2)	(2.6)	(0.6)	(8.15)	先端他欠損	サヌカイト	
6	有茎尖頭器	4区 包含層	(3.3)	1.9	0.4	(3.26)	先端欠損	サヌカイト	
7	尖頭器(?)	包含層	(2.9)	1.3	0.3	(1.73)	先端・基部欠損	チャート（乳白色）	
8	尖頭器(?)	4区 K 12 包含層	(4.3)	1.5	0.5	(2.98)	先端・基部欠損	サヌカイト	
9	石鏃	4区 K-12 包含層	(2.2)	(1.9)	0.3	(1.09)	先端・基部欠損	サヌカイト	凹基無茎。
10	石鏃	4区 K-13 包含層	(1.1)	1.4	0.3	(0.39)	先端欠損	サヌカイト	凹基無茎。

番号	器種	地点 層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存 状態	石材	特徴・備考
11	石鏃	4区 J-12 包含層	3.2	1.7	0.5	1.61	先端・真端一部欠損	サヌカイト	凹基無茎。
12	石鏃	4区 L-12 包含層	1.8	(1.5)	0.3	(0.80)	基部一部欠損	サヌカイト	平基無茎。
13	石鏃	9区 排土	1.9	1.3	0.2	(0.43)	一部欠損	チャート (緑灰色)	平基無茎。

第8表　SB1001　出土遺物観察表（SB1001は掘削時に4分割、北西A、南西B、北東C、南東Dとする）

番号	器種	地点 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
14	弥生土器 壺A,a	D 表土	口径18.9	聞き気味にたちあがる頸部から、ゆるやかに屈曲して外反する口縁部。 口縁端部はわずかに肥厚させ、端面を凹面に仕上げる。端面にはヘラ状工具の断続によると思われる刻目を施す。	口縁部は内外面ともヨコナデ。 頸部はタテ方向ナデ。	1～3mm 大砂粒含 石英 結晶片岩	橙	
15	弥生土器 壺A,a	表土	口径18.3	大きく外反する口縁部。 口縁端部は上下に拡張し端面は平坦におさめる。 端面にヘラ描きの斜格子文を施す。	端面をのぞく内外面ヨコナデ。	1～2mm 大砂粒含 結晶片岩	にぶい橙	
16	弥生土器 壺A,a	A 表土	口径16.4	大きく外反する口縁部。端部は肥厚し端面は平坦におさめる。 端面にはヘラ(?)によるものか、細い斜格子文を施す。	口縁部内外面ともにヨコナデ。	1mm大砂粒少量含 石英 結晶片岩	褐灰	
17	弥生土器 壺A	B 表土	底径5.0 体部最大径 11.9	底面は平底を呈す。 体部は内彎してたちあがり、最大径部分の張る算盤玉形をなす。 頸部はやや聞き気味に直立し、さらにゆるやかに外反する口縁部につづく。	口縁部内外面はヨコナデ。 頸部外面はタテハケ。 口縁部内面はナデ。 体部外面は剥離のため不明。内面一部ハケのような線条痕が観察できる。	1～3mm 大砂粒少量含 石英 結晶片岩	橙	
18	弥生土器 壺	D 表土	底径6.8 体部最大径 15.7	底面は基本的に平坦だが、部分的にわずかに凸台状の上げ底となる。 体部は内彎して外方にたちあがり、球形をなす。	内外面とも剥離のため不明。 内面は、ユビオサエ、ユビナデ痕のこす。	1～8mm 大砂粒含 石英 結晶片岩	橙	
19	弥生土器 壺	B 表土	底径6.9	底面は平底を呈す。 体部はわずかにくびれたのち内彎気味に外方にたちあがる。	体部外面はユビナデ。わずかに横斑をのこす。 底面はナデ。 体部内面は、ナデ。ユビオサエ痕をのこす。	0.5～3mm大砂粒含 チャート 石英	(内)褐灰 (外) にぶい黄橙	
20	弥生土器 壺	表土	底径5.3	底面は上げ底を呈す。 体部は内彎して大きく外方にたちあがる。	体部外面は剥離のため不明。 底面はナデ。 体部内面はユビナデ。	1～8mm 大砂粒含 石英 結晶片岩	(内) にぶい黄褐 (外)橙	
21	弥生土器 壺A,a	表土	口径25.4	内傾する体部から「く」の字状に屈曲して外反する口縁部をもつ。 口縁部外面は内彎し、端面との境があまい。 口縁端部はやや上方に拡張。	口縁部内外面ヨコナデ。 屈曲部外面には、やや強いヨコナデが入る。 体部は内外面ともナデ。	1～4mm 大砂粒含 石英 チャート	灰白	

番号	器　種	地点 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
22	弥生土器 甕A_1ハ	畦 覆土	口径22.2	内傾する体部から「く」の字状に屈曲して外反する口縁をもつ。 口縁端部は下(外)方に拡張し、上端わずかにつまみあげる。	口縁部内外面ヨコナデ。 端面は斉一でないナデ。 屈曲部内外面強いヨコナデ。 体部は内外面タテ方向ナデ。	1～2mm 大砂粒含 石英 雲母	橙	
23	弥生土器 甕B_1イ	床面	口径17.2	内彎してたちあがる体部から屈曲して外反する短い口縁部をもつ。 口縁端部は平坦におさめる。	内外面とも剥離激しいが、体部外面はタテハケ内面は左上りナナメハケの痕跡をわずかにのこす。	0.5～2mm大砂粒含 石英 結晶片岩	(内) にぶい黄橙 (外)橙	
24	弥生土器 甕A_1ロ	D 覆土	口径17.9	内傾する体部から「く」の字状に屈曲して外反する口縁部をもつ。 口縁端部は上方に拡張し、端面は平坦におさめる。	口縁部および体部上端内外面ヨコナデ。 体部外面はタテハケ、内面はナデ。	0.5～1mm大砂粒含 石英 結晶片岩	浅黄橙	
25	弥生土器 鉢A	A～C間 覆土	口径16.3	内彎気味に外方にたちあがる体部から、屈曲して外反する口縁部をもつ。 口縁端部はまるくおさめる。	内外面ともにナデ。	1～3mm 大砂粒含 結晶片岩	橙	
26	弥生土器 鉢A	B 覆土	口径20.2 底径6.5 脚台部径7.4 器高11.4	内傾する短い脚台を有す。 体部は内彎して、大きく外方にたちあがり、半球形をなす。短い口縁部はさらに屈曲して外反する。 口縁端部はまるくおさめる。	口縁部は内外面ともにヨコナデ。 体部脚台部外面はナデ。 脚台部内もナデ。 体部内面ナデ。	1～3mm 大砂粒含 石英 結晶片岩	(内)黒褐 (外)赤	
27	弥生土器 鉢A	D 覆土	口径16.8 底径7.0 器高10.6	底面は平底を呈す。 体部は内彎して外方にたちあがる。 短い口縁部は屈曲して外反する口縁端部はまるくおさめる。	口縁部は内外面ともにヨコナデ。 体部外面は大きく剥離した部分が多いが、残存部分では、上半はタテハケ、下半はタテヘラミガキが観察できる。内面は上半ヨコヘラミガキ、下半右上りナナメヘラミガキの観察できる部分があるが、基本的には、上端ヨコ方向のち全面タテ方向のていねいなナデで仕上げる。	1～1.5mm大砂粒含 石英 結晶片岩	(内)灰褐 (外)赤褐	
28	弥生土器 鉢B	覆土	口径19.8	わずかに内彎気味に直立する体部。 口縁部はわずかに肥厚し、上端面は凹面に仕上げる。	口縁部内外面ともにヨコナデ。 体部外面はタテハケのちナデ。 内面はヨコハケのちナデ。	0.5～2mm大砂粒含 石英 絹雲母	にぶい橙	
29	弥生土器 鉢(?)	D 覆土	底径9.5	底面は高台上の上げ底を呈す。 体部は内彎気味にやや外方にたちあがる。	体部外面はタテヘラミガキ、底部外面はヘラミガキのちヨコナデ。 底面はユビオサエ、ユビナデ。 内面はユビナデ。	1～2mm 大砂粒含 石英 結晶片岩	(内)にぶい赤褐 (外)にぶい橙	
30	弥生土器 高杯	A 覆土		脚台部は、外彎気味に内傾し、中実の短い脚柱はほぼ直立し、器体部に接続する。	脚台・脚柱部外面および器体部外面はタテヘラミガキ。 脚台部内面は、ユビナデ。 器体部内面は、ていねいなナデ。	1～3mm 大砂粒含 石英 結晶片岩	橙	

番号	器種	地点 層位	長軸 (cm)	短軸 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	胎土	色調	備考
31	土製円板	D 覆土	3.5	3.2	0.5	0.3	4.48	1～2mm大 砂粒含	褐色	未製品。孔、貫通せず。 完存。

番号	器種	地点 層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存 状態	石材	特徴・備考
32	石鏃	A 覆土	2.1	1.3	0.4	0.94	完存	サヌカイト	平基無茎。
33	石鏃	炉 覆土	2.4	1.2	0.3	0.69	完存	サヌカイト	凹基無茎。
34	石鏃	覆土	(2.0)	1.2	0.4	(1.03)	先端欠損	サヌカイト	凹基無茎。
35	石鏃	D・炉 覆土	3.5	2.3	0.5	4.74	完存	サヌカイト	接合品。凹基無茎。
36	石鏃	覆土	(2.3)	1.8	0.5	(1.67)	先端欠損	サヌカイト	凹基無茎。
37	石鏃(?)	P 13 覆土	(3.3)	(2.1)	0.4	(3.18)	先端基部 欠損	サヌカイト	凹基無茎。
38	石鏃	炉上面	2.1	1.3	0.4	1.17	完存	サヌカイト	基部未調整
39	石鏃	P 13 覆土	(2.0)	(1.4)	(0.3)	(0.74)	基部欠損	サヌカイト	
40	石鏃	炉 覆土	(2.0)	(1.4)	(0.4)	(1.28)	基部欠損	サヌカイト	
41	石鏃	覆土	(2.4)	(2.3)	(0.3)	(1.21)	基部欠損	サヌカイト	
42	石錐	覆土	(2.1)	(0.6)	(0.3)	(0.39)	基部欠損	サヌカイト	
43	石槍	D 覆土	(4.6)	(2.3)	(1.1)	(12.39)	先端基部 欠損	サヌカイト	両極打法によると思われる階段状の剥離で構成される。
44	楔形石器	覆土	4.4	2.4	1.1	17.30	—	サヌカイト	左右辺は裁断面。上下辺は両極打法による。上辺周側に、長軸方向の擦痕。下辺端磨滅。
45	楔形石器	覆土	2.6	2.2	0.7	476	—	サヌカイト	上端下辺は両極打法による。 左辺、右上辺は裁断面。
46	打製石庖丁	覆土	9.6	3.2	0.8	28.17	完存(?)	結晶片岩 (石英片岩)	下辺に刃部形成。抉りなし。
47	打製石庖丁	A 覆土	10.2	4.7	0.7	(36.37)	一部欠損	結晶片岩 (石英片岩)	片面自然面。両端に抉りあり。
48	打製石庖丁	覆土	(8.5)	4.6	0.9	(41.55)	一部欠損	結晶片岩 (紅簾石片岩)	両面に自然面のこす。端部抉りあり。
49	打製石庖丁	A 覆土	(4.3)	(4.1)	(0.7)	(22.0)	半分欠損	結晶片岩 (紅簾石片岩)	端部抉りあり。
50	柱状片刃石斧	A 覆土	(13.2)	2.0	4.25	(246)	刃部欠損	結晶片岩 (緑色片岩)	表、裏面を中心に研磨。両側面は平滑な剥離面をわずかに研磨。
51	柱状片刃石斧	A 覆土	(3.7)	(0.8)	(2.3)	(9.89)	刃部破片	結晶片岩 (黒色片岩)	全面丁寧に研磨。
52	柱状片刃石斧	D 集石 底面	17.8	2.3	4.25	398	完存	結晶片岩 (緑色片岩)	未製品 粗成形ののち、表裏側に敲状の敲打痕。 表面の一部、裏面は大部分を研磨。 左側面も平分程度を研磨。

番号	器種	地点 層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存 状態	石材	特徴・備考
53	柱状片刃石斧	A 表土	(14.2)	2.4	(2.4)	(160.0)	欠損	結晶片岩 (緑色片岩)	残存面の3面については研磨を施しているが、十分ではなく、剝離面、自然面のそのままのこるところもある。
54	小形扁平石斧	7区 表土	4.0	2.5	0.6	8.63	完存	結晶片岩 (緑色片岩)	未製品。 縁辺敲打による成形。左側辺のみ研磨。
55	小型片柱状石斧	A 表土	7.2	2.0	1.0	23.75	一部欠損 (?)	結晶片岩 (緑色片岩)	扁平な棒状の自然礫をそのまま利用。 刃部のみ研磨により形成。 基部の一部研磨。
56	叩石	D 表土	14.7	7.2	3.4	650	完存	結晶片岩 (緑色片岩)	縁辺、とくに両端部に強い打撃による剝離あり。中央に弱い敲打痕。 表面右側自然面、わずかな研磨。 扁平・棒状の自然礫を利用している。
57	叩石	A 表土	8.6	6.1	4.2	332	完存	ハンレイ岩	円礫を利用。縁辺を中心に集中的な粒状の敲打痕。
58	砥石	表土	(12.3)	(11.3)	(8.8)	(1560)	欠損	砂岩	被熱。 自然面の2面を砥面とする。 表面わずかに凹面をなす。 裏面は弱い砥面、筋状の深い敲打痕あり。
59	砥石	D 集石	(14.5)	(10.5)	(4.6)	(760)	欠損	砂岩	被熱。 3面に砥面。裏面もごく一部に砥面をもつ。3面については入念に砥ぎ込み、表面と右面については凹面を呈す。
60	砥石	床面	28.0	9.3	9.1	3920	完存	砂岩	被熱。 4面を砥面とする。4面ともに入念に砥ぎ込み、凹面を呈す。
61	砥石	床面	29.9	24.5	7.6	6700	完存	砂岩	被熱。 自然面の両面を砥面とする。また筋状、粒状の敲打痕を両面ともに一部のこす。
62	砥石	集石 床面	12.8	8.1	6.1	(845)	一部欠損	砂岩	被熱。 自然面、打割面のうち3面を砥面とする。
63	砥石	集石 床面	19.0	13.4	7.1	(2460)	一部欠損	砂岩	被熱。 自然面の2面を砥面とする。 2面とも砥ぎ込み、凹面を呈す。
64	砥石	集石 床面	28.1	27.6	15.2	1750	完存	砂岩	被熱。 自然面2面を砥面、縁辺に粒状の敲打痕多数。
65	砥石	表土	21.0	9.9	9.7	(2800)	欠損	砂岩	被熱。 自然面の3面を砥面とする。
66	砥石	集石 床面	36.7	22.6	13.2	(1510)	一部欠損	砂岩	被熱。 自然面の表裏2面に砥面。右側面にもごく弱い砥面。筋状および粒状の敲打痕。
67	砥石	表土	20.5	11.6	8.8	2460	完存(?)	砂岩	被熱。 自然面2面、打割面2面に砥面。 いずれも入念に砥ぎ、凹面をなす。

第9表　SB1002　出土遺物観察表

番号	器種	地点 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
68	弥生土器 Beg	P 14 覆土	頸部径10.5	内彎する体部から、直立する頸部がゆるやかに外反する。 頸部に沈線で区画された、横位鋸歯状文3条確認できる。	文様帯以外の部分は剥離激しく不明。 頸部・体部の境界には、内面にしぼり痕のこす。	1～4㎜ 大砂粒含 結晶片岩 石英	(内)橙 (外) 明赤褐	

番号	器種	地点 層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存 状態	石材	特徴・備考
69	石鏃	炉 覆土	3.0	1.2	0.2	0.90	完存	サヌカイト	円基無茎。
70	石鏃	P 4 覆土	2.0	1.5	0.2	0.51	脚端 一部欠損	サヌカイト	凹基無茎。

第10表　SB1004　出土遺物観察表

番号	器種	地点 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
71	弥生土器 壺A,b	覆土	口径18.8	大きく外反する口縁部。 口縁端部はわずかに上下に拡張し、端面は平坦におさめる。 口縁部上面に2条単位の櫛描斜格子文を施す。	内外面ともにヨコナデによる。	1～3㎜ 大砂粒含 石英 結晶片岩	(内)にぶい橙 (外)にぶい黄褐色	
72	弥生土器 壺A,b	覆土	口径14.6	大きく外反する口縁部。 口縁端部は肥厚させ、上方に拡張する。 端面には2条の凹線を施す。 口縁部上面にヘラ描きの斜格子文を施す。	内外面ともにヨコナデ。	1～2㎜ 大砂粒含 石英 黒雲母	にぶい橙	搬入土器 (?) (讃岐)
73	弥生土器 壺F	覆土	口径14.8	直線的に外反する口縁部。 頸部に断面三角形の突帯を貼りつけ、刻目を入れる。	内外面ともにヨコナデ。	1～2㎜ 大砂粒含 石英 長石	暗赤褐	搬入土器 (讃岐)
74	弥生土器 壺E",d	覆土	口径10.0	ほぼ直立する口頸部。 口縁部はやや肥厚させ、上端を端面とし、平坦におさめる。 頸部に突帯を貼り付け、ヘラ状工具による刻目を施す。	口頸部外側は剥離のため不明。 内面はヨコナデ。	1～4㎜ 大砂粒多く含 石英 結晶片岩	(内)にぶい黄橙 (外)浅黄橙	
75	弥生土器 壺A;a	覆土	口径16.8	直立する短い頸部から直角に、屈曲して外反する短い口縁部をもつ。 口縁部は部厚く、端面は、平坦におさめて、ヘラ状工具による刻目を施す。	内外面ともにヨコナデ。	1～4㎜ 大砂粒含	黄橙	
76	弥生土器 壺	覆土		内彎する体部上半。 上から櫛描直線文と円弧文を施す。	外面板ナデ 内面は剥離のため不明。	1～4㎜ 大砂粒多く含 石英 結晶片岩	橙	
77	弥生土器 壺	覆土	体部最大径 18.15	内彎する体部最大径付近。 最大径部分やや上部にハケ工具による圧痕文を施す。	体部上半はタテハケ。 最大径付近は、ヨコハケとヨコヘラミガキ。体部内面は、最大径部分にユビオサエ痕を多数残し、タテハケによって仕上げる。	1～3㎜ 大砂粒含 石英 長石	(内)灰褐 (外) にぶい赤褐	搬入土器 (?) (讃岐) 黒斑あり

番号	器種	地点 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
78	弥生土器 壺(?)	P-1 覆土	底径5.9	底面は平底を呈す。 底部端は、まるくおさめる。 体部は、直線的に外方にたちあがる。	体部外面および底面はナデ。 内面は、ユビオサエ痕をのこしながら、ハケ、およびナデで仕上げている。	1～2㎜ 大砂粒含 泥岩 絹雲母	(内)褐灰 (外)橙	
79	弥生土器 壺(?)	P 5 覆土	底径10.9	底面は上げ底を呈す。 体部は内彎気味におおきく外方にたちあがる。	内外面とも剥離のため不明。	1～4㎜ 大砂粒含 石英	橙	
80	弥生土器 甕A, B	覆土	口径15.4	内彎する体部から屈曲して大きく外反するB縁部をもつ。 口縁端部は平坦におさめ少し上方に拡張。	口縁部内外面および体部外面はヨコナデ。 体部内面にヨコハケの痕跡のこす。	1～2㎜ 大砂粒含 石英 長石	暗赤褐	搬入土器 (?) (讃岐)
81	弥生土器 甕	覆土	底径5.2	底面は平底を呈す。 体部はわずかに外彎気味に、外方にたちあがる。	体部外面はタテヘラミガキ、底面はユビナデ。 内面はナデ。	1～2㎜ 大砂粒含 石英	(内)灰黄褐 (外)灰褐	
82	弥生土器 壺	覆土	底径6.0	底面はわずかに上げ底を呈し、底部端は外方に拡張する。 体部は直線的にわずかに外方にたちあがる。	内外面ともにナデによる仕上げ。	1～3㎜ 大砂粒含 石英 結晶片岩	(内)黒褐 (外) にぶい橙	
83	弥生土器 鉢(?)	覆土	底径6.8	底面は上げ底を呈し、底部端は外方に拡張する。	底面および、内面はていねいなナデ。 底面外面はヨコハケ痕をのこし、ユビオサエ痕も多数残す。	1～2㎜ 大砂粒含 石英 絹雲母	にぶい橙	

番号	器種	地点 層位	長軸 (cm)	短軸 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	胎土	色調	備考・特徴等
84	土製紡錘車	覆土	3.8	3.4	0.5	0.6	6.68	1～2㎜大 砂粒含 石英	(内)黒 (外) にぶい橙	未製品 土器片利用。 内面より孔を穿つ途中のもの。
85	土製紡錘車	覆土	4.5	3.7	0.5	0.45	9.37	1～4㎜大 砂粒含 石英 結晶片岩	(内)明褐色 (外) 灰オリーブ	土器片利用。

番号	器種	地点 層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存 状態	石材	特徴・備考
86	石鏃	覆土	2.5	2.0	0.4	1.53	完存	サヌカイト	平基無茎。
87	石鏃	覆土	2.8	2.0	0.55	2.43	完存	サヌカイト	平基無茎。
88	石鏃	覆土	(2.9)	1.7	0.4	(1.51)	先端欠損	サヌカイト	凹基無茎。
89	石鏃	覆土	(3.1)	(1.3)	0.4	(1.60)	先端・脚端欠損	サヌカイト	凹基無茎。
90	石鏃	覆土	2.4	1.9	0.4	2.22	完存	サヌカイト	凹基無茎。
91	石鏃	覆土	2.0	1.9	0.4	1.51	完存	サヌカイト	平基無茎。
92	石鏃	覆土	1.9	1.4	0.4	0.74	完存	サヌカイト	凹基無茎。
93	石鏃	覆土	(2.5)	2.2	0.5	(4.26)	先端欠損	サヌカイト	凹基無茎。

番号	器種	地点 層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存 状態	石材	特徴・備考
94	石鏃	表土	(3.0)	1.3	0.3	(1.89)	先端欠損	サヌカイト	円基無茎。側縁内彎
95	石鏃	表土	3.3	1.3	0.3	(1.35)	一部欠損	サヌカイト	円基無茎。側縁内彎
96	石鏃	表土	(3.6)	1.5	0.5	(1.85)	先端欠損	サヌカイト	円基無茎。側縁内彎
97	石鏃	表土	2.1	1.2	0.4	1.0	完存	サヌカイト	円基無茎。
98	石鏃	表土	2.7	1.7	0.5	(2.33)	一部欠損	サヌカイト	平基無茎。
99	石鏃	表土	1.7	1.0	0.3	0.44	完存	サヌカイト	円基無茎。
100	石鏃	表土	(2.2)	1.7	0.3	(1.08)	基部欠損	サヌカイト	一部未調整。
101	石鏃	表土	4.4	2.1	0.5	6.16	完存	サヌカイト	未製品。 左辺未調整。
102	石鏃	表土	(2.3)	(1.8)	0.3	(1.81)	先端欠損	サヌカイト	平基無茎。
103	石鏃	表土	4.0	2.3	0.5	3.14	完存	サヌカイト	平基有茎。
104	石鏃	表土	2.7	1.1	0.5	1.44	完存	サヌカイト	凸基有茎。
105	石鏃	表土	3.0	1.5	0.4	1.88	完存	サヌカイト	凸基有茎。
106	石鏃	表土	2.3	1.4	0.3	0.96	完存(?)	サヌカイト	未製品 左辺および基部は未調整。
107	石鏃	表土	(2.8)	1.5	0.4	(1.90)	先端欠損 (?)	サヌカイト	未製品
108	石鏃	表土	(2.2)	1.5	0.5	(1.37)	先端基部 欠損	サヌカイト	
109	石鏃	表土	(2.0)	1.5	0.4	(1.40)	先端欠損 (?)	サヌカイト	未製品(?)
110	石鏃	表土	(1.8)	(1.1)	(0.4)	(0.61)	基部欠損	サヌカイト	
111	石鏃	表土	(1.5)	(1.2)	(0.2)	(0.30)	基部欠損	サヌカイト	
112	石鏃	表土	(1.6)	(1.3)	(0.3)	(0.43)	基部欠損	サヌカイト	
113	石鏃	表土	(1.6)	(1.4)	(0.3)	(0.48)	先端・基 部欠損	サヌカイト	
114	石鏃	表土	2.0	1.4	0.2	0.70	完存(?)	サヌカイト	未製品(?)
115	石錐	表土	(3.8)	1.1 〈0.4〉	0.6	3.32	錐部先端 欠損	サヌカイト	棒状
116	石錐	表土	(3.2) 〈2.0〉	2.4 〈0.8〉	0.5 〈0.6〉	(2.32)	錐部先端 欠損	サヌカイト	
117	石錐	表土	(2.7) 〈0.7〉	2.2 〈0.6〉	0.45 〈0.3〉	2.51	錐部欠損	サヌカイト	
118	石錐	表土	2.3	2.7	0.9	4.96	完存	サヌカイト	錐部は、表面からの片面調整
119	石錐	表土	(1.9)	2.2	0.7	(2.73)	錐部欠損	サヌカイト	錐部欠損
120	石錐	表土	(2.1)	(0.7)	(0.4)	(0.36)	基部欠損	サヌカイト	断面三角形の主要剥離面側に片面調整 による錐部形成
121	石錐	表土	(2.0)	(0.5)	(0.3)	(0.30)	基部欠損	サヌカイト	両面調整による錐部形成。

番号	器種	地点 層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存 状態	石材	特徴・備考
122	楔形石器	表土	2.6	1.6	0.9	3.24	—	サヌカイト	左右辺は裁断面。 上端と下辺は両極打法による。
123	楔形石器	表土	2.3	1.2	0.6	2.18	—	サヌカイト	左右辺は裁断面。 上下辺は両極打法による。
124	楔形石器	表土	3.7	1.4	1.0	5.11	—	サヌカイト	左右辺は裁断面。下辺は両極打法による。 両面に擦痕が観察できる。
125	楔形石器	表土	2.1	1.1	0.7	2.19	—	サヌカイト	左右辺は裁断面。 上下辺は両極打法による。
126	楔形石器	表土	3.0	1.9	0.75	4.57	—	サヌカイト	左右辺は裁断面。 上下辺は両極打法による。
127	楔形石器	表土	2.4	1.1	1.1	2.65	—	サヌカイト	左右辺および上辺は裁断面。 下辺は両極打法による。
128	楔形石器	表土	1.8	1.1	0.45	1.05	—	サヌカイト	左右辺は裁断面、上下辺両極打法による。
129	楔形石器	表土	1.2	2.5	0.6	2.40	—	サヌカイト	上辺、左右辺は裁断面。 下辺、両極打法による刃部形成。
130	スクレイパー	表土	2.5	2.4	0.5	3.27	完存	サヌカイト	各辺とも、両面調整による刃部形成。
131	スクレイパー	表土	3.4	2.9	1.2	9.43	完存	サヌカイト	下辺は、一部両極打法による刃部形成、一部は剥片縁辺をそのまま利用。右辺に両極打法による刃部(?)形成。
132	スクレイパー	表土	1.9	3.0	0.6	4.30	完存(?)	サヌカイト	下辺から右辺にかけて、両極打法による刃部形成。上辺、左辺は裁断面。
133	スクレイパー	表土	2.2	2.8	0.6	4.43	完存(?)	サヌカイト	右辺および下辺に両極打法による刃部形成。
134	スクレイパー	表土	1.2	2.5	0.6	2.40	完存(?)	サヌカイト	上辺、左右辺は裁断面。 下辺、両極打法による刃部形成。
135	スクレイパー	表土	5.1	3.7	1.0	17.50	完存(?)	サヌカイト	下辺に両極打法による刃部形成。 他の辺は裁断面。
136	石核	P-1横 床面	9.2	10.2	1.1	104	—	サヌカイト	
137	石核	P-1横 床面	7.2	11.4	1.0	71.4	—	サヌカイト	
138	打製石鏃丁	表土	4.4	11.1	0.9	(64)	一部欠損	結晶片岩 (石英片岩)	両端抉りあり。
139	打製石鏃丁	表土	9.9	5.2	1.3	89	完存	結晶片岩 (石英片岩)	左端は抉りあり。右端も、抉りを意識した剥離あり。
140	打製石鏃丁	表土	11	4.3	0.9	59	完存	結晶片岩 (石英片岩)	両端抉りあり。
141	打製石鏃丁	表土	(10.6)	(4.7)	(0.7)	(39.0)	一部欠損	結晶片岩 (紅簾石片岩)	抉りなし。 片面自然面。刃部使用痕あり。
142	打製石鏃丁	表土	(5.7)	(6.2)	(1.3)	(58)	欠損	結晶片岩 (石英片岩)	抉りなし。
143	打製石鏃丁	表土	(5.8)	(4.5)	(0.9)	(34.6)	欠損	結晶片岩 (石英片岩)	抉りなし。

番号	器種	地点 層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存 状態	石材	特徴・備考
144	打製石庖丁	覆土	(4.6)	(3.3)	(0.8)	(18)	欠損	結晶片岩 (石英片岩)	
145	小型扁平石斧	覆土	1.7	3.3	0.4	4.53	完存	結晶片岩 (緑色片岩)	刃部と片面のみ研磨。刃部は剥離による成形。
146	小型扁平石斧	覆土	2.8	2.1	0.4	4.26	完存	サヌカイト	研磨による刃部形成。 刃部を中心とする部分のみ剥離。
147	小型扁平石斧	覆土	4.15	1.9	0.35	5.87	完存	結晶片岩 (緑色片岩)	縁辺、敲打による成形。刃部のみ研磨。
148	小型方柱状片刃石斧	覆土	(4.3)	0.7	(1.3)	(7.70)	基部欠損	結晶片岩 (黒色片岩)	柱状の石材の表面裏面のみ研磨して、刃部形成。両側辺ともに自然面。
149	扁平片刃石斧	覆土	5.3	3.6	0.6	22	完存(?)	結晶片岩 (石英片岩)	刃部を中心に研磨。
150	扁平片刃石斧	覆土	6.1	2.95	1.1	(42)	一部欠損	結晶片岩 (緑色片岩)	ほぼ全面研磨により仕上げる。
151	扁平片刃石斧	覆土	(10.8)	(4.2)	(1.3)	(100.0)	欠損	結晶片岩 (石英片岩)	かなりの加熱をうけ、表面赤銅色に変色
152	叩石	覆土	11.2	5.3	3.8	378	完存	結晶片岩 (緑色片岩)	棒状自然礫、下端は、長軸方向の強い打撃による敲打痕、中央上、縦状の敲打痕。裏面の一部研磨。
153	叩石	覆土	14.85	2.6	2.2	143	完存	結晶片岩 (石英片岩)	棒状の自然礫の一端で強く敲打
154	砥石	覆土	20.3	6.0	3.9	850	完存	砂岩	方柱状の自然石をもちい、3面に砥面をもつ。表面、裏面については、縦割は、2～3のまとまりに分割される。
155	砥石	覆土	17.9	8.9	2.3	600	一部欠損	結晶片岩 (緑色片岩)	自然面の一面を砥面とする。
156	砥石	覆土	17.6	16.0	6.0	2100	完存	砂岩	自然面の一面を砥面とする。 裏面にも一部砥いだ痕跡あり。
157	砥石	覆土	27.9	16.7	11.0	6900	完存(?)	砂岩	一部被熱。打割面を含む4面を砥面とする。
158	砥石	覆土	19.9	7.8	5.6	1370	欠損	砂岩	被熱。自然面を砥面とする。

第11表　SB1005　出土遺物観察表

番号	器種	地点 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
159	弥生土器 甕	覆土		直立する頸部 横に2条の粘帯を貼りつけた後、縦に粘帯を貼りつけ、格子文を形成する。	剥離のため不明。	1～7㎜ 大砂粒含 石英	黄橙	
160	弥生土器 台付鉢(?) (脚台部)	炉 覆土	脚台径9.3	平坦におさめた脚端から直線的に内傾して、器体と接合する。 外面脚部に一角形の貫通しない透かしを巡らす。	内外面とも剥離のため不明。 器体部内面は、ていねいなナデ。円板充填法か。	1～3㎜ 大砂粒含	(内)灰褐 (外)灰白	
161	弥生土器 鉢B$_3$	炉 覆土	口径27.0	体部はやや肩を張るかたちで内湾し、口縁部を肥厚させる。 口縁部下に4条の凹線を施す。	体部外面凹線文周辺はナデ。 肩下は右上りハケとナデによる。 内面は板ナデ。	1～3㎜ 大砂粒含	(内)褐灰 (外)橙	

番号	器種	地点 層位	長軸 (cm)	短軸 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	胎土	色調	特徴・備考
162	土製紡錘車	炉 覆土	3.8	3.7	0.55	0.5	8.97	0.5mm大砂粒含 雲母	(内)灰褐 (外)明赤褐	土器片利用。 表(外)面にハケ調整痕を残す。

番号	器種	地点 層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存 状態	石材	特徴・備考
163	柱状片刃石斧	炉 覆土	8.5	2.4	3.0	132	完存(?)	結晶片岩 (緑色片岩)	4面研磨による整形および刃部形成。 側面については自然面をわずかに磨きこんだ程度と考えられ、縁辺部にのこる敲打痕は、粗成形時のものと考えられる。 基部欠損面については非加工。

第12表　SB1006　出土遺物観察表

番号	器種	地点 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
164	弥生土器 壺A₁	覆土	口径14.3	大きく外反する口縁部。 端部は下に拡張し、端面はわずかに凹面に仕上げる。	内外面ともヨコナデ。	1～2mm 大砂粒含 石英	(内)オリーブ黒 (外)赤褐	
165	弥生土器 壺A₁a	集石	口径12.4	内立する頸部からゆるやかに外反する口縁部。 口縁端部はやや下方に拡張し、端面は平坦におさめ、凹目を施す。	内外面とも剥離のため不明。	0.5～3mm大砂粒含	(内)明黄褐 (外)褐	
166	弥生土器 甕	覆土	底径5.1	底面は平底を呈す。 体部は、外彎気味にくびれて外方にたちあがる。	体部外面タテヘラミガキ。 内面にナデ。	1～2mm 大砂粒含 石英 雲母	(内)灰褐 (外) にぶい橙	
167	弥生土器 壺(?)	炉 覆土	底径7.2	底面はわずかに上げ底を呈す。 体部はくびれて、内彎気味に外方へたちあがる。	内外面とも剥離のため不明。	1～5mm 大砂粒含 結晶片岩	にぶい赤褐	

番号	器種	地点 層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存 状態	石材	特徴・備考
168	石錘	P10 覆土	1.9	1.4	0.3	0.73	完存(?)	サヌカイト	未製品？
169	石錘	覆土	(2.5)	(1.5)	(0.5)	(1.53)	先端欠損	サヌカイト	平基無茎。
170	楔形石器	覆土	2.1	3.3	0.55	5.26	——	サヌカイト	下辺をのぞく3辺は破断面。 下辺に両極打法(?)による刃部形成。
171	打製石庖丁	覆土	(3.8)	(2.8)	(0.7)	(7)	欠損	結晶片岩 (石英片岩)	
172	叩石	覆土	7.6	11.1	4.7	650	完存	ハンレイ岩	楕円形自然礫をそのまま利用。 両面および側縁辺に、筋状、粒状の敲打痕を多数のこす。
173	砥石	集石	31.5	24.9	8.5	9760	完存	砂岩	被熱。 自然面の一面を弱い砥面とする。 一部に筋状の敲打痕。

第13表　SB1006 P－8　出土遺物観察表

番号	器種	地点層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
174	弥生土器 壺A1	覆土	口径13.8 体部最大径22.1	断面楕円形の体部から屈曲して、ラッパ状にひらく口頸部をもつ。 口縁端部は平坦におさめる。	口縁部内外面はヨコナデ。 頸部内外面および体部外面はナデ。 体部内面、最大径付近上半はユビナデ。 他は横方向ナデ。	1～4㎜大砂粒多く含 結晶片岩 石英	(体部内) 褐灰 (外、頸部内面) 橙	
175	弥生土器 壺A1	覆土	口径13.2	やや窄き気味の頸部から、ゆるやかに外反する口縁部をもつ。 口縁端部は、平坦におさめる。	内外面ともにナデによるものとおもわれる。	0.5～3㎜大砂粒含 結晶片岩	灰黄	2次焼成をうけたものか、気泡多く軽石状を呈す。
176	弥生土器 甕D1	覆土	口径23.3	ゆるやかに外反する口縁部	内外面とも剥離のため不明。	1～6㎜大砂粒含 石英 結晶片岩	橙	
177	弥生土器 壺A1	覆土	口径19.4	内彎する体部から屈曲して、直立する頸部につながる。 口縁部はゆるやかに屈曲して外反する。	口縁部は内外面ともヨコナデ。 頸部は外面タテハケ、内面はヨコ方向ナデ。 体部外面は、タテハケのちナデ。内面は剥離のため不明。	1～3㎜大砂粒含 石英 結晶片岩	灰黄	
178	弥生土器 壺	覆土		内彎し、頸部につながる体部上半。	内外面とも剥離のため不明であるが、内面にユビオサエ痕をのこす。	1～3㎜大砂粒含 石英 結晶片岩	灰オリーブ	
179	弥生土器 壺	覆土	底径5.9 体部最大径20.2	底面はわずかに上げ底を呈す。 体部は内彎気味に外方にたちあがり最大径から内彎して頸部につづく。 球形に近い形態をなす。	体部外面、粗い右上りヘラミガキの部分と、ナデによる仕上げの部分がみられる。 最大径より上は剥離のため不明。底面および体部内面はナデ。	1～10㎜大砂粒多く含 石英 チャート 結晶片岩	(内) にぶい黄橙 (外)橙	
180	弥生土器 壺	覆土	底径19.0	底面は平底を呈す。 体部はくびれて、直線的に外方へたちあがる。	体部外面板ナデ。底面はナデ。内面はナデでユビオサエ痕ものこす。	1～5㎜大砂粒含 石英 結晶片岩	(内)橙 (外) にぶい橙	
181	弥生土器 壺(?)	覆土	底径5.5	底面はわずかに丸底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあがる。	内外面とも剥離のため不明。	1～5㎜大砂粒含 結晶片岩 石英	浅黄橙	
182	弥生土器 壺	覆土	底径7.0	底面はげ底を呈す。 体部は直線的に大きく外方にたちあがる。	体部外面板ナデ。 底面および体部内面はナデ。 底部内面はユビナデ。	1～4㎜大砂粒含	(外)橙 (内)灰黄褐	
183	弥生土器 壺	覆土	底径8.6	底面は平底を呈す。 体部は、わずかに内彎気味に外方にたちあがる。	体部外面はタテヘラミガキ底部外面ユビオサエ痕強くのこす。 底面はユビナデ。 内面は、底面にユビオサエ、他はていねいなナデ。	2～3㎜大砂粒多く含 結晶片岩 石英	浅黄橙	黒斑あり

番号	器　種	地点層位	法量(cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
184	弥生土器 鉢	覆土	底径8.5	底部は上げ底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあがる。 内面はなめらかに彎曲する。	体部、外面はナデ。 一部ていねいに仕上げられている。 内面はヨコヘラミガキ、くもの典状に施される。	1～3mm 大砂粒含	明褐	外面に、シイの実状の木の実圧痕あり。

第14表　SB1008　出土遺物観察表

番号	器　種	地点層位	法量(cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
185	弥生土器 壺A_1	炉 覆土	口径17.1	やや外方に傾く頸部から、ゆるやかに屈曲して外反する口縁部をもつ。 口縁端部は損傷が激しいがほぼ平坦におさめているものと考えられる。	口縁部外面は、タテハケのちヨコナデ。頸部はタテハケをよくのこす部分と、板ナデにより平滑に仕上げられている部分がある。 内面は剥離激しく調整不明。	1～8mm 大砂粒多く含 石英 結晶片岩	(外)明赤褐 (内)黄橙	
186	弥生土器 壺D_1	炉 覆土	口径20.8	ゆるやかに外反する口縁部。 口縁端部は平坦におさめる。	口縁部外面はヨコナデ。頸部にかけてタテハケ。 口縁部内面はヨコナデ。頸部にかけてヨコハケ。	1～2mm 大砂粒含 石英 絹雲母	橙	
187	弥生土器 壺	周溝 覆土		内彎する頸部・体部。 上から櫛描直線文2条、波状文(?)を施す。	外面ナデ。 内面ユビオサエ痕多数残す。	1～3mm 大砂粒含 石英 結晶片岩	(外) にぶい橙 (内)褐灰	
188	弥生土器 壺	周溝 覆土		内彎してたちあがる体部上半。 上から櫛描波状文、直線文、円弧文を施す。	外面、タテハケ、ヨコヘラミガキ。 内面、ユビオサエ痕多数残す。	1～3mm 大砂粒含 石英 結晶片岩	赤褐	
189	弥生土器 壺	P-9 覆土	底径9.4	底面は平底を呈す。 体部はわずかに内彎気味で大きく外方にたちあがる。	体部外面、底面はナデ。 内面、剥離のため不明であるがユビオサエ痕をよく残す。体～頸部の破片多数あるが，非接合。	1～9mm 大砂粒含 石英 結晶片岩	明赤褐	
190	弥生土器 甕	P-9 覆土	底径6.1	底面わずかに上げ底を呈す。 体部はわずかに内彎気味に外方にたちあがる。	体部外面はタテヘラミガキを施すが、ヘラ頭部でおさえたような痕跡を多数のこす。 底部外面はユビナデ、底面および内面はていねいなナデ。	1～3mm 大砂粒含 結晶片岩 石英	(内)褐灰 (外)橙	
191	弥生土器 鉢(?)	周溝 覆土	底径6.1	底面は上げ底を呈す。 体部は内彎気味に大きく外方にたちあがる。	内外面ともにナデ。	1～2mm 大砂粒含 結晶片岩 石英	明赤褐	
192	弥生土器 鉢	炉 覆土	底径8.2	底面は、平底を呈す。体部は内彎して外方にたちあがる。 底部は体部より器厚がうすい。	外面は、タテハケのち板ナデ。 内面は、板ナデないしはユビナデ。	1～3mm 大砂粒含 石英 チャート	(内)黄灰 (外)橙	

番号	器　種	地点層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	遺存状態	石　材	特徴・備考
193	打製石庖丁	炉 覆土	4.4	14.2	0.8	(73)	一部欠損	結晶片岩 (石英片岩)	抉りなし。

番号	器種	地点 層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存 状態	石材	特徴・備考
194	打製石庖丁	炉 覆土	11.2	5.0	0.7	45	完存	結晶片岩 (紅簾石片岩)	半月形。抉りなし。
195	砥石	炉 覆土	9.6	7.4	4.1	(406)	一部欠損	砂岩	自然の凹線を利用。表面中央部に長楕円形の凹みあり。縁辺部のほとんどに粒状の敲打痕をのこし、敲打面を形成する。

第15表　SB1009　出土遺物観察表

番号	器種	地点 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
196	弥生土器 甕A_1ハ	覆土	口径15.4	内湾気味にたちあがる体部から、屈曲して外反する短い口縁部をもつ。 口縁端部はわずかに肥厚させ、平坦におさめる。	体部外面および口縁部はナデ。 体部内面板ナデ。 なお、接合面なく、固化不能であるが、体部外面下半はタテヘラミガキが観察できる。	1～3㎜大砂粒含石英結晶片岩	(内)橙 (外) にぶい黄橙	

番号	器種	地点 層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存 状態	石材	特徴・備考
197	スクレイパー	覆土	4.3	2.5	0.75	9.34	完存	サヌカイト	下辺は大きな剥離による刃部形成。使用による刃こぼれと思われる小さな剥離あり。 上辺は同側調整による刃部形成。
198	打製石庖丁	覆土	(5.8)	(3.1)	(0.8)	(18)	欠損	結晶片岩 (石英片岩)	両端抉りあり。

第16表　SB1010　出土遺物観察表

番号	器種	地点 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
199	弥生土器 壺A_1a	集石 覆土	口径19.6	大きく外反する口縁部。 口縁端部は肥厚させ、端面は平坦におさめる。 端面には線状の刻目を施し、頸部際に穿孔(焼成前)する。孔は2孔確認できる。	内外面ともナデ。	1～4㎜大砂粒少量含石英	にぶい黄橙	
200	弥生土器 壺A_1	覆土	口径17.3	頸部から大きく外反する口縁部。口縁部は肥厚させ、端面はやや凹面に仕上げる。	内外面ともにヨコナデ。	1～3㎜大砂粒含石英結晶片岩	にぶい橙	
201	弥生土器 壺A_1a	集石 覆土	口径17.5	外反する口縁部。 頸部を上方に拡張させ、端面は平坦におさめる。口縁部端面に刺突による刻目を施す。	内外面ともにナデ。	0.5～2㎜大砂粒含石英結晶片岩	橙	
202	弥生土器 壺D_1a	覆土	口径28.0	ゆるやかに外反する口縁部。端面は平坦におさめ、上端に刻目、頸部に羅状文を施す。	内外面ともにナデ。	1～3㎜大砂粒含石英結晶片岩	(内) にぶい黄橙 (外) にぶい橙	
203	弥生土器 壺	集石 覆土		内彎する体部から、直立気味にたちあがる頸部。 頸部下端に指頭圧痕文突帯を貼りつける。	体部内外面ナデ。	0.5～3㎜大砂粒含石英	橙	

番号	器種	地点 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
204	弥生土器 壺	覆土		内湾してたちあがる体部上半。 外面に上から櫛描波状文、直線文を施し、直線文に沿ねて、円形浮文が1つだけ確認できる。	体部外面、上半はタテハケ、最大径付近はヨコヘラミガキ。 体部内面、上半はナデ、中位はヨコハケ。	1～3㎜大砂粒含 結晶片岩 石英	(内)褐灰 (外)橙	
205	弥生土器 甕	集石 覆土	底径9.2	底面は平底を呈す。 体部はくびれて、内湾気味に大きく外方にたちあがる。	底面はナデ、体部外面は板ナデ。 内面は、ユビオサエ痕をのこす。	0.5～2㎜大砂粒含 結晶片岩	(内) にぶい黄橙 (外)赤	
206	弥生土器 壺	覆土	底径9.8	底面は上げ底を呈す。 体部は内湾気味に大きく外方にたちあがる。	内外面とも剥離のため不明。	1～3㎜大砂粒含 石英 結晶片岩	(内)暗灰黄 (外)橙	
207	弥生土器 甕A$_1$ニ	覆土	口径16.8	内湾してたちあがる体部から屈曲して外反する短い口縁部をもつ。 口縁端部は平坦におさめる。	内外面ともナデ。 頸部外面にユビオサエ痕をのこす。	1～4㎜大砂粒含 石英 砂岩	にぶい黄橙	
208	弥生土器 甕A$_1$イ	集石 覆土	口径16.6	内湾してたちあがる体部から「く」の字状に屈曲して外反する口縁部をもつ。 口縁端部は平坦におさめる。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面はていねいなナデ。 頸部内面にヨコヘラミガキを施し、体部内面はていねいなナデ。	1～3㎜大砂粒含 石英 結晶片岩	明赤褐	
209	弥生土器 甕A$_1$イ	集石 覆土	口径16.0	内湾気味にたちあがる体部から直角に近い角度で屈曲して外反する口縁部をもつ。 口縁端部はやや丸味をおびながら、平坦におさめている。頸部内面にナデによるわずかな凹みが観察できる。	体部外面タテハケのちヨコナデ。 口縁部および体部内面ナデ。	1㎜大砂粒含 石英	橙	
210	弥生土器 甕	集石 覆土	底径5.8	底面はわずかに上げ底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあがる。	体部外面タテヘラミガキ。 底面はナデ、体部内面もナデ。	0.5～2㎜大砂粒含 石英	(内)褐灰 (外)淡黄橙	
211	弥生土器 甕	覆土	底径4.0	底面は平底を呈す。 体部はわずかに内湾気味に外方にたちあがる。	体部外面板ナデ。 底面および内面はナデ。 内面一部にユビオサエ痕をのこす。	1～2.5㎜大砂粒含 結晶片岩	橙	
212	弥生土器 鉢	覆土	底径7.0	高台状の上げ底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあがる。	体部外面はタテヘラミガキ。 底部外面ヨコナデ、底面はナデ。 体部内面はヨコヘラミガキ。	0.5～1.5㎜大砂粒含 結晶片岩 納豆母	にぶい橙	

番号	器種	地点 層位	長軸 (cm)	短軸 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	胎土	色調	備考
213	土製紡錘車	覆土	3.0	2.5	0.6	0.4	4.66	1～3㎜大砂粒含 結晶片岩 石英	橙	土器片利用。
214	土製紡錘車	覆土	4.5	(2.8)	1.0	0.5	(14.22)	1～3㎜大砂粒含 結晶片岩 石英	橙	土器片利用。